

大野城跡 1

－第 40・45・45-2・48 次調査報告書－

平成 27(2015)年

太宰府市教育委員会



大野城跡南端部（西から）



原口城門付近遠景（第40次調査、東から）



原口城門（第40次調査、上が東）



大石垣 残存状況（第45次調査、南西から）



大石垣正面 石垣断面状況（第45次調査、西から）



観世音寺口城門遠景（第48次調査、南東から）



観世音寺口城門（東から）

序

天智天皇4年（西暦665年）に築造された大野城は、日本100名城にも選定され、現在多くの方が訪れておられます。古代最大級の山城である大野城は、北側にむかって馬蹄形に開く四王寺山の頂部をめぐるように土塁・石塁を築いた城で、その土塁線の南西部から東側にかけての斜面側に太宰府市は位置しています。

平成15年7月におきた北部九州豪雨では、四王寺山全体で400ヶ所におよぶ土砂崩落がおこり、土塁・石塁も大きな被害を受けました。その後、福岡県教育委員会と太宰府市教育委員会が史跡の災害復旧事業を行いました。本書はその際に実施した埋蔵文化財調査の報告書です。

調査では、古代の人びとが丁寧かつ高度な技術で積み上げた土塁や石塁の状況が明らかとなりました。また、思いがけないことに、新たに城門が2ヶ所で発見され、それぞれ原口城門、観世音寺口城門と名づけられています。城門は北側の土塁線でも発見が続き、それまで4ヶ所知られていた大野城城門は、現在では9ヶ所に増えています。こうした成果とともに、本来なら災害復旧工事についての報告も併せて行うべきところですが、諸般の事情により、大野城築城1350年となる今年、調査報告を先に刊行する運びとなりました。

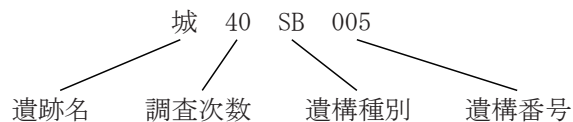
本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

結びになりますが、文化財保護に対してご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成27年3月
太宰府市教育委員会
教育長 木村 甚治

例言

1. 本書は、平成 15 年 7 月に北部九州を襲った豪雨で毀損した特別史跡大野城跡の災害復旧事業に際して実施した、大野城跡第 40・45・45-2・48 次調査の埋蔵文化財調査報告書である。ここでは調査についてのみ報告を行い、復旧整備については別途報告を行う。
2. 調査整理は本市で作成した調査指針に則って行っている。
3. 遺構の実測及び写真撮影は、各調査担当者が行ったほか、地形測量を（株）埋蔵文化財サポートシステム、（株）アジア航測が行い、写真撮影を（株）アジア航測、（有）空中写真企画（代表、壇睦夫）、（有）文化財写真工房（代表、岡紀久夫）が行った。
4. 遺構図は全て国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としている。図中に記載される方位は、特に注記のない限り日本測地系による座標北（G.N.）を指している。なお一部の図には世界測地系を表記したものもある。
5. 調査次毎に各遺構には通し番号をつけている。基本的に遺構番号は調査整理報告保管まで一貫して変わらない。よって本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、遺跡名、調査次数を省略するものもある。



6. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。
 - 土器 『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第 7 集 太宰府市教育委員会 1983 年
『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－』
太宰府市の文化財第 10 集 太宰府市教育委員会 1992 年
 - 陶磁器 『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』
太宰府市の文化財第 49 集 太宰府市教育委員会 2000 年 3 月
 - 瓦 『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
九州歴史資料館 2000 年 10 月
7. 製図・浄書は木戸雅美、森部順子、久家春美・福井円が、デジタルトレースは井上信正のほか、瀬戸口みな子、市川晴美が行った。
8. 整理作業および本書の執筆・編集は、井上信正が行った。執筆に際しては、位置と環境本文および城戸康利・松浦智が担当した第 40・45 次調査の遺構本文については、松浦が調査後に記した原稿を参考とし、城戸の補佐を得ながら作業を進めた。なお本調査の内容は、城戸・井上が執筆した福岡県教育委員会刊行の『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ 上巻』（福岡県文化財調査報告書第 225 集、2010 年）の内容と重複する部分も含まれるが、一部加筆修正を行った部分もある。
9. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

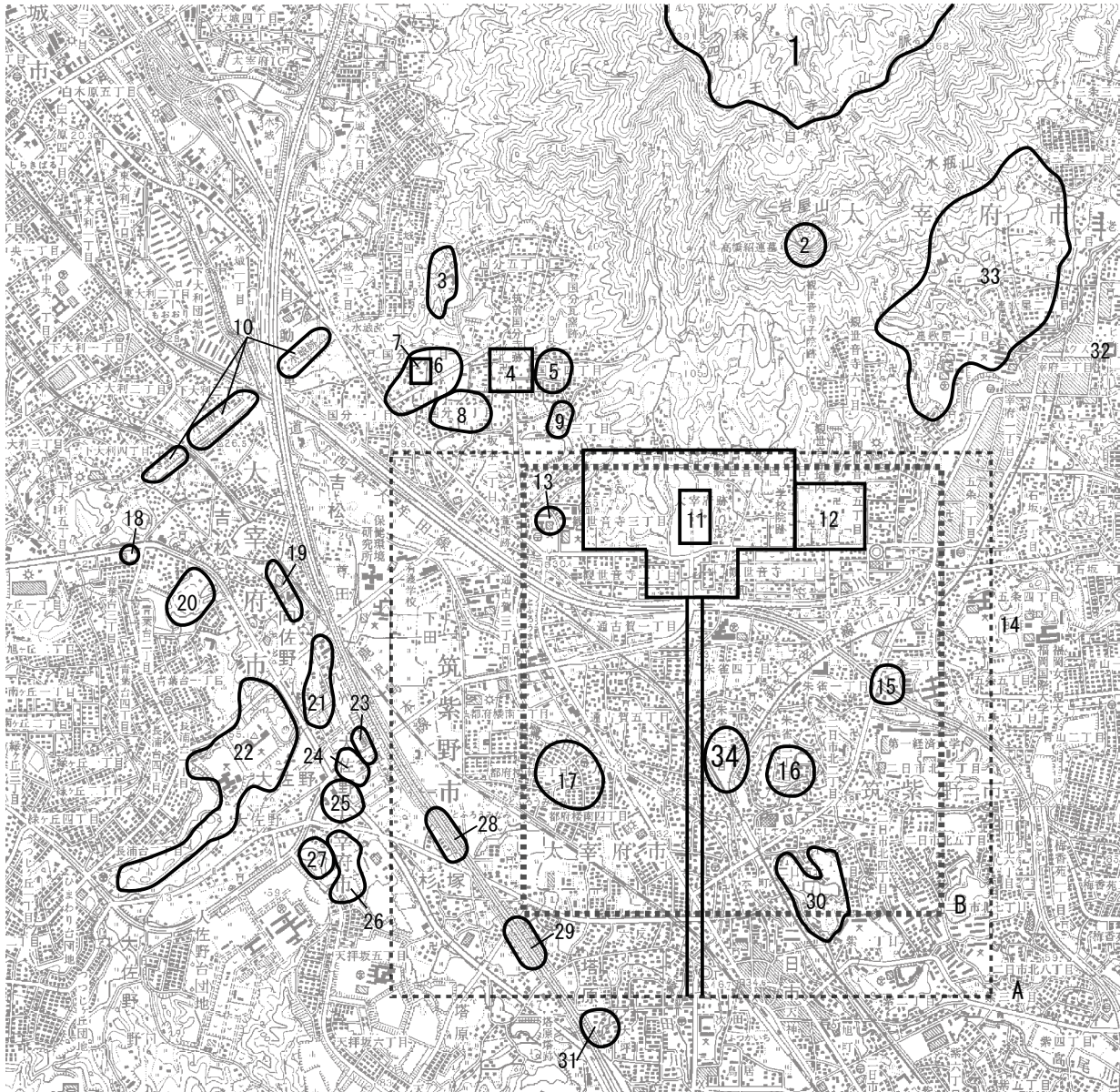
目次

I. 調査の位置と環境	1
II. 調査組織	3
III. 調査の概要	7
III-1. 第40次調査	
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の概要	7
3. 遺構	7
4. 遺物	15
5. 小結	25
III-2. 第45次調査	
1. 調査に至る経緯	30
2. 調査の概要	30
3. 遺構	30
4. 遺物	
a. 土器・瓦類	35
b. 木製品	43
III-3. 第45-2次調査	
1. 調査に至る経緯	48
2. 調査の概要	48
3. 遺構	48
4. 遺物	50
III-4. 第48次調査	
1. 調査に至る経緯	57
2. 調査の概要	57
3. 遺構	57
4. 遺物	64
5. 小結	69

写真図版

遺構 Pla. 1～34

遺物 Pla. 35～36



- | | | | |
|------------|---------------|-----------|----------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 桶田山遺跡 |
| 5. 辻遺跡 | 14. 五条遺跡（峯薬師） | 23. 雛川遺跡 | 32. 太宰府天満宮（安楽寺跡） |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 推定客館跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | A 大宰府条坊跡（鏡山案） |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前窯跡 | 27. 殿城戸遺跡 | B 大宰府条坊跡（井上案 政庁Ⅱ・Ⅲ期） |

図1 太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

I. 調査の位置と環境

太宰府市は福岡平野の南東部に位置する。ここは福岡平野から筑紫平野へ抜ける狭長な二日市低地帯の北西部にあり、古代から現在に至るまで交通の要衝である。この低地帯の北西部は、北は三郡山地、南は脊振山系から派生する丘陵が迫り、また東は高雄山をはじめとする丘陵と三方を取り囲まれ、この間を博多湾に向かって流れる御笠川、鷺田川、大佐野川などの河川によって小平野が形成されている。律令官衙・大宰府、また古代都市・大宰府条坊はこの平野に設けられた。

大宰府政庁や「府の大寺」として知られる観世音寺の北には、現在の太宰府市、大野城市、宇美町の2市1町にまたがる標高410mを最高所とする四王寺山がある。四王寺山は北側に大きな谷を取り込んで尾根線がめぐっており、馬蹄形を呈しているが、本書で報告する大野城は、その山頂部に築かれた日本最大級の古代山城である。大野城がおかれた四王寺山から西南方へ延びる丘陵は水城へと連なり、一体的に博多湾方面からの侵攻に対する防衛線を形成している。

大野城の主な遺構には土塁や石塁、城門、礎石建物などがある。土塁は尾根に沿ってめぐらされており、土塁が谷を通過する部分は石塁を築いている。その総延長は約8kmで、南側と北側は二重になっている。土塁は高さは6～8mを測り、基本的に版築工法で築かれているが、中には自然地形を削りだして城壁とした部分も確認されている。石塁は城の北側で百間石垣、北石垣、小石垣の3ヶ所、南側では大石垣、水ノ手石垣が知られており、土塁を切る谷部に花崗岩の割石を高く積み上げて構築している。城内へ通じるための城門は南側に水城口、坂本口、太宰府口城門の3ヶ所、北側には大石垣の宇美口城門の1ヶ所の計4ヶ所が知られていたが、平成15年から現在までに5ヶ所の城門が新たに確認された。見つかった城門は、原口城門（本書報告）・観世音寺口城門（本書報告）・北石垣城門・小石垣城門（唐居敷のみ確認）・クロガネ岩城門と名づけられ、合計9ヶ所となっている。江戸時代後期に書かれた青柳種信の「筑前国統風土記拾遺」の記録によると門が7ヶ所あったとするが、それより増えており、さらに増える可能性もある。

城内は北側の谷に向かって延びる尾根の平坦面を利用して建物が配置されている。これまでに7ヶ所、約70棟余りの礎石群が確認されている。これらの建物のほとんどが梁行3間、桁行4間ないし5間の総柱建物で、各中間の寸法も7尺（2.1m）等間のきわめて規格性に富んだ構造である。

その築造には、古代東アジア情勢が大きく関わっている。

7世紀代の朝鮮半島は北部の高句麗、東部の新羅、西部の百済の三国が対立関係にあり、660年には唐により百済が滅亡すると、倭（日本）は百済救援のために朝鮮半島に出兵した。天智天皇2（663）年に朝鮮半島西部の白村江で唐・新羅の連合軍と海戦を行い、倭は大敗し、多くの百済人とともに朝鮮半島から退却した。倭は唐・新羅の本土侵攻を恐れ、北部九州では国防の最前線として辺境防備が行われた。白村江敗戦の翌天智天皇3（664）年には対馬・壱岐・筑紫国に防人・烽を設置するとともに、福岡平野と筑紫平野を結ぶルートを塞ぐよう、現在の太宰府市の北西部に水城を築造した。そしてその翌年築かれたのが、大野城・基肆城である。『日本書記』天智天皇4（665）年秋八月条には、「遣達率答怱春初 築城於長門国、遣達率憶礼福留 達率四位福夫於筑紫国 築大野及椽二城」とあり、長門国の城（長門城）と大野城・基肆城が亡命した百済貴族の指揮・技術によって築造されたことがわかる。文武天皇2（698）年になると、大野城・基肆城・鞠智城が修繕されたことが『続日本紀』に記されているが、大野城でも太宰府口城門など7世紀末から8世紀にかけて複数回の修繕が行われていたことが確認されている。大宝律令によって律令大宰府がスタートする。大野城には城司が置かれ、時に大宰府、時に筑前国が監した。宝亀5（774）年、新羅の呪詛を警戒して軍事施設である大野城城



図2 調査地の位置 (1/10,000、網掛けは史跡・特別史跡の範囲及び調査区)

城○次…大野城跡第○次調査
史○次…大宰府史跡第○次調査

内に四王院が置かれ、増長天や広目天などの四天王像を安置した。史料には貞観年間（9世紀後半）まで大野城が機能していたことを窺うことができるが、まもなく廃されたとみられている。ただ宗教機能はその後にも維持されたとみられ、平安時代後期の経筒の出土や、一遍上人が青少年期に修行した東南麓の原山が四王院を起源とする伝承をもつこと等がそのことを示している。

中世になると四王寺山の東南裾には、守護の少弐氏の持城であったと比定されている浦ノ城がおかれ、郭跡（人為的平坦面）が確認されている。また四王寺山南斜面の林道沿いの尾根上には15世紀に豊前の大友氏に仕えた高橋紹運の支城である岩屋城があり、本丸、二の丸、三の丸と伝えられる郭跡が残っている。また大野城の南側の土塁は外周、内周と二重になっているが、その間にも岩屋城に伴うと考えられている郭跡が3ヶ所確認される。19世紀初頭に書かれた絵図「大宰府旧蹟全図北図」にも大野城のことも詳細に記されている。この中に山道が幾つか描かれており、その山道と大野城の土塁線が直交する地点に「門石スエ」（5ヶ所）や「大人足形」と記されており、そのうち5ヶ所は大野城の城門と確認されている（「大人足形」は本書報告の原口城門と推定される）。

大野城は、昭和7（1932）年7月23日、国の史跡に指定され、昭和28（1953）年3月31日、国の特別史跡に指定された。

平成15年7月は梅雨末期の大雨に見舞われ、18日から19日早朝にかけて時間雨量99ミリを最大とする豪雨が続き、太宰府市域では数十年に一度という災害を引き起こした。四王寺山全体で400ヶ所余りの土砂崩落起こり、人命も奪われる大惨事となったが、大野城跡もこれを免れることはできず、大石垣の大規模損壊、既知の土塁の崩落など大きな被害となった。これに伴う災害復旧工事は平成20年度まで続くことになるが、工事に先立つ発掘調査が福岡県教委および太宰府市教委で進められ、前述のように城門が新たに発見されるなど、大野城跡についての情報が飛躍的に増えたのは画期的なことであった。このころ、大野城跡の南東にある筑紫野市宮地岳西麓での阿志岐山城（平成17年国史跡指定）の発見をはじめ、全国の古代山城調査が進み、現在、古代山城研究が盛んに進められている。これとともに、「古代山城サミット」といった古代山城を擁する自治体間交流もはじまり、太宰府地域一帯でも、水城・大野城・基肆城が築かれて1350年となる平成26・27年には関連自治体共同で実行委員会を立ち上げてPR企画を行うなど、史跡を活かしたまちづくりの機運も高まっている。

Ⅱ．調査組織

（平成16／2004年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人（4月1日～）
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月30日） 齋藤実貴男（7月1日～）
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利（第40次調査整備担当）
	技術主査	山村信榮 中島恒次郎

主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 柳 智子 渡邊 仁 長 直信 松浦 智（第40次調査担当）

（平成17 / 2005年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美（～6月30日） 齋藤廣之（7月1日～）
調査	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
	事務主査	大石敬介
	主任主査	城戸康利（第45次調査整備担当） 山村信榮 中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学 宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子 柳 智子 長 直信 松浦 智（第45次調査担当）

（平成18 / 2006年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
調査	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男 吉原慎一（7月1日～）
	事務主査	大石敬介（～6月30日）
	主任主査	城戸康利（第45-2次調査整備担当）

		山村信榮
		中島恒次郎
技術主査		井上信正 (第 45-2 次調査担当)
主任技師		高橋 学
		宮崎亮一
技師 (囑託)		柳 智子
		下高大輔

(平成 19 / 2007 年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人 (～9月30日)
		松田幸夫 (10月1日～)
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日)
		菊武良一 (10月1日～)
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 (第 48 次整備担当)
		山村信榮
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正 (第 48 次調査担当)
	主任技師	高橋 学
		宮崎亮一
	技師 (囑託)	柳 智子
		下高大輔 (第 48 次調査担当)
		大塚正樹
		端野晋平

(平成 20 / 2008 年度)

※ 整理作業

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎

技術主査	井上信正（整理担当）
主任技師	高橋 学 宮崎亮一
技師（嘱託）	柳 智子 下高大輔 大塚正樹

（平成 26 / 2014 年度） ※ 報告

総括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	堀田徹
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	廣見京子
	主事	有田ゆきな 久木原駿史
調査	主任主査	井上信正（報告担当） 高橋 学 宮崎亮一
	主任技師	遠藤 茜
	技師	沖田正大 中村茂央

景観・歴史のまち推進係
係長

中島恒次郎（文化財課事務取扱）



fig40-1 大野城跡第40次調査 全体図 (1/500)

Ⅲ．調査の概要

Ⅲ－1．第 40 次調査

1．調査に至る経緯

第 40 次調査は、太宰府市大字太宰府 1491-14 外（大野城跡原地区）に所在する。

ここは大野城跡の東南部にあり、太宰府口城門・尾花地区礎石群の北東方向に位置する。東南に下る斜面の最上部に大野城の土塁が設けられ、土塁外側は尾根をはさんで南北 2 条の谷斜面となっている（以下、それぞれ北地区・南地区と呼ぶ）。平成 15 年 7 月 19 日の集中豪雨では、それぞれの斜面下位が崩落して土石流が発生、土砂は中腹で合流し山裾の民家等に流れ込み大きな被害をもたらした。この崩落の影響が谷の最頂部にも及び、大野城外周をめぐる土塁外面が毀損を受けたとみられている。

ここは宇美町との行政界となっているが、福岡県・宇美町等と協議を行い、太宰府市教育委員会で崩落毀損した土塁の調査を行い、その成果をもとに災害復旧工事を行うこととなった。調査の結果、北地区・南地区ともに高さ 6～7 m 程の版築土塁が確認された。また南地区では土塁線を切る形で城門が築造されていたのを確認した。

調査は平成 16 年 12 月 20 日から平成 17 年 3 月 31 日の期間で実施した。対象面積は 1,500 m²、調査面積は約 400 m²。土器・瓦などコンテナ 8 箱出土した。調査は城戸康利・松浦智が担当した。遺構図の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに実測等委託を行った。整理報告は井上信正が行った。なお遺構、小結については調査担当者の原稿を基に井上が編集し、一部加筆修正等を行った。

2．調査の概要

調査区は土塁が崩落した地点で、北地区と南地区の 2 箇所に分かれる。

いずれの地区も、土塁の版築の状況を確認することを目的として土塁外壁面の精査を行った。その結果、両地区とも土塁は高さ 6～7 m 程の版築盛土であると確認されるとともに、南地区では城門跡を確認した（原口城門）。城門では、柱跡とみられる対となる柱穴や扉の軸摺り穴を持つ石が確認されており、建て替え 1 回、門道石垣の修理 1 回と判断される。

3．遺構

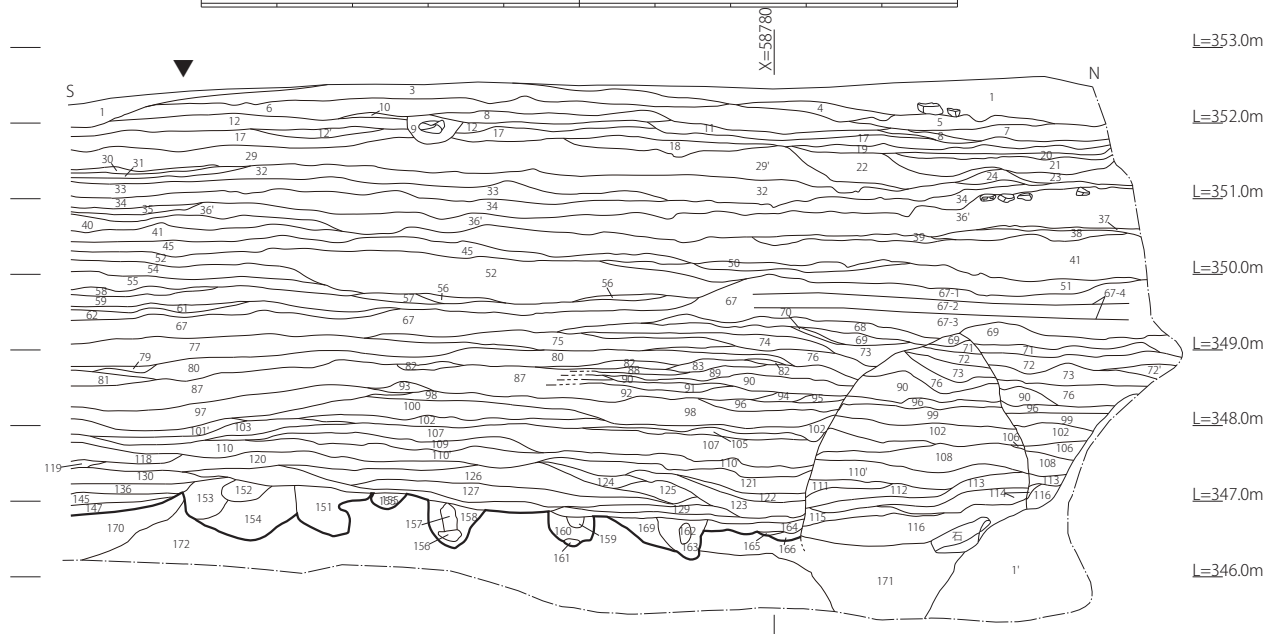
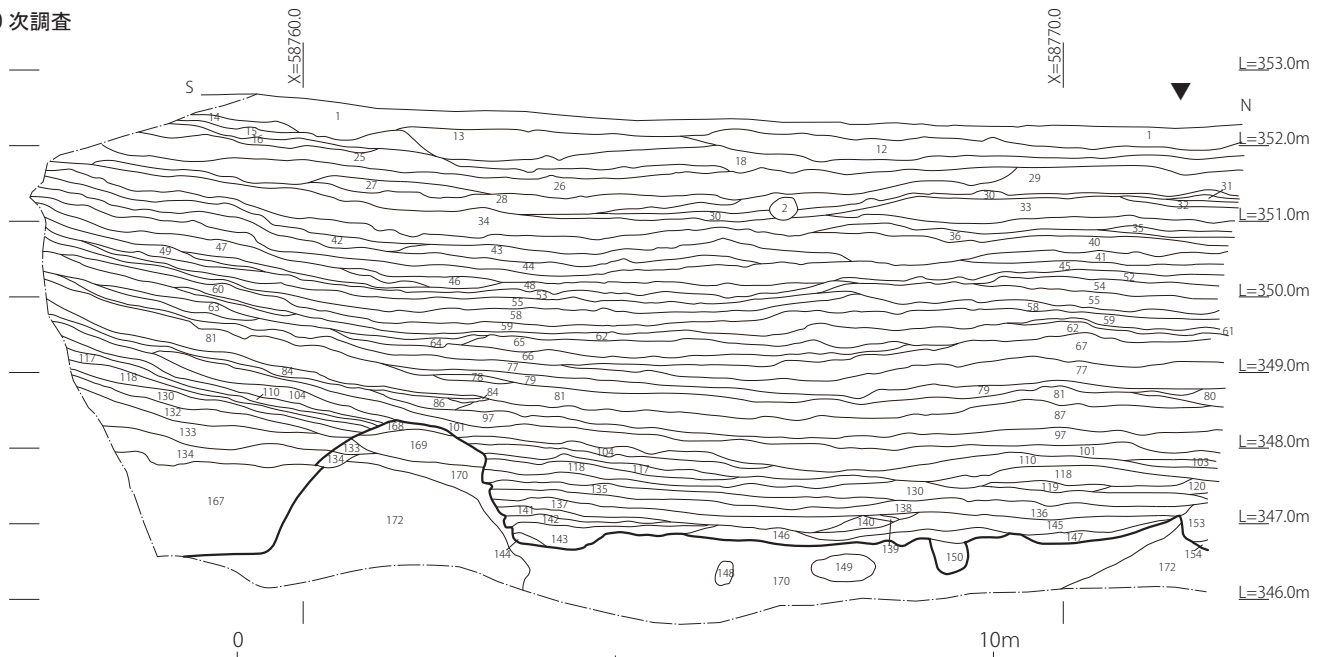
土塁

北地区土塁（fig40-2）

北地区は、土塁上端での長さで約 30 m にわたって土塁外面を調査した。土塁は版築土塁で、基底部からの高さは約 6 m を測り、勾配は 6～7 分である。平面形は元来アーチ状の土塁であったものの表層が剥離したように崩壊している。基底部も崩壊し、版築部分と同様の勾配になっている。

土塁基底部は新鮮な岩盤質の花崗岩風化土の地山である。積土との境では炭化物が散漫に検出されるが、明確な旧表土は検出していない。なお基底部には谷があったことが確認された。崩落部やや南に中心をもち、暗黄色粘質土が堆積している。非常に粘質が強くロームに似た感触である。基底部に約 1.5 m 間隔で小穴を掘り込んでいる。谷の北側部分でのみ柱痕跡と考えられるものも確認した。また、基底部との境でくれこんで崩壊している部分の観察で、地山を段切りしながら版築を行っていることも明らかとなった。

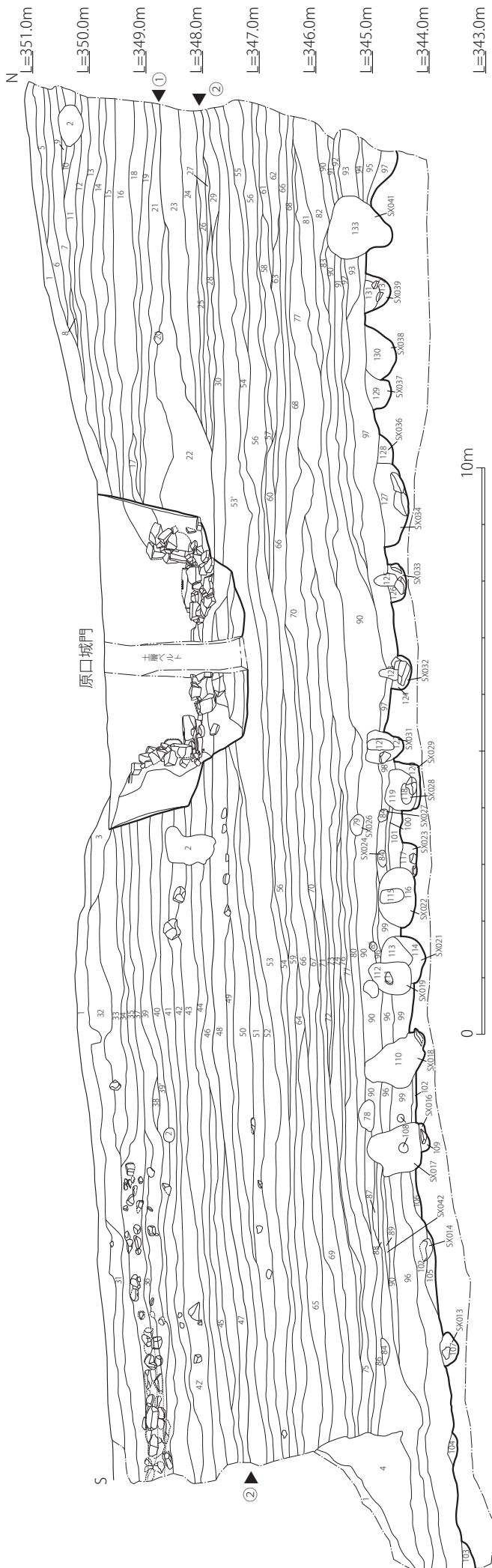
版築積土は大きく分けて 3 層に分かれる。各版築層厚は全体で 4～50 cm とばらつきがみられるが、上層と下層が細かく、中層に厚い層が多い。土質の構成をみると、上層は粘質の赤土と白色砂質土の



土層名

- | | | | | |
|-------------------------|--------------------------|-----------------------------------|------------------------------|----------------------|
| 1. 表土 | 37. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 72. 褐色真砂土 | 110. 明褐色真砂土 (H'ガ'リ) | 149. 黄茶色真砂土 |
| 1' 崩落土 | 38. 黄色真砂土 | 72' 褐色真砂土 | 110' 白色真砂土+粘土 | 150. 黄茶色真砂土 |
| 2. 樹根 | 39. 褐色真砂土 | 73. 白色真砂土 | 111. 白色真砂土 (層の上下に薄く茶色粘土層入る) | 151. 茶色土 |
| 3. 赤色真砂土 | 40. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 74. 白色真砂土+粘土 | 112. 白色真砂土+粘土 | 152. 暗茶色土 |
| 4. 赤色真砂土+粘土 | 41. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 75. 肌色真砂土 (H'ガ'リ) | 113. 白色真砂土+粘土 | 153. 明茶色土 |
| 5. 白色真砂土 | 42. 桃色真砂土 | 76. 肌色真砂土+粘土 | 114. 桃色真砂土+粘土 | 154. 明茶色粘質土 (地山の上の方) |
| 6. 白色真砂土 | 43. 桃色真砂土 (砂っぽい) | 77. 黄色真砂土 (H'ガ'リ) | 115. 白黄色真砂土 | 155. 茶色土 |
| 7. 赤色真砂土+粘質土 | 44. 褐色真砂土+粘土 | 78. 褐色粘土 | 116. 白色真砂土+粘土 (硬質) | 156. 青白色粘土 |
| 8. 白黄色真砂土 | 45. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 79. 褐色真砂土 (H'ガ'リ) | 117. 褐色真砂土 (H'ガ'リ) | 157. 暗褐色土 |
| 9. 茶色土 | 46. 褐色真砂土 | 80. 肌色真砂土+粘土 | 118. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 158. 茶色土 |
| 10. 黄色真砂土 | 47. 褐色真砂土+粘土 | 81. 明茶色真砂土 (H'ガ'リ) | 119. 茶色真砂土+白色真砂土 | 159. 黄茶色土 |
| 11. 赤色粘土 | 48. 黄色真砂土 | 82. 赤色粘土 | 120. 茶色真砂土+粘土 | 160. 茶色土 |
| 12. 赤色粘土 | 49. 桃色真砂土+粘土 | 83. 桃色真砂土 | 121. 茶色真砂土 (炭化物あり) | 161. 茶色土 |
| 13. 赤色真砂土+粘土 | 50. 褐色真砂土 | 84. 褐色真砂土+白色粘土 | 122. 白色真砂土 | 162. 茶色土 (砂?) |
| 14. 白褐色真砂土 | 51. 白色真砂土 | 85. 褐色粘土 (鉄沈着あり) | 123. 褐色真砂土+粘土 | 163. 白色真砂土+鉄分 |
| 15. 白色真砂土+粘土 | 52. 白色真砂土 硬い (H'ガ'リ) 礫入り | 86. 暗褐色真砂土 | 124. 茶色真砂土 | 164. 白色真砂土+鉄分 |
| 16. 白色真砂土 | 53. 桃色真砂土 | 87. 白色真砂土 (H'ガ'リ)+赤色粘土 ※88~92層を含む | 125. 白色真砂土 | 165. 赤色粘土 |
| 17. 白色真砂土 (硬い) | 54. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 88. 白色真砂土 | 126. 黄色真砂土 (礫あり) | 166. 白色真砂土 (硬い) |
| 18. 赤色粘土 | 55. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 89. 茶色真砂土+粘 | 127. 黄色粘質土 | 167. 暗茶色粘質土 |
| 19. 赤色真砂土+粘土 | 55' 白色真砂土 | 90. 桃色真砂土 | 128. 茶色真砂土+粘土 (硬い) | 168. 暗茶色粘質土 |
| 20. 赤色粘土 | 56. 赤色粘土 | 91. 白色真砂土 | 129. 茶色真砂土 | 169. 明褐色真砂土 |
| 21. 赤色真砂土+粘土 | 57. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 92. 茶色真砂土+粘土 | 130. 白色真砂土 | 170. 暗茶色粘質土 (地山) |
| 22. 白色真砂土 (濃淡あり) | 58. 灰褐色真砂土 | 93. 赤色粘土 | 131. 白色真砂土 | 171. 茶色粘質土 (地山の上の方) |
| 23. 白色真砂土 | 59. 白色真砂土+(H'ガ'リ) | 94. 白色真砂土 | 132. 白色真砂土 | 172. 鬼真砂土 (地山) |
| 24. 黄色真砂土 | 60. 黄色真砂土+粘土 | 95. 茶色真砂土+粘土 | 133. 桃色真砂土 (H'ガ'リ) | |
| 25. 白色真砂土+粘土 | 61. 灰褐色真砂土 | 96. 白色真砂土 | 134. 褐色真砂土 (H'ガ'リ) | |
| 26. 赤色粘土 | 62. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 97. 桃色真砂土 (H'ガ'リ) | 135. 桃色真砂土 (H'ガ'リ) | |
| 27. 白茶色粘土 | 63. 褐色真砂土+粘土 (白色ア'あり) | 98. 白色真砂土+粘土 | 136. 茶色真砂土+白色真砂土 | |
| 28. 白色真砂土+粘土 (礫入り) | 64. 桃色真砂土 (H'ガ'リ) | 99. 褐色真砂土+粘土 (茶色粘土が薄く層状に入る) | 137. 褐色真砂土 | |
| 29. 赤色粘土 (黄色真砂土を挟む部分あり) | 65. 黄色真砂土 (H'ガ'リ) | 100. 白色真砂土+粘土 | 138. 白茶色粘土 | |
| 29' 赤色粘土+真砂土 | 66. 白褐色真砂土 (H'ガ'リ) | 101. 褐色真砂土 (H'ガ'リ) | 139. 白色真砂土 | |
| 30. 赤色粘土 | 67. 白色真砂土 (H'ガ'リ) | 101' 青白色真砂土 (H'ガ'リ) | 140. 白茶色粘土 | |
| 31. 茶色粘土 | 67-1 黄色真砂土 | 102. 桃色真砂土+粘土 | 141. 黄色真砂土 | |
| 32. 黄色真砂土 (礫入り, 硬い) | 67-2 白色真砂土 | 103. 青白色真砂土 (H'ガ'リ) | 142. 褐色真砂土 | |
| 33. 褐色真砂土+粘土 | 67-3 白色真砂土 | 104. 褐色真砂土 | 143. 白褐色真砂土 | |
| 34. 褐色真砂土 (礫入り) | 67-4 赤色粘土 | 105. 白色真砂土 | 144. 白色粘土 (周囲は鉄沈着あり) | |
| 35. 白色真砂土 | 68. 茶色真砂土 | 106. 褐色真砂土+粘土 | 145. 橙白色真砂土 | |
| 36. 白色真砂土 | 69. 白色真砂土 | 107. 白色真砂土 | 146. 白茶色粘土 (地山っぽい) と白色真砂土の混合 | |
| 36' 白色真砂土 (小礫入り) | 70. 赤色粘土 | 108. 茶色真砂土+粘土 | 147. 白色真砂土 | |
| | 71. 黄褐色真砂土 | 109. 白色真砂土 | 148. 黄茶色真砂土 | |

fig40-2 大野城跡第 40 次調査 北地区 土塁外側崩落部土層図 (1/100、▼印付近で土層が重なる)



- | | | | | | | | |
|-----------------|---------------------|--------------|-----------------|---------------|---------------|-------------------------|-------------------------|
| 土層名 | 1 暗褐色真砂土 | 21 暗褐色真砂土② | 41 黄色真砂土+粘土 | 61 白・茶色真砂土② | 80 黄色真砂土 | 101 暗褐色真砂土 | 121 暗褐色真砂土 (SK031) |
| 2 樹根カクラン | 22 赤色真砂土②+赤色粘のうすい層 | 42 白色真砂土 | 47 白色真砂土(1'~1") | 62 赤色粘 | 81 暗褐色真砂土 | 102 黄色粘質土 | 122 褐色土 (SK031) |
| 3 暗褐色土 | 23 白色真砂土+赤色粘3層くらい入る | 43 赤色真砂土 | 44 赤色粘土+赤色粘土 | 63 黄色真砂土 | 82 赤色粘質土 | 103 白・茶色粘質土 | 123 暗褐色土 (SK032) |
| 4 赤褐色土 (過去の崩落土) | 24 黄色真砂土 | 45 赤色粘土 | 46 赤色粘土+赤色粘土 | 64 白色真砂土+赤色粘土 | 83 黄色真砂土 | 104 白・茶色粘質土 | 124 褐色真砂土 (SK032) |
| 5 赤褐色土 | 25 赤褐色真砂土 | 46 赤色粘土 | 47 赤色粘土 | 65 黄色真砂土 | 84 黄色真砂土 (硬い) | 105 暗褐色真砂土 | 125 暗褐色土 (SK033) |
| 6 黄色真砂土 | 26 黄色真砂土 | 47 赤色粘土+赤色粘土 | 48 赤色粘土+粘土 | 66 黄色真砂土 | 85 暗褐色土 (硬い) | 106 暗褐色粘質土 | 126 褐色真砂土 (SK033) |
| 7 黄色真砂土 | 27 黄色真砂土 | 48 赤色粘土+粘土 | 49 赤色粘土 | 67 黄色真砂土 | 86 白色粘土 (硬い) | 107 暗褐色土 (硬い) | 127 別図あり (SK034) |
| 8 褐色真砂土 | 28 赤褐色真砂土 | 49 赤色粘土 | 50 白色真砂土 | 68 黄色真砂土 | 87 白色粘土 (硬い) | 108 暗褐色土 (硬い) | 128 暗褐色土 (SK036) |
| 9 褐色真砂土 | 29 赤褐色真砂土 | 50 白色真砂土 | 51 白色真砂土 | 69 黄色真砂土② | 88 赤色粘土 | 109 暗褐色土 (SK016) | 129 暗褐色土 (SK037) |
| 10 褐色真砂土 | 30 白色真砂土 | 51 白色真砂土 | 52 白色真砂土 | 70 黄色真砂土 | 89 赤色粘土 | 110 暗褐色土 (SK019) | 130 暗褐色土 (SK038) |
| 11 白色+赤色真砂土 | 31 白色真砂土 | 52 白色真砂土 | 53 白色真砂土+粘土 | 71 黄色真砂土 | 90 赤色粘土 | 111 白・黄色粘木割 | 131 暗褐色土 (SK039) |
| 12 褐色真砂土② | 32 赤褐色真砂土 | 53 白色真砂土+粘土 | 54 赤褐色真砂土 | 72 黄色粘土 | 91 赤色粘土 | 112 褐色粘土 (SK019) | 132 白・茶色粘 (SK039) |
| 13 褐色真砂土② | 33 赤褐色真砂土 | 54 赤褐色真砂土+粘土 | 55 赤褐色真砂土 | 73 黄色粘土 | 92 赤色粘土 | 113 白・黄色真砂土 (SK021) | 133 暗褐色土 (軟らかい) (SK041) |
| 14 暗褐色真砂土② | 34 白色真砂土 | 55 赤褐色真砂土+粘土 | 56 赤褐色真砂土② | 74 黄色粘土 | 93 褐色真砂土 | 114 白色真砂土 (SK022) | |
| 15 白・茶色真砂土② | 35 赤褐色真砂土 | 56 赤褐色真砂土+粘土 | 57 赤褐色真砂土 | 75 黄色粘土 | 94 黄色真砂土 | 115 暗褐色土 (軟らかい) (SK022) | |
| 16 白・茶色真砂土 | 36 赤褐色真砂土 | 57 赤褐色真砂土+粘土 | 58 赤褐色真砂土② | 76 黄色粘土 | 95 白色真砂土 | 116 褐色土 (SK022) | |
| 17 白色真砂土 | 37 白色真砂土 | 58 赤褐色真砂土+粘土 | 59 赤褐色真砂土② | 77 黄色粘土 | 96 赤色粘土 | 117 白・黄色真砂土 (SK023) | |
| 18 赤色粘② | 38 赤褐色真砂土 | 59 赤褐色真砂土+粘土 | 60 白色真砂土 | 78 黄色粘土 | 97 赤色粘土 | 118 白・黄色粘 (硬い) (SK028) | |
| 19 白色真砂土 | 39 赤褐色真砂土 | 60 白色真砂土 | 61 赤褐色真砂土② | 79 黄色粘土 | 98 赤色粘土 | 119 褐色土 (SK028) | |
| 20 褐色粘 | 40 白色真砂土+粘土 | 62 赤褐色真砂土② | 63 赤褐色真砂土 | 80 黄色粘土 | 99 赤色粘土 | 120 褐色真砂土 (SK029) | |

fig40-3 大野城跡第40次調査 南地区 土塁外側崩落部土層図 (1/100)

①・・・門造作のためのスロープと考えられる面
 ②・・・門を造る時の基底部と考えられる面

細かい互層で赤土の層が多いながらもわりと規則正しく積まれている。中層は厚い赤土とバサバサの花崗岩風化土で、厚いながらも硬く締まって積まれている。下層は分層したなかでさらに分層可能なほど細かく分かれている。新鮮な花崗岩風化土を打ち割って使用したと考えられる土質で、たいへん硬質に積んでいる。積み方は基本的に水平だが、南側は地形に沿って斜めに上がっている。なお、工区境を示すような積み手の違いは確認されなかった。

南地区土塁 (fig40-3)

南地区は、土塁上端での長さで26 mにわたって土塁外面を調査した。土塁の南北両端で1.5 mの比高差があり、北側が高くなっている。土塁は版築土塁で、基底部からの高さは約6 mを測り、勾配は6～10分である。なお、土塁中央部には大野城の城門が設置されていたことが本調査で初めて明らかとなった(原口城門)。

土塁が設けられたのは丘陵の鞍部とみられ、城内側にも城外側にも下っている。地山は暗黄色粘質土で、その下層は黄色～明黄色粘質土で構成される。新鮮な花崗岩風化土は城門内側で検出されたが、崩落面の基底部では見つからなかった。

土塁基底部には北地区同様、小穴がある。ここには基底部から穿ったものと数層積土して穿ったものがある。間隔はおよそ1.4～2 mである。小穴の一部には柱を固定するためと考えられる石が入れられた状況や、柱痕跡が確認された。柱痕跡は積土の中に埋め殺しの状態で土塁側にすこし傾いて検出したものもあれば、積土に直角になっているものもある。

版築積土は基底部から約3 m、城門の基底部までは地形に沿って南に向かって下がりつつも、ほぼ水平に積まれている。白色～褐色の花崗岩風化土を主体としたもので、間に茶色粘質土が挟まれている。層厚は5～40 cmあり、全体に厚い。城門基底部より上では、南側は下層と同様の積み方を示すが、北側ではスロープ状の積み方をしている部分がある。層厚は5～30 cmであり、白色～赤色の花崗岩風化土を主体とし、花崗岩風化土と粘質土を混合したと考えられるものや赤色粘質土が使われている。特に北側のスロープ状の積土とスロープを埋めたような積土は花崗岩風化土に薄い赤色粘質土を互層にしているようすが確認できた。スロープは城門を設置する際に設けたものと考えられる。

なお、城門南側の土層では拳～人頭大の花崗岩がはまっていた。北側土塁の北側で発見した石積みと同様のものの可能性もあるが、版築積土への埋まり方から、土塁の材料として使われたものと考えている。これらの石はさらに南へ広がっている。

南地区土塁基底部の柱穴

40SX014 (fig40-3・6)

平面円形プランの柱穴の掘り方を確認した。柱が土塁の傾斜に沿って立てられていたことが確認され、柱の周りには固定のための花崗岩製の石が3つ置かれていた。その上に版築層を確認した。柱痕から須恵器片1点が出土している。

40SX016・017 (fig40-3・6)

2つの柱穴が切り合って検出され、同時に断ち割って断面観察を行った。上位の柱穴からは柱を固定するために斜めに打ち込んだ直径10 cm前後の木杭とみられる痕跡を確認した。下位の柱穴には花崗岩製の扁平石が立った状態で置かれており、柱を固定するための根石とみられる。

40SX034 (fig40-3・6)

石の上に柱が立てられていたことを確認した。最下層には粘質の強い土が入っており、石を固定するために入れたものとみられる。

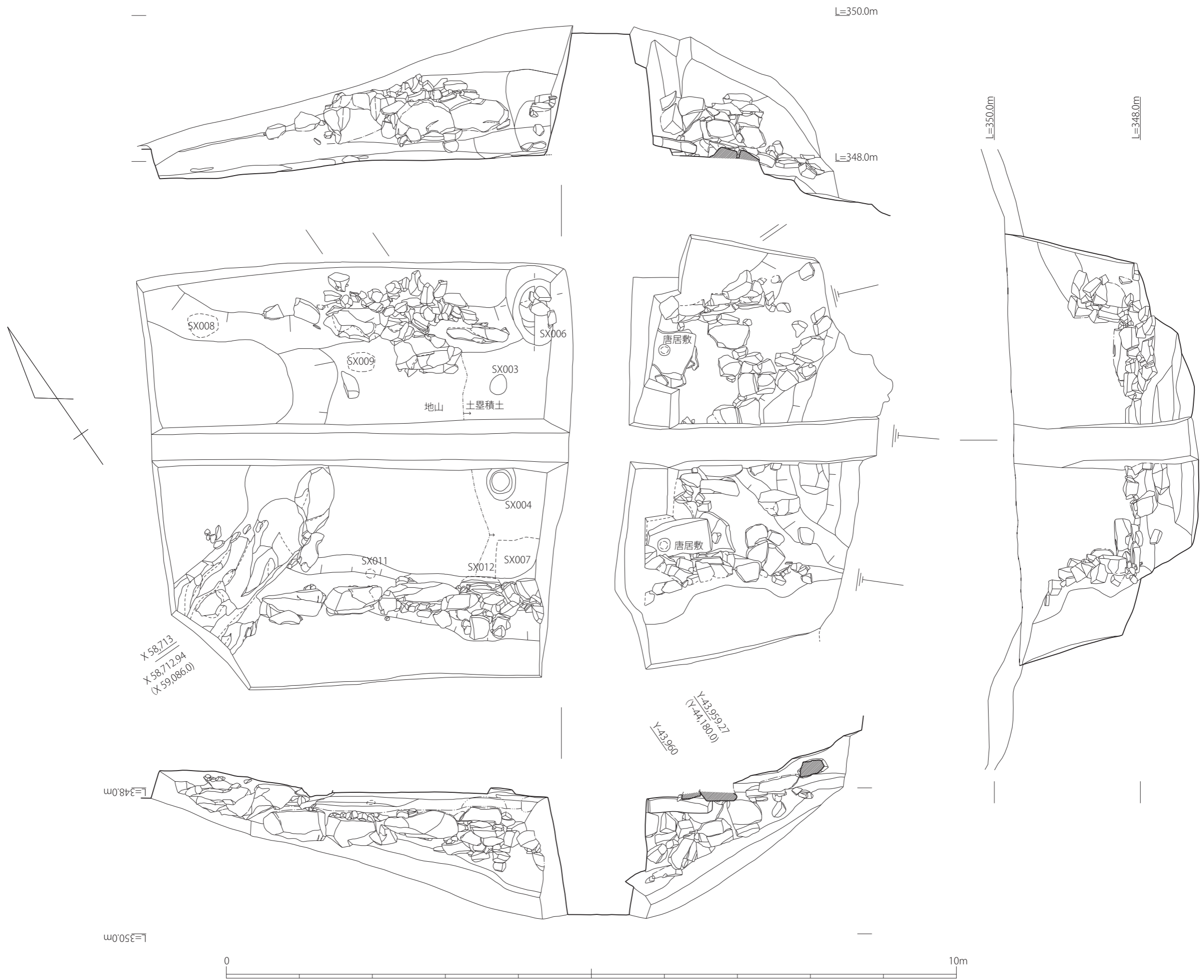


fig40-4 大野城跡第40次調査 SB005 (原口城門) 実測図 (1/100、()内は世界測地系)

40SX042 (fig40-3-6)

土塁基盤層の柱穴 SX014 に切り込んだ植物根による攪乱遺構である。ここから土師器甕片が出土している。

城門

40SB005 (原口城門) (fig40-4-5)

南地区土塁の城内側で、土塁の窪みと土塁に埋没した石を発見したため清掃を行ったところ、土塁線に直交して花崗岩の巨石が並ぶことを確認し、また埋土は土塁積土ではないことを確認した。このため石列と土塁との関係を調査したところ、土塁が窪んでいた部分は切り通しであり、城門だったことが判明した。門の規模は、門に関わる石材の範囲から長さ約 8 m、幅は石垣間の最狭部で 3.24 m 前後、高さは床面－石垣高で 1.15 m 前後、床面－土塁天端で 1.77 m 前後を測る。

門道の南北両側には石垣を設け、門道外側の床面には敷石を施す。門道内側には敷石はみられないが、門道の中央部床面では対となる小穴を確認した (SX006・SX007)。これらは門柱穴とみられる。なお床面敷石部では扉の軸摺穴を持つ石が対となって置かれているのも確認された。ここからは奈良時代の縄目叩き瓦片が多く出土している。

以下、門を構成する各遺構について述べる。

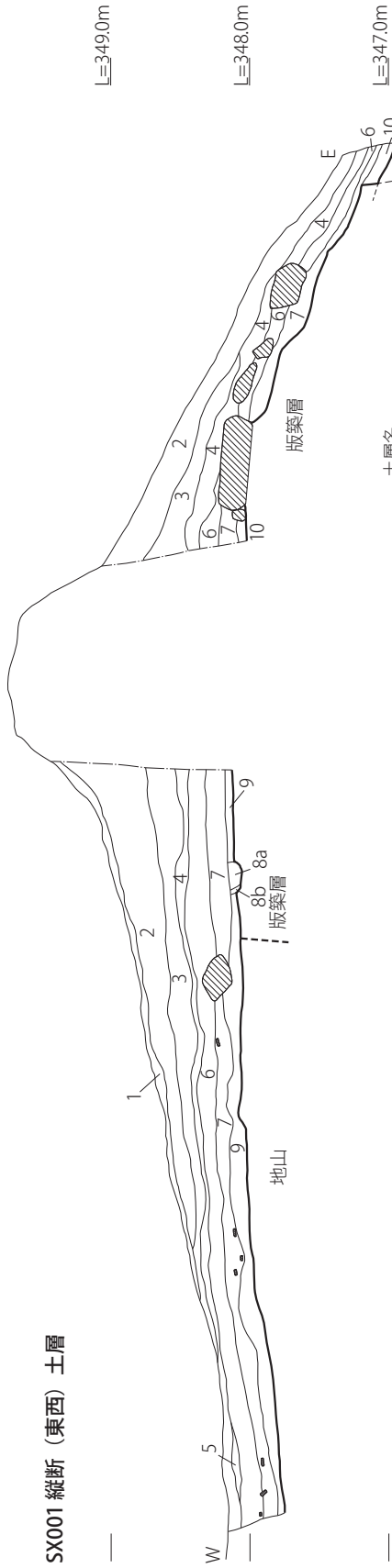
道は土塁線に直交する。門道の中央はほぼ水平である (標高約 348 m 付近)。門道部分は周囲と比べて最も高く、門の内外に向かって緩やかに下っている。城内側には城内にのびる門道 (谷状の窪み) があり、それが城門西端からはじまっていることが観察される。

門道脇は石垣が構築されている。石の積み方はおおよそ土塁線の中心を境に西 (城内側) と東 (城外側) で、その表情が異なっている。城外側については、積み石の残存状態は比較的良い。一人で持ち上げられる程度の径 0.1～0.4 m ほどの花崗岩割石を小口積で 3～5 段程積んでいる。積石の高さは床面から 1～1.2 m を測る。調査の際、崩落石が約 50 個体検出されたことから鑑みて、現状の石垣の上にさらに 2～3 段の石積があったと想定される。その高さは床面から 1.8～2.0 m 程度と予想される。城内側は、1 m ほどの巨石を切り通しに沿って立てて使用している。巨石の下には拳大の根石がみられるものもある。石積み裏には礫や縄目瓦片などを入れている。門道側に向いた石はいずれも敲打加工を行って面を形成している。

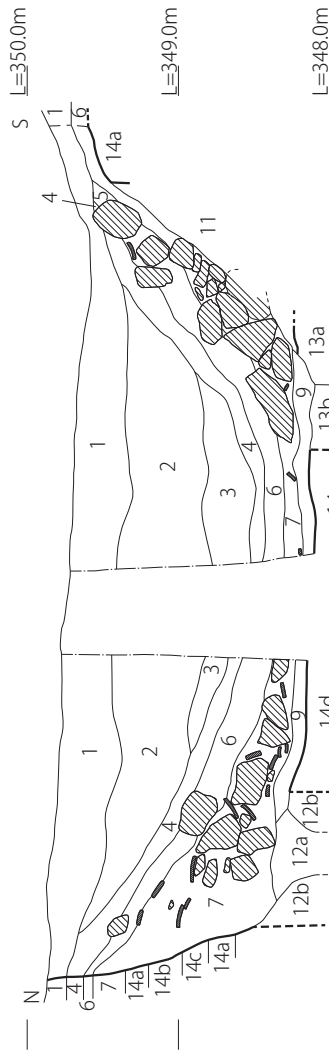
城外側の敷石西側、門道の南北両端にて、花崗岩製の軸摺り穴を持つ石を 2 つ検出した。一対のもので、きちんと据えてあり、レベルもほぼ一致していることから、埋没まで機能していたと考えられる。北側の石は一部調査区壁にかかっているが長軸 $0.54 + \alpha$ m、幅 0.71 m、厚み 0.16 m を測る。石の上面には直径 0.16 m、深さ 0.06 m の扉の軸摺穴があり、その中には鉄錆の跡が付着していた。石の南北両側面に円弧状に削り抜いた痕があった。南側の石は長軸 0.92 m、幅 0.49 m、厚み $0.21 + \alpha$ m を測る。石の上面には直径 0.18 m、深さ 0.08 m の扉の軸摺穴があり、北側同様、中には鉄錆の跡が付着していた。石の南側面には円弧状に削り抜いた痕があった。2 つの軸摺り穴の距離は 2.7 m を測る。両石とも側面に円形の削り抜き痕があることから、本来その部分に掘立柱を添え唐居敷として使用されていたことが窺えるが、検出された状況では削り抜かれている部分が石垣に接し、柱を立てる空間がない。このため門構造については不明である。

城外側床面の半分程度の範囲で石敷きを確認した。城外側は本来全て石が敷かれていたとみられる。敷石は花崗岩を用い、上面は平坦に加工されているものが多い。石と石の隙間には黄茶色砂質土が入っていることが土層観察されており、調査者は目詰めたとの印象を記す。城内側では石敷きは確認されていないが、城外側の敷石設置面と城内側の床面レベルがほぼ水平であることや、門道両壁面石垣

SX001 縦断 (東西) 土層



SX001 横断 (南北) 土層



- 土層名
- 表土
 - 1 茶色土 (締まり無し。木の根を多く含む)
 - カクラン・近現代の盛土
 - 2 灰白色土 (ビニール片・ガラス片を含む)
 - 3 茶灰色砂質土 (ビニール片・ガラス片を含む)
 - 旧表土
 - 4 黒褐色土 (締まる。旧表土)
 - 5 黒灰色土 (締まり無し。炭化物片を多く含む)
 - SB005の崩落土
 - 6 暗褐色土 (締まる。瓦片・転落石を含む)
 - 7 灰茶色土 (締まる。瓦片・転落石を多く含む)
 - SX004の柱穴
 - 8a 灰褐色土 (締まる。炭化物片を含む)
 - 8b 赤褐色土 (よく締まる。焼土塊)
 - 敷床土??. 10層と異なる。
 - 9 茶褐色土 (よく締まる。遺物の出土なし。径2~5mm大の黒色礫を少量含む。
 - 敷石を置く際に入れ土
 - 10 黄褐色土 (よく締まる。均質。径2~5mm大の白色礫を少量含む。
 - 石垣の裏込土
 - 11 灰黄褐色土 (よく締まる。石垣の裏込土)
 - SX006
 - 12a 褐灰色土 (ふかふか。SX006柱抜き取り跡)
 - 12b 灰黄色粘質土 (よく締まる。花崗岩風化土を含む。SX006掘方)
 - SX007
 - 13a 褐灰色土 (ふかふか。SX007柱抜き取り跡)
 - 13b 灰黄色粘質土 (よく締まる。花崗岩風化土を含む。SX007掘方)
 - 土塁の版築盛土
 - 11e 明褐色砂質土 (よく締まる。花崗岩風化土を少量含む。硬い)
 - 14a 褐色土 (よく締まる。花崗岩風化土 (岩盤質) が混入する。硬い)
 - 14b 明褐色粘質土 (よく締まる。花崗岩風化土 (岩盤質) 少量混入する。硬い)
 - 14c 黄灰色土 (よく締まる。花崗岩風化土が多く混入している。非常に硬い)
 - 14d 暗茶色粘質土 (よく締まる。花崗岩風化土 (岩盤質) が少量混入する。硬い)

- 遺物取り上げ土層名
- 1~3層: SX001灰白色土
 - 4~6層: SB005暗灰色土
 - 7層: SB005黄褐色土
 - 8層以下: 出土遺物なし



fig40-5 大野城跡第40次調査 SX001 (原口城門周辺の土塁関連遺構) 土層図 (1/50)

の基底部が床面より若干高位にあることから、城内側も石敷きだったと考えられる。

原口城門の門柱穴

40SX006 (fig40-4・5・6)

城門中央部北側の石垣裏込土の下で検出した柱穴で、SX007 とともに門柱跡と考えられる。調査では、柱穴掘方と柱の抜き取り痕跡を確認した。掘方は、土層ベルトにかかっているため明確ではないが平面方形プランを呈しており、径 0.91 m を測る。柱の抜き跡痕は平面楕円形プランを呈し、柱を南北方向に傾けて抜いている。調査では柱の抜き跡の半裁まで行ったが、それ以上の掘り下げは行っていない。遺物は出土していない。

40SX007 (fig40-4・5)

城門中央部北側で検出した柱穴で、SX006 とともに門柱跡と考えられる。調査では、柱穴掘方と柱の抜き取り痕跡を確認した。平面方形プランを呈し、0.65×0.72 m 以上の規模がある。なお遺構プランを検出したのみで、掘り下げは行っていない。これが SX006 と同規模の掘方をもつと想定すると、両者の柱間距離は約 3.6 m を測る。

その他の遺構

原口城門周辺の土塁関連遺構

40SX001 (fig40-5)

SB005 の旧表土の上に堆積する現代の盛土である。深さは約 1 m を測り、灰白砂質土と茶灰土に分層される。

2 層（灰白色土）、3 層（茶灰色砂質土）の中からビニール片やガラス片、ファンタのジュース缶などが出土している。表土から 3 層（茶灰色砂質土）まで厚さ約 1.2 m あり、かつては東西方向に大きく窪んでいたことがうかがえる。記録は残っていないものの、今から 30～40 年前以降に埋められたとみられ、以前は通路として使用されていた可能性がある。

4 層（黒褐色土）は旧表土層で、5 層は旧表土直下で確認した炭化物層である。

6 層（暗褐色土）と 7 層（灰茶色土）からは縄目叩きの瓦片や石垣の転落石が出土している。その出土の割合は 7 層の方が圧倒的に多く、6 層の方が少ない。

8 層（柱穴 SX004）は、8 a 層は灰褐色土の中に炭化物層が入っており、8 b 層には焼土塊が入っていた。

9 層（茶褐色土）は通路に敷かれた土で径 2～5mm の白色礫が少量混入しており、良く締まっている。

10 層（黄褐色土）は敷石を設置した際に入れた土で、均質で径 2～5mm 大の白色礫を含んでいる。

11 層（灰黄褐色土）は石垣の構築時の裏込め土で比較的締まっている。12・13 層はともに門柱跡で、いずれも a 層は柱抜き跡、b 層は掘方で版築により非常に締まっている。14 層は土塁の版築盛土の層である。

小穴

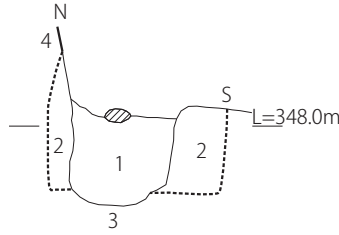
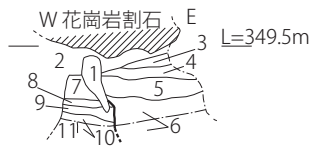
40SX003 (fig40-4)

城門中央部北側に位置し、SX004 と対になると考えられる柱穴である。平面円形プランを呈し、径 0.22～0.27 m を測る。検出時の埋土中には炭化物が混入していた。一段掘り下げた時点で灰白色粘質土の柱痕を検出したが、それ以上の掘り下げは今回行っていない。SX003 との中心間距離は 1.32 m を測る。これらが掘られた位置は土塁の上にあたり（ここから 0.5 m 西側の範囲で土塁と地山の境を検出）、土塁の盛土版築を行う際に立てられた柱穴とも考えられる。

40SX004 (fig40-4)

城門中央部南側に位置し、SX003 と対に位置する柱穴である。平面円形プランを呈し、径 0.4～0.45 m

40SX006



東西土層名

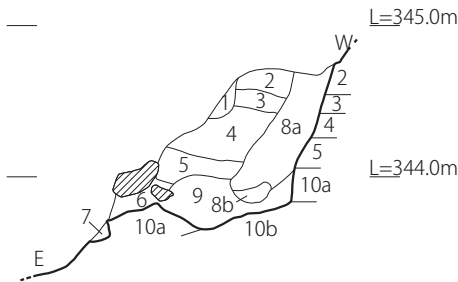
1. 暗灰色土 (締まる。樹根のカクラン)
2. SB005南北土層7層と同じ ……石垣裏込め
3. 灰黄色粘質土 (よく締まる。花崗岩風化土を少量含む。硬い)
4. 同 (よく締まる。花崗岩風化土と赤褐色粘質土を含む。非常に硬い)
5. 同 (よく締まる。花崗岩風化土を多く含む。非常に硬い)
6. 同 (3層と同じ。よく締まる。硬い)
7. SB005東西土層の14d層に対応 ……土塁
8. 灰白色粘質土 (よく締まる。硬い) ……土塁
9. 7層と同じ ……土塁
10. 8層と同じ ……土塁
11. 7層と同じ ……土塁

南北土層名

1. SB005南北土層12a層に対応 (SX006の柱の抜き跡)
2. SB005南北土層12b層に対応 (SX006の掘り方)
3. 灰白色粘質土 (土塁の版築盛土。よく締まる。花崗岩風化土を少量含む。硬い)
4. SB005南北土層11a層に対応



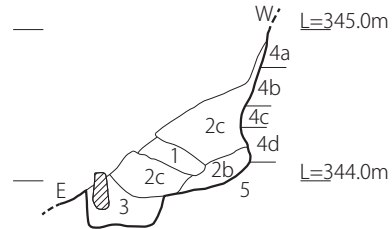
40SX014・042



土層名

- SX042
 1. 暗灰色土 (締まり弱い。樹根のカクラン)
- 土塁の版築盛土
 2. 赤色粘土 (よく締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を含む。硬い)
 3. 白茶色真砂土 (よく締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を多く含む。非常に硬い)
 4. 茶色真砂土 (よく締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を含む。硬い)
 5. 灰粘質土 (よく締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を多く含む。非常に硬い)
 6. 暗茶色真砂土 (よく締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を少量含む。硬い)
- 柱痕
 7. 灰白色粘土 (締まる)
- SX014
 - 8a. 暗茶色土 (締まり弱い。柱痕)
 - 8b. 青白色粘土 (締まり弱い。柱痕)
 9. 褐灰色土 (締まる。径1~5mm大の花崗岩風化土を含む。8a・b層の柱穴に伴う掘り方)
- 地山
 - 10a. 明褐色粘質土 (よく締まる)
 - 10b. 明褐色粘質土 (よく締まる。花崗岩岩盤層。非常に硬い)

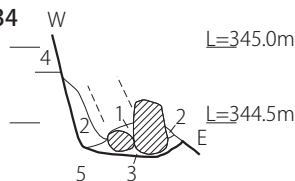
40SX016・017



土層名

- SX017
 1. 青白色粘土 (締まり無し) ……柱痕。柱を固定するために打ち込んだ木杭痕
 - 2a. 暗茶色土 (締まる。径1~5mmの花崗岩風化土を含む)
 - 2b. 茶褐色土 (よく締まる)
- SX016
 3. 暗褐色土 (よく締まる) ……1・2層に切られている。石は柱を固定するために置かれている。
- 土塁の版築盛土
 - 4a. 白茶色真砂土 (よく締まる。径1~5mmの白色砂粒を含む)
 - 4b. 茶色真砂土 (よく締まる。径1~5mmの白色砂粒を含む)
 - 4c. 灰褐色粘質土 (よく締まる。径1~5mmの白色砂粒を含む)
- 地山
 5. 明褐色粘質土 (よく締まる。地山)

40SX034



土層名

- SX034
 1. 青白色粘土 (よく締まる) ……柱痕
 2. 暗褐色土 (締まる) ……掘方
 3. 灰茶色土 (よく締まる) ……掘方
- 土塁の版築盛土
 4. 褐色真砂土+白色粘土+茶色粘土 (径1~5mmの白色砂粒を含む)
- 地山
 5. 明褐色粘質土 (よく締まる。地山)

fig40-6 大野城跡第 40 次調査 各遺構土層図 (1/50)

程度を測る。埋土中には炭化物を含み、一段掘り下げた段階で灰白色粘質土の柱痕を検出した。SX003 との中心間距離は 1.32 m を測る。SX003・004 の 2 つの小穴の位置関係から門構造に伴う遺構とも考えられるが、これらが掘られた位置は土塁の上にあたり（ここから 0.5 m 西側の範囲で土塁と地山の境を検出）、土塁の盛土版築を行う際に立てられた柱穴とも考えられる。SX003 同様に一段掘り下げたのみで完掘していない。

40SX008 (fig40-4)

土塁内面の北西隅で確認した。平面楕円プランで長さ 0.36 m、幅 0.26 m を測る。平面プランを検出したのみで掘り下げは行っていない。この小穴と対になるものは確認できなかった。

40SX009 (fig40-4)

城内側の北壁面の巨石の下から検出した。平面楕円形プランで、長さ 0.28 m、幅 0.2 m を測る。今回の調査では検出のみで掘り下げは行っていない。これと対になる位置に SX011 がある。

40SX011 (fig40-4)

城内側の南壁面の巨石の下から検出した。平面形円形プランで、長さ 0.14 m、幅 0.13 m を測る。平面プランを検出したのみで掘り下げは行っていない。その大きさから、地山に直接打ち込まれた杭などの可能性が考えられる。これと対になる位置に SX009 がある。

40SX012 (fig40-4)

南壁石垣の設置以前に設けられた小穴である。石垣の下の壁面で確認したため平面プランは不明であるが、直径 0.71 m、深さ 0.17 m を測る。切り合い関係から SX007 に後出するものである。なお、これと対になる位置には何も検出されていない。

4. 遺物

原口城門出土遺物

40SB005 暗灰色土出土遺物 (fig40-7)

土師器

坏 × 椀 (1) 口縁部の破片である。残存高 1.55cm を測る。胎土は 1～2mm の砂粒を多く含み、黄色味の強い淡橙褐色を呈す。

瓦類

丸瓦 (2～3) 2 は残存長 30.9cm、残存幅 12.5cm。小口に長さ 7.0cm 程度の玉縁を有す。凸面は縄目叩きで風化が進む。凹面は粗い布目痕がみられる。端部処理は凹面から分割線を入れ、割り放している。胎土は 4mm 以下の砂粒を少量含む。焼成はあまく土師質で、暗灰色～淡灰白黄色を呈す。現存で 756g を量る。

3 は残存長 18.65cm、残存幅 5.8cm。凸面は縄目叩きで風化が進む。凹面は布目痕がみられる。端部処理は凹面から分割線を入れ、割り放している。胎土は 4mm 以下の大小の砂粒を比較的多く含む。焼成はあまく土師質で、淡灰黄褐色～淡灰橙褐色～淡灰黄白色を呈す。現存で 393g を量る。

40SB005 黄褐色土出土遺物 (fig40-8～15)

須恵器

坏 a (1) 残存高 3.7cm。底部切り離しはヘラ切り。胎土は 1.0mm 以下の砂粒を含み、焼成・還元とも良好。灰色～淡灰色～暗灰色を呈す。

坏 × 蓋 (2) 底部の破片である。残存高 0.85cm。底部切り離しはヘラ切り。胎土は 1～3mm の砂粒を少し含み、焼成・還元とも良好。淡灰色～暗灰色を呈す。

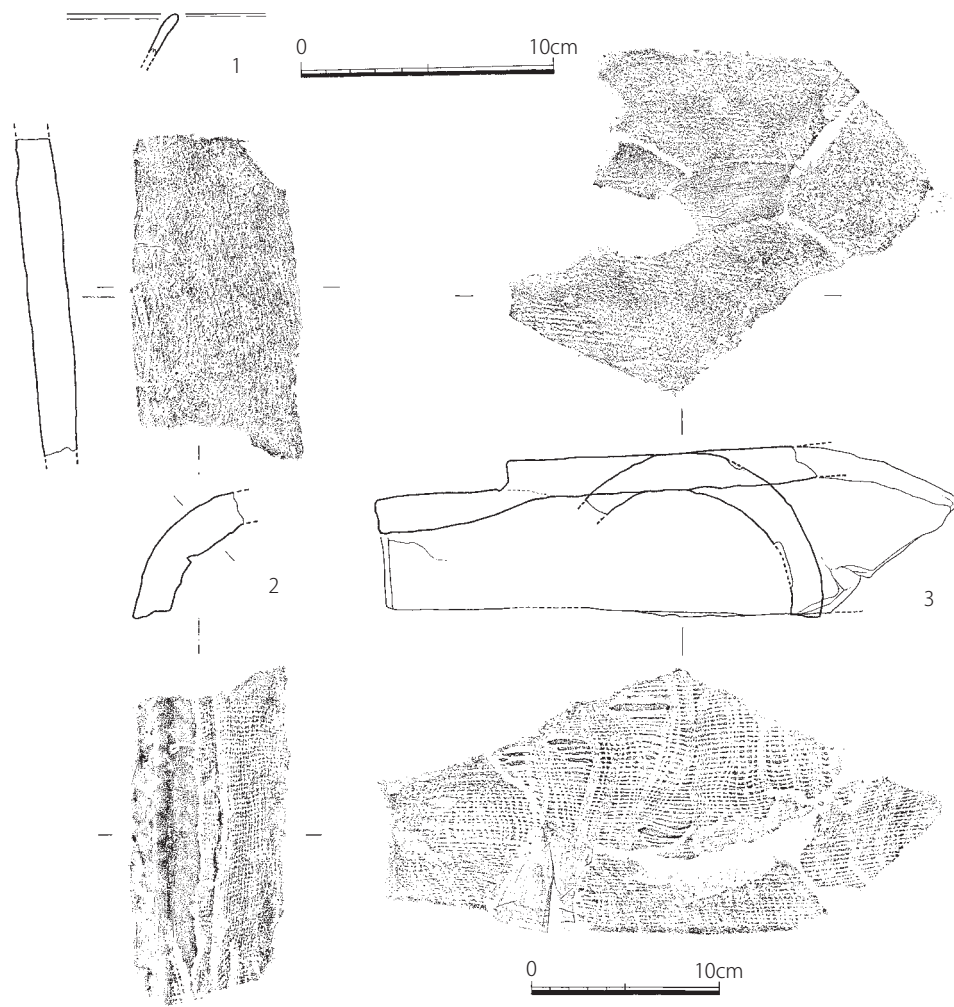


fig40-7 城40SB005 暗灰色土出土遺物実測図 (1は1/3、2・3は1/4)

壺(3) 胴部の破片である。残存高2.8cm。内面は回転ナデ、外面はヨコナデもしくは掻き目とみられる条痕が観察される。胎土は1~4mmの砂粒を含む。焼成は良好だが、還元は外面のみで灰色を呈し、内面は赤茶褐色を呈す。

土師器

椀c1(4)

底部の破片である。残存高2.0cm、底径9.2cmに復元される。焼成は不良で、暗褐色~黄土色を呈す。

椀c×坏c(5)

底部の破片である。残存高

1.9cm。胎土は概ね1mm以下の砂粒を含む。焼成は良好。橙褐色を呈す。

瓦類

軒丸瓦(6) 九歴分類275A型式(老司I式)の軒丸瓦である。胎土は4mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は不良で、表面の一部が灰色になっているものの、概ね土師質に仕上がり脆い。黄茶色~黄茶灰色を呈す。現存で420gを量る。

丸瓦(7~13) 7は残存長19.2cm。凸面は縄目叩き後ナデ消しを施す。凹面は布目痕が見られる。端部処理はナデで仕上げる。胎土は0.5~2mmの砂粒を多く含む。焼成はややあまく瓦質に仕上がる。淡白褐色~淡灰褐色を呈す。現存で367gを量る。

8は残存長12.2cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕がみられる。端部処理は凹面から分割線を入れ、割り放している。胎土は4mm以下の砂粒を多く含む。焼成はややあまく瓦質に仕上がり、淡灰褐色~黒灰色を呈す。現存で470.4gを量る。

9は残存長20.0cm。凸面は縄目叩き後ナデ消しを施す。凹面は布目痕がみられる。端部処理は凹面から分割線を入れ、割り放している。胎土は0.5~1mmの砂粒を多く含む。焼成は甘く瓦質に仕上が

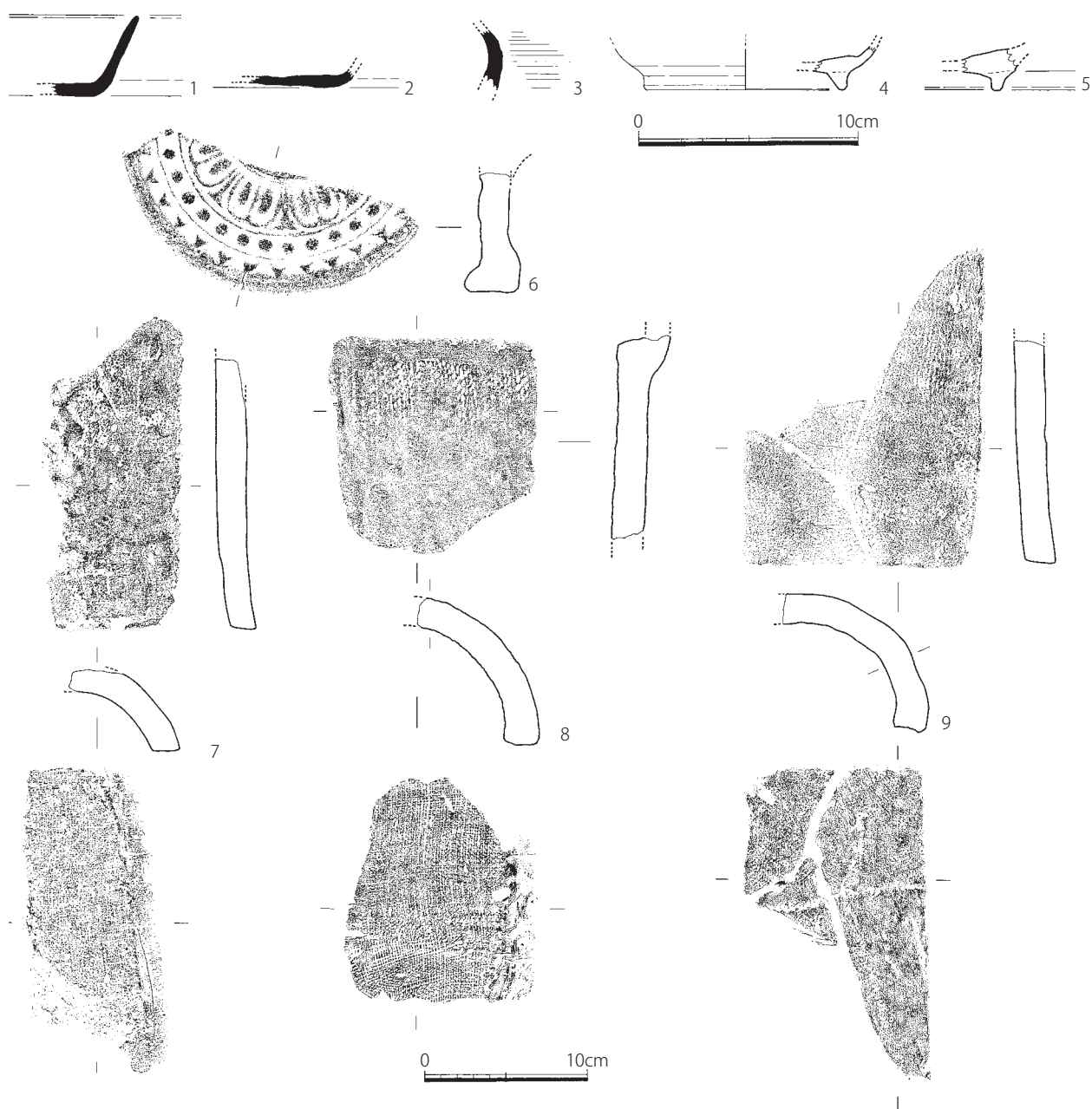


fig40-8 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その1 (1~5は1/3、6~9は1/4)

り、淡褐茶色を呈す。現存で489.0gを量る。

10は残存長22.2cm。凸面は縄目叩きを施す。風化が激しい。凹面は布目痕がみられる。端部処理は凹面から分割線を入れ、割り放している。胎土は0.5~2mmの砂粒を多く含む。焼成はあまく土師質に仕上がりに、淡茶褐色を呈す。現存で534.8gを量る。

11は残存長10.9cm。凸面は縄目叩きを施す。風化が激しい。凹面は布目痕がみられるが、風化は少ない。端部処理は磨滅のため明瞭ではない。胎土は3mm以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がりに、淡灰色~暗灰色を呈す。現存で477.6gを量る。

12は残存長17.9cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕がみられる。端部処理は、凹面から分割

線を入れ、割り放している。胎土は0.5～1mmの砂粒をごく少量含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、淡灰白色～淡灰褐色を呈す。現存で991.7gを量る。

13は残存長21.5cm。凸面は縄目叩き後ナデ消しを施す。凹面は布目痕がみられ、後にナデた痕跡が一部にみられる。端部処理はケズリか。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はややあまく瓦質に仕上がり、暗褐灰色～暗灰褐色を呈す。現存で809.1gを量る。

平瓦 (14～30)

14は残存長17.3cm。凸面は縄目叩きを施す。風化が進む。凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理は風化により不明。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がり、淡白褐色を呈す。現存で898gを量る。桶巻き作りとみられる。

15は残存長16.1cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕状のものがみられる。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、灰黒色～淡褐灰色を呈す。現存で1250gを量る。端部処理の状況から一枚作りとみられる。

16は残存長15.5cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、土師質に仕上がる部分が多く、淡黄土色～淡灰色を呈す。現存で779gを量る。端部処理の状況および模骨痕から桶巻き作りとみられる。

17は残存長16.5cm。凸面は縄目叩きを施す。風化が激しい。凹面は布目痕がみられる。縦方向の段差は模骨痕の可能性がある。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。焼成はややあまく瓦質に仕上がり、暗灰色～暗黄褐色～茶灰褐色を呈す。現存で626.6gを量る。端部処理の状況から一枚作りの可能性が考えられる。

18は残存長17.6cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕状の段差がみられる。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。胎土は4mm以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、黒褐色～淡暗灰茶褐色を呈す。現存で723.6gを量る。端部処理の状況から一枚作りの可能性が考えられる。

19は残存長18.5cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕状の段差、また糸切り痕跡がみられる。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。胎土は4mm以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、灰色～淡茶灰色を呈す。現存で1115.4gを量る。図化した断面部はやや歪みがあることも想定され、糸切り痕跡もみられることから、一枚作りとみている。

20は残存長18.6cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理はケズリを1ヶ所に施す。胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、淡灰茶褐色～淡黄茶褐色を呈す。現存で919.8gを量る。桶巻き作りとみられる。

21は残存長20.4cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理は風化により不明。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、灰黒色を呈す。現存で1328gを量る。桶巻き作りとみられる。

22は残存長25.4cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理はケズリを2～3ヶ所に施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、にぶい灰黒色を呈す。現存で1431.0gを量る。端部処理および模骨痕から桶巻き作りとみられる。

23は長軸が完存する。長さ38.7cm。凸面は縄目叩きを施し、一部にナデ消した部分も観察される。凹面は布目痕および模骨痕がみられる。端部処理は端部および凹面端部の2ヶ所にケズリを施す。胎土は3mm以下の砂粒を少量含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、黒灰色～暗灰色～灰色を呈す。

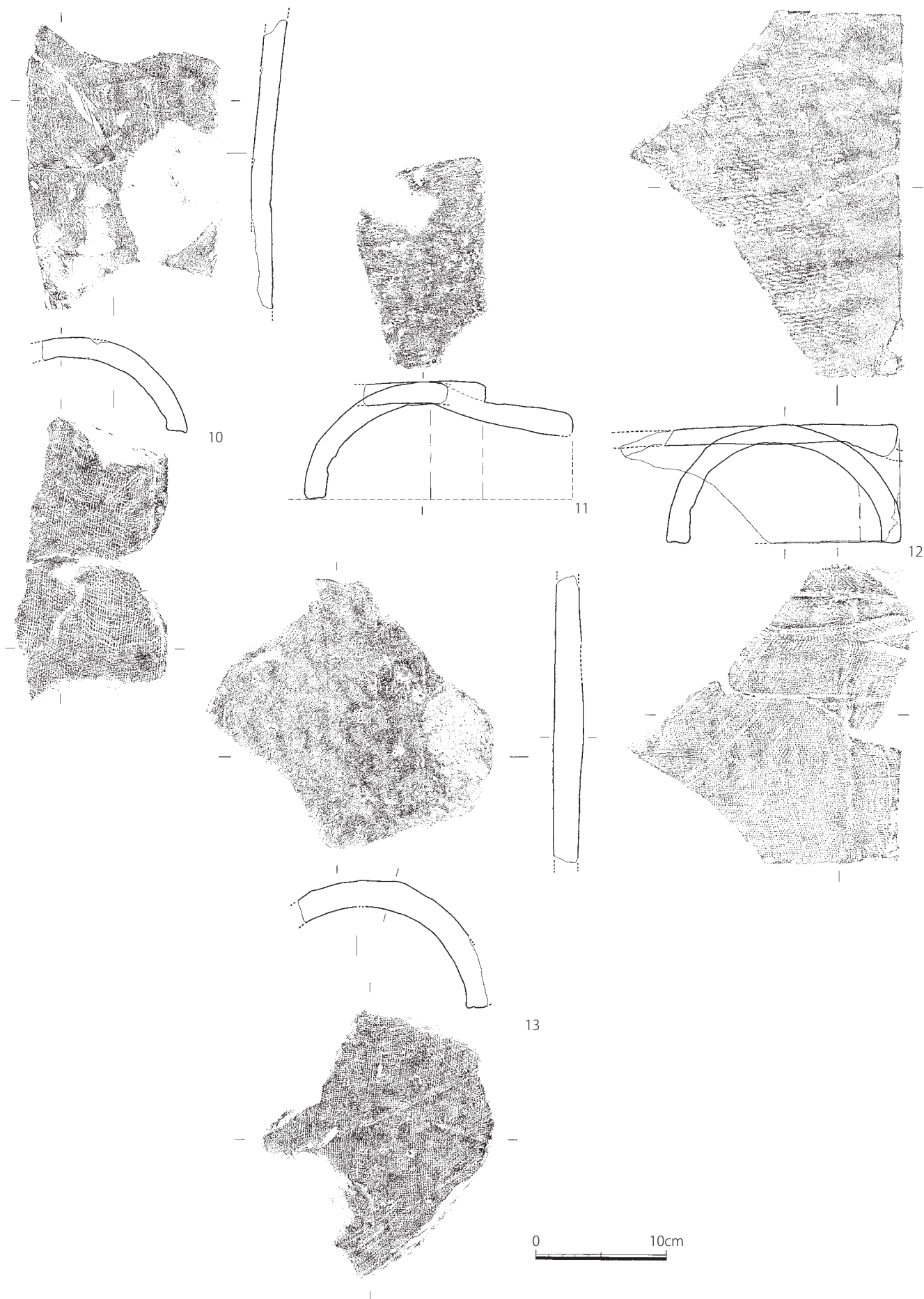


fig40-9 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その2 (1/4)

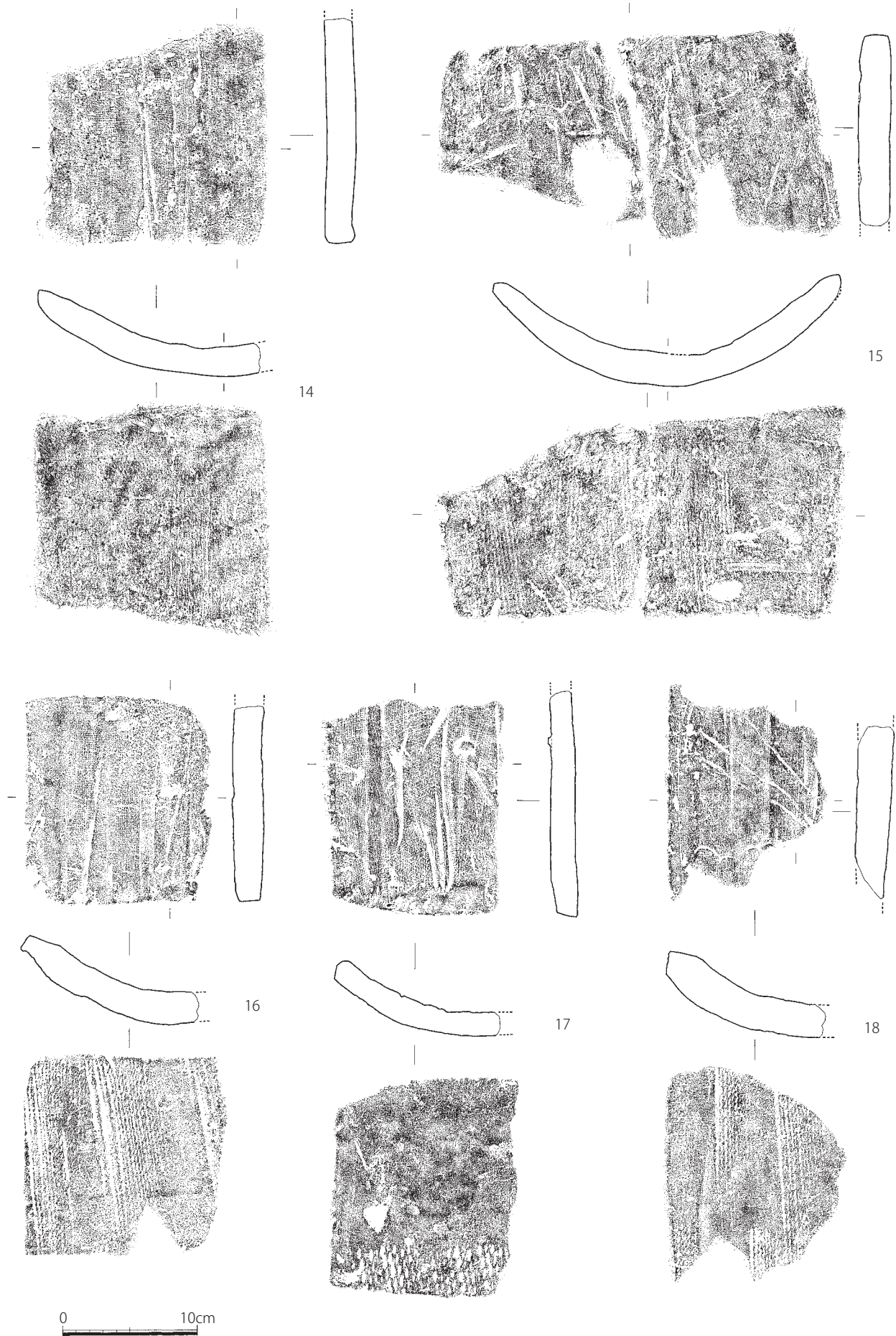


fig40-10 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その3 (1/4)

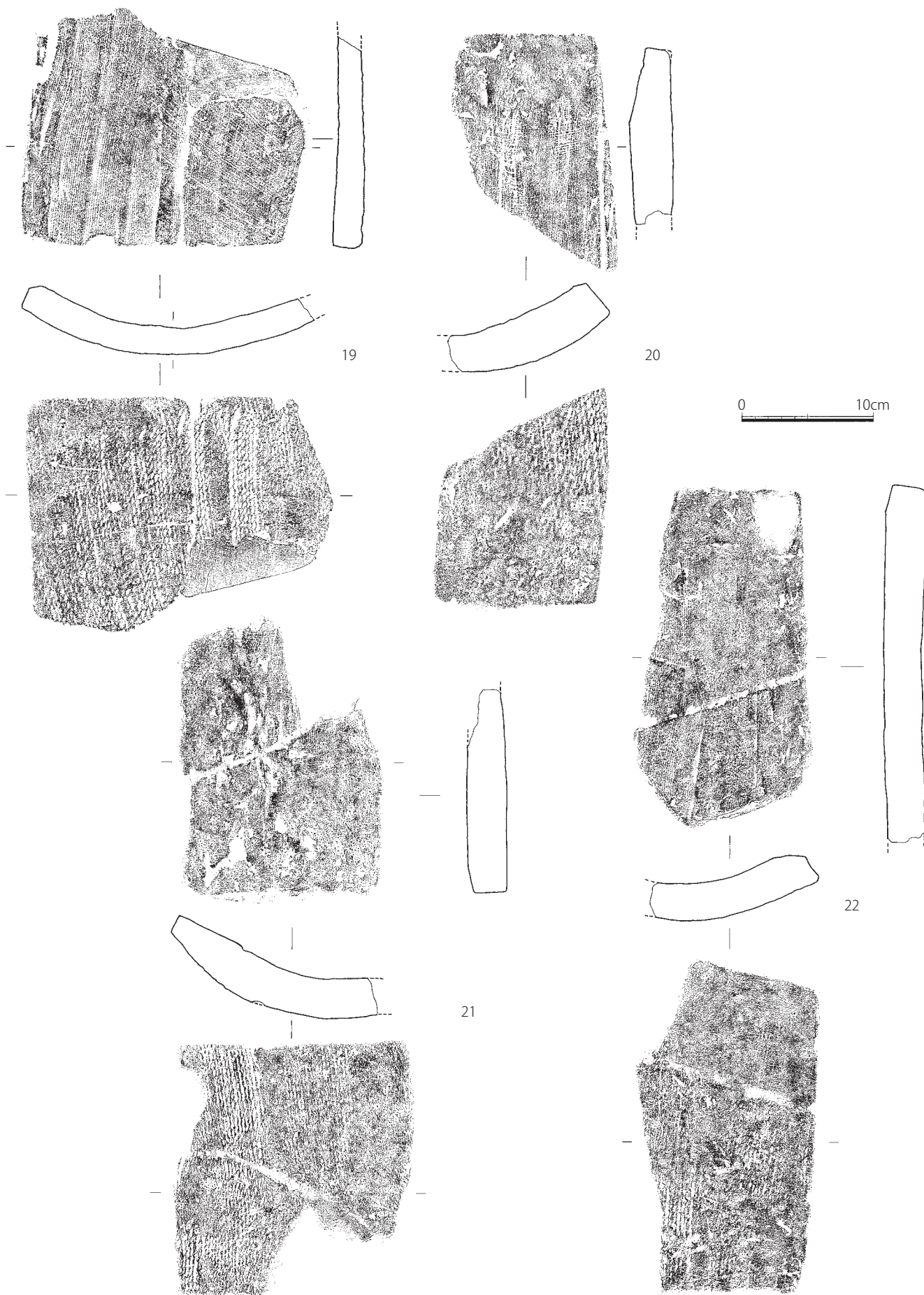


fig40-11 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その 4 (1/4)

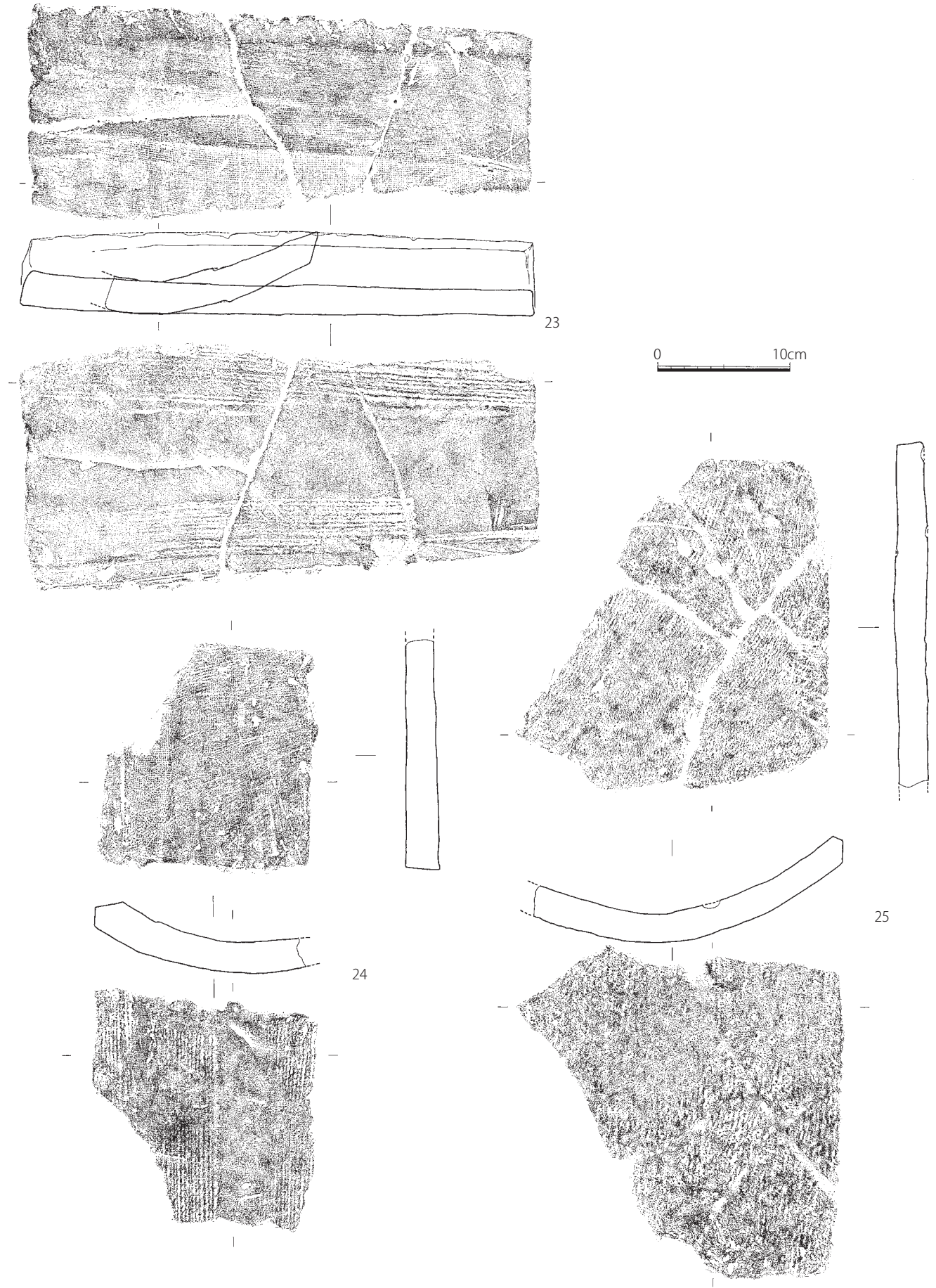


fig40-12 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その5 (1/4)

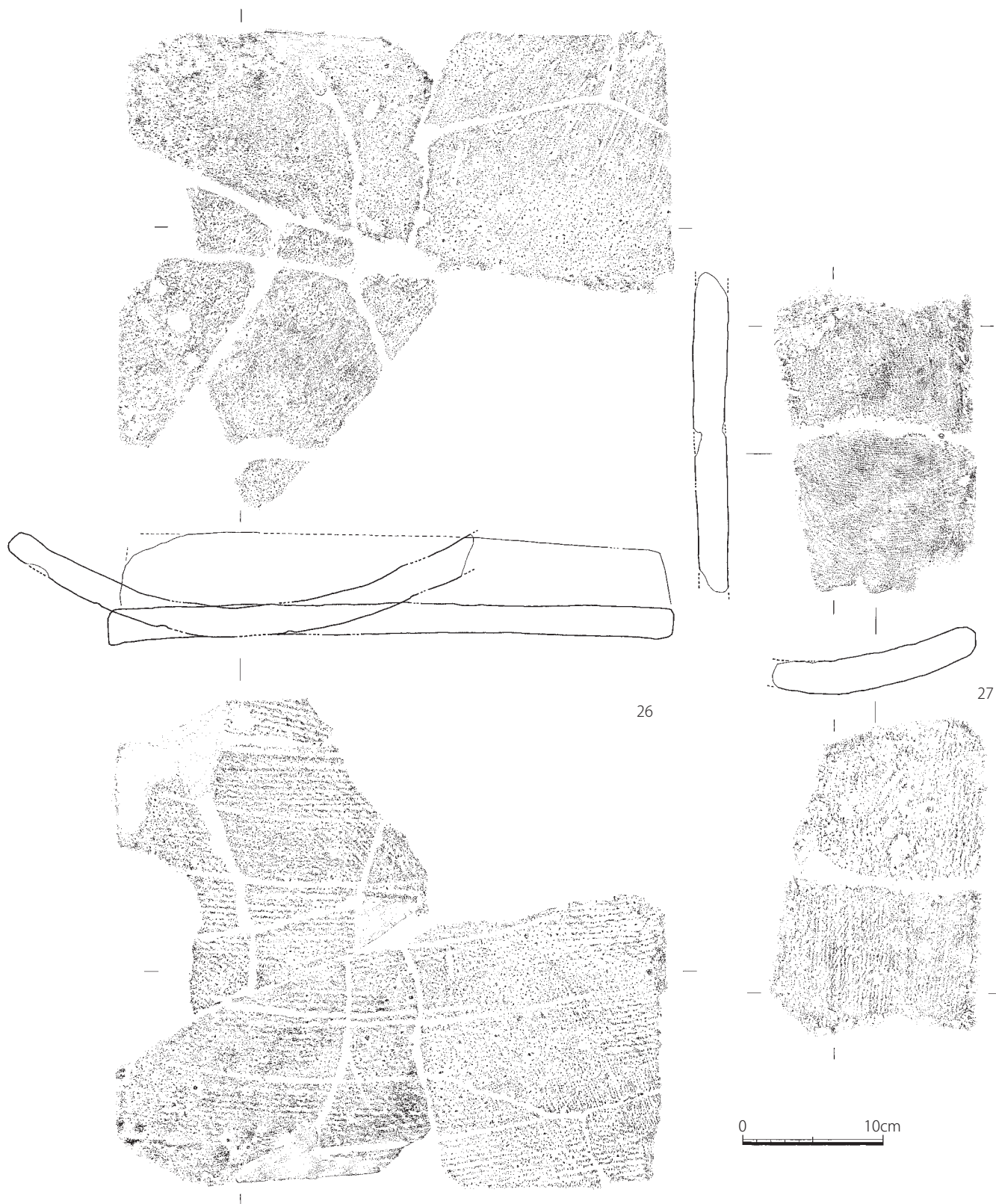


fig40-13 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その 6 (1/4)

現存で 2202.0g を量る。端部処理状況から一枚作りとみられる。

24 は残存長 17.2cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および模骨痕状の段差、また糸切り痕跡がみられる。端部処理はケズリを 2ヶ所に施す。胎土は 0.5 ～ 1mm の砂粒を多く含む。焼成はややあ

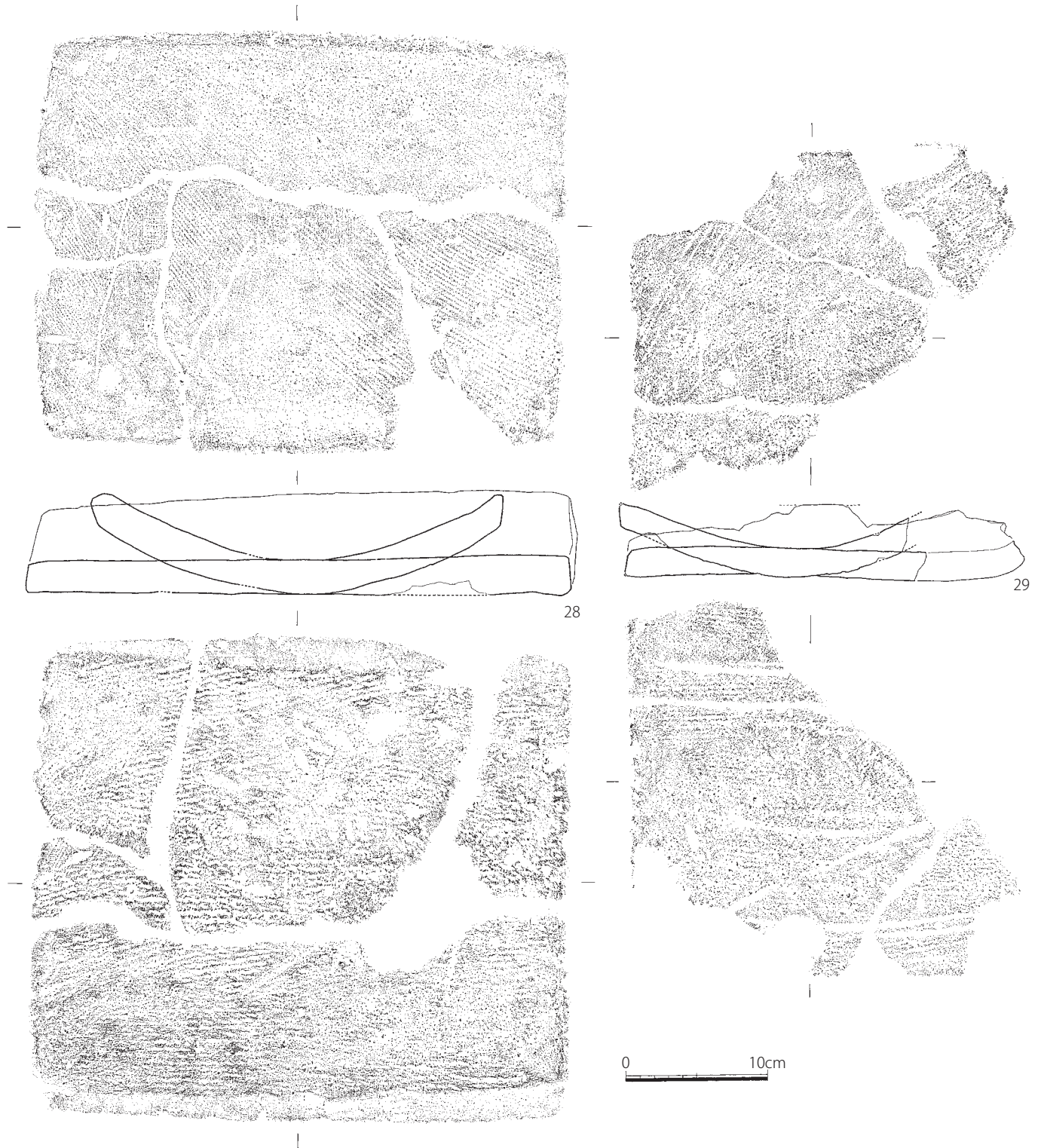


fig40-14 城 40SB005 黄褐色土出土遺物実測図その7 (1/4)

まく、瓦質に仕上がり、暗灰褐色～淡灰褐色を呈す。現存で 988.4g を量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

25 は残存長 24.6cm。凸面は縄目叩きを施し、凹面は布目痕および糸切り痕跡がみられる。端部処理はケズリを 2ヶ所に施す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、暗灰色～にぶい褐色を呈す。現存で 1628.0g を量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

26は長軸が完存する。長さ40.0cm。凸面は縄目叩きを施し、ナデとみられる調整が一部に施される。凹面は布目痕および糸切り痕がみられる。端部処理はケズリを施す。胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。焼成は不良で、瓦質というより土師質の仕上がりで、淡黄褐色を呈す。現存で3032.0gを量る。糸切り痕から一枚作りとみている。

27は残存長22.6cm。凸面は縄目叩きを施し、風化も進む。凹面は布目痕がみられる。端部処理はケズリが観察される。胎土は0.5～5mmの砂粒を比較的多く含む。焼成はあまく土師質に仕上がり、淡灰白黄褐色～淡灰黄褐色を呈す。現存で977.2gを量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

28はほぼ完存する。長さ38.2cm、幅28.8cm、厚さ2.5cm、反りの高さ約7.0cm。凸面は縄目叩きで、ナデとみられる調整が一部に施される。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。凹面は布目痕および糸切り痕跡がみられる。胎土は4mm以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、暗灰色～白灰色を呈す。現存で4349.8gを量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

29は残存長28.0cm。凸面は縄目叩きで、ナデとみられる調整が一部に施される。凹面は布目痕および糸切り痕跡がみられる。端部処理はケズリを施す。胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、土師質に仕上がり、淡黄茶色を呈す。現存で1441gを量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

30はほぼ完存する。長さ39.3cm、幅30.7cm、厚さ2.5cm、反りの高さ約7.6cm。凸面は縄目叩きで、ナデとみられる調整が一部に施される。端部処理はケズリを2ヶ所に施す。凹面は布目痕および糸切り痕跡がみられる。胎土は0.5～3mmの砂粒を比較的多く含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がり、黒灰色～暗黒褐色～淡灰色を呈す。現存で4648.4gを量る。端部処理および糸切り痕から一枚作りとみられる。

その他の遺構出土遺物

40SX042 出土遺物 (fig40-15)

土師器

甕 a (31) 胴部の破片である。残存高3.7cm。外面はハケ目で、内面はケズリを施す。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は良好で、暗茶褐色～淡黄土色を呈す。

5. 小結

(1) 原口城門の変遷

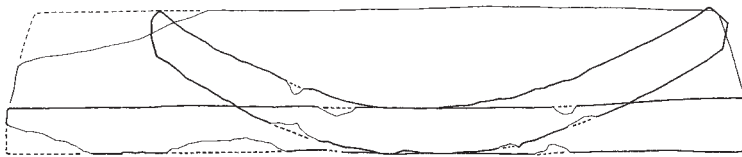
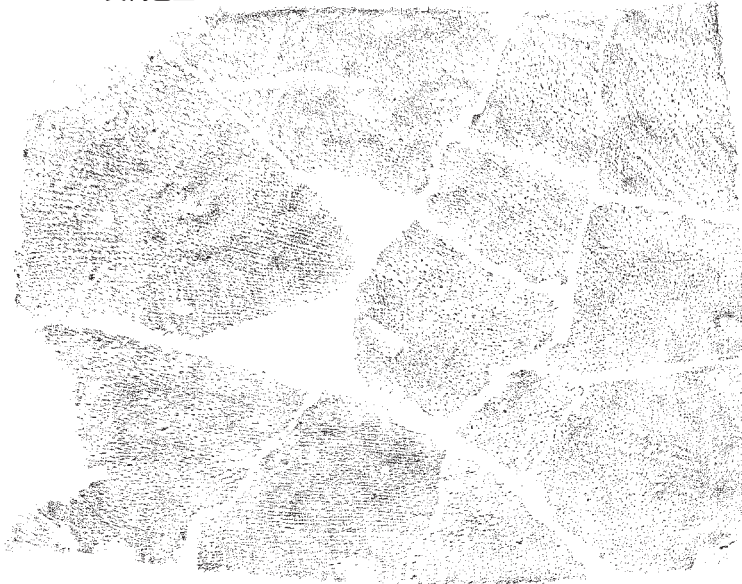
本調査は土塁の復旧工事に伴う調査であり、城門を確認した段階でそれ以上の掘り下げを行わず、土層ベルトを残したままで埋め戻しを行った。表土を取った程度の調査ではあったが、門の変遷についてある程度推測ができた。

原口城門は大きくⅠ～Ⅲ期の門の変遷が考えられる。

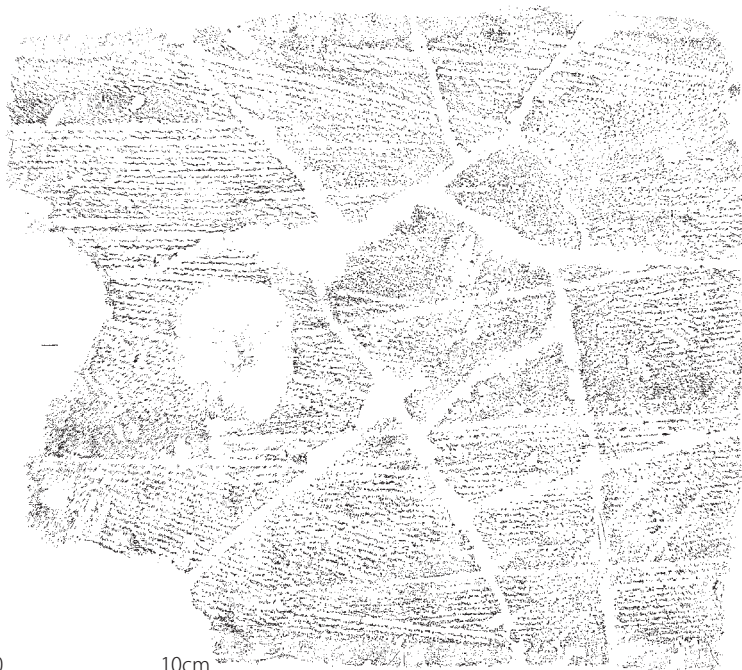
Ⅰ期はSX006・007を門柱として用いた時期である。南北土層の観察ではSX006・007は最下層にあり、石垣の裏込土が柱穴の掘方、柱の抜き跡痕を切っており、石垣の石積が行われる前に門柱が立てられている。SX006・007の柱間は芯々で約3.6m(10大尺=12小尺)を測る。なお、城外側で見つかった2つの軸摺穴を持つ石の片側面にはそれぞれ円弧状の割り込みがあり、もともとはSX006・007に添えられた唐居敷だったことが考えられる。

Ⅱ期は、唐居敷を転用した時期である。見つかった唐居敷は上面のレベル差がほとんどないよう根石で調整されており、これらを利用した門の時期があると考えられる。ただ、この際も門扉軸受けと

SB040 黄褐色土

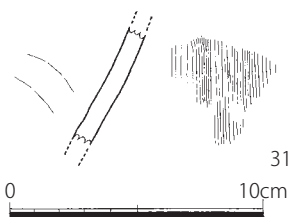


30



0 10cm

SX042 柱痕



31

0 10cm

して利用されたとすると、その設置位置と石垣との間に柱を置く空間がない点が問題である。柱穴などの確認はできていないため将来的な検証が必要だが、唐居敷としての転用ではなく、礎石としてこの上に柱が据えられた可能性を考えておく。

なお、軸摺穴石を設置する際、石敷きの上に根石を置いており、このことから石敷きは以前から存在していたことがうかがえる。遺構の項でも述べたように、門道床面および両脇の石垣基底部のレベルを勘案すると城内側も含めて一体的な石敷きが施工されたと想定され、これらの石敷き・石垣はI期から設けられていたと考えるのが自然であろう。

III期は、石垣を積み直した時期である。城内側石垣をみると城外側（小口積み）と積み方が異なっており、石垣裏込土中に縄目叩き瓦を含む点などから、石垣修理が8世紀以降に行われたと考える。なお床面直上のSB005黄褐色土層（fig40-5の7層）からは9世紀代とみられる土師器碗も出土していることから、それは9世紀以前だったことと想定される。

（2）門の築造時期

門址から出土した遺物の多くが縄目叩き瓦片で、一枚作りのものもみられることから、II期の城門は瓦葺きで、8世紀中葉以降に建てられたと推察する。床面上に堆積する層（SB005黄褐色土層）には、8世紀の須恵器や9世紀代の土師器がみられ、9世紀代まで活発な活動があったことを窺うことができる。

I期の時期については本調査では明らかにはできなかったが、大野城における唐居敷を用いた掘立柱城門

fig40-15 城40SB005黄褐色土・SX042柱痕出土遺物実測図
(30は1/4、31は1/3)

は太宰府口城門の調査などで7世紀後半に遡ることが知られており、原口城門のI期を同様の時期に比定することは可能であろう。

(3) 江戸時代の文献資料の記録

『大宰府旧蹟全図』は、太宰府の原山六度寺の住職船賀法印によって文化3年(1806)に製作されたといわれる古地図である。ここには大野城から基肄城に至る古代大宰府に関わる範囲を「北図」「南図」の二幅に分け、地域の伝承・記録が細かく記されている。現在では失われた地名や情報もあり、貴重な歴史資料でもある。

大野城は「北図」(太宰府市指定文化財)に記され、土塁や礎石建物跡などの遺構や地名などを詳細に知ることができる。このうち、現在城門として確認されている水城口城門、坂本口城門、宇美口城門、小石垣城門、クロガネ岩城門の5ヶ所については「門石スエ」と記録されており、当時から門址と認識されていたことがわかる。また水城口城門からは大野城城内から大字国分を經由し水城へ、また坂本口は大野城城内から大宰府政庁跡付近へと下る山道なども記される。

原口城門と目される場所には、「大人足形」と記されている。ここから城内へは四王寺村へ、城外へは水瓶山の北側を經由して太宰府天満宮へとつながる山道があったようである。今回報告した唐居敷転用門礎は土中に埋没していたためか門とは認識されていないが、「大人足形」という地名が官道沿いにあることが歴史地理学研究で指摘されているように、大きく窪んだ地形が江戸時代後期にもみられたことが推測される。

tab40-1 大野城跡第 40 次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
1	40SX001	原口城門周辺の土 墨関連遺構	S-5を覆う盛土・土墨等	灰白色土	5→1	近現代	南地区城門
2	(=40SB005黄褐色土)		土墨内側の城門床面の一段下がった部分。埋土はS-5黄褐色土と同じだったが、この部分はS-2黄褐色土で取り上げた。			奈良～	南地区城門
3	40SX003	柱穴	S-4と対になる。検出のみ行った。炭化物多く含む。出土遺物なし。土墨築造時の柱穴の可能性ありか。				南地区城門
4	40SX004	柱穴	検出面から一段掘り下げた。完掘していない。炭化物多く含む。出土遺物なし。土墨築造時の柱穴の可能性ありか。				南地区城門
5	40SB005	大野城 原口城門	黄褐色土：床面直上の堆積。瓦・転落石が出土	5黄褐色土→5暗灰色土 (((土墨内面黒褐色土???)		古代	南地区城門
6	40SX006 (=40SB005北柱穴)	門柱穴	柱抜き取り痕のみ半裁。柱抜き取り後、S-5黄褐色土が堆積するが、抜き取り内の土とS-5黄褐色土は同質。				南地区城門
7	40SX007 (=40SB005南柱穴)	門柱穴	S-6と対になる。検出のみ行った。出土遺物なし。		7→12		南地区城門
8		小穴	未掘。出土遺物なし。				南地区城門
9		小穴	未掘。出土遺物なし。				南地区城門
10		欠番					—
11		小穴	未掘。出土遺物なし。				南地区城門
12		小穴	未掘。出土遺物なし。				南地区城門
13		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
14	40SX014	土墨基底部の柱穴	半裁。出土遺物なし。				南地区土墨
15		欠番					—
16	40SX016	土墨基底部の柱穴	半裁。出土遺物なし				南地区土墨
17	40SX017	土墨基底部の柱穴	半裁。出土遺物なし				南地区土墨
18		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
19		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
20		欠番					—
21		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
22		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
23		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
24		土墨壁中杭穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
25		欠番					—
26		土墨壁中杭穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
27		土墨壁中杭穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
28		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
29		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
30		欠番					—
31		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
32		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
33		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
34		土墨基底部の柱穴	半裁。出土遺物なし。				南地区土墨
35		欠番					—
36		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
37		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
38		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
39		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
40		欠番					—
41		土墨基底部の柱穴	未掘。出土遺物なし。				南地区土墨
42		植物根による攪乱	半裁。土師器瓦片出土。				南地区土墨
表土	表土						—

tab40-2 大野城跡第 40 次調査 出土遺物一覧表

※時期は、各項に含まれる最新の出土遺物から判断したものである。実際は、遺構間の切り合い関係等の要素を加味する必要がある。

S-1灰白色土	奈良	S-5黄褐色土①	奈良
瓦 類	平瓦(縄目)	瓦 類	平瓦(縄目)
その他の	鉾滓		
S-2黄褐色土(=S-5黄褐色土)	奈良	S-5土墨内面黒褐色土	奈良
土 師 器	破片	瓦 類	平瓦(縄目(糸切り)、丸瓦)
瓦	類	平瓦(縄目(糸切り))、丸瓦	
S-5暗灰色土	奈良≦平安	S-6柱抜き跡	
土 師 器	碗c×坏c、坏×碗	土 師 器	破片
瓦 類	平瓦(縄目(模骨・糸切り))、丸瓦(縄目・文字瓦?) 丸瓦×熨斗瓦	S-42柱痕	
金属製品	鉄釘	土 師 器	甕a
その他の	鉾滓?		
S-5黄褐色土	奈良～平安		
須 恵 器	坏a、坏×蓋、供膳具、壺、破片		
土 師 器	碗c×坏c、碗c1、供膳具(坏)、甕		
黒色土器A類?	碗		
瓦 類	平瓦(縄目(模骨・糸切り))、丸瓦(縄目)、軒丸瓦		
金属製品	金具(2個体からなる)		
その他の	鉾滓		

Ⅲ - 2. 第 45 次調査

1. 調査に至る経緯

大石垣は、太宰府市大字坂本字口上谷 351-47、1086、1088、1082、351-72、351-2、351-37、351-34、351-36、351-10、351-35、351-94（大野城跡大石垣地区）に所在する。

ここは大野城跡南部の外周土塁沿いの一面にあたる。坂本口城門が位置する尾根の東側は、複数の谷地形が合流して大きな谷地形を形成しており、この合流点付近の谷底に大石垣と呼ばれる石塁が設けられている。この谷はそのまま下ると大宰府政庁跡付近へ至る。

大石垣は昭和 48 年の集中豪雨災害でも毀損し、昭和 50 年に福岡県教育委員会が発掘調査を行い同時に復旧工事で整備していた。この調査で大石垣の規模は全長約 64 m、石垣中央部の高さ約 4.5 m、中央部の上端幅約 4 m と紹介されている。

平成 15 年 7 月 19 日の集中豪雨では、大石垣上流側のそれぞれの谷地形で土石流が発生、土砂は大石垣を越え、谷際の樹木等を巻き込みながら流れ下り、大宰府政庁北側の砂防ダムに至って止まった。これにより大石垣は甚大な被害を被った。今回の災害では昭和 50 年の整備部分はもとより、大石垣本体も大きく毀損している可能性が窺えた。そこで平成 15～16 年度には被災箇所原状維持につとめ、平成 17 年度から発掘調査を行い、被災状況の把握と大石垣旧状の確認を（第 45 次調査）、翌 18 年度は大石垣原状復旧のための構造の確認、また里道・排水処理に関する旧状の確認を行っている（第 45-2 次調査。次項参照）。

第 45 次調査については、平成 18 年 1 月 18 日から平成 18 年 3 月 31 日の期間で実施した。対象面積は 300 m²、調査面積は約 250 m²。土器・瓦などがコンテナ 1 箱、また木製品が出土した。調査は城戸康利・松浦智が担当した。大石垣の全体図はアジア航測株式会社に実測等委託を行った。整理報告は保管している資料や調査担当者の原稿をもとに井上信正が行った。

2. 調査の概要

大石垣の谷部中央は上面から大きく崩落し、前面（谷下流側）は石垣の積石である花崗岩が土砂とともに堆積していた。谷部北側は谷筋からの土石流により崩壊・消失している。両斜面に構築されている石垣は被災を免れ、積石が残存していた。

そこで、土砂を確認・除去しつつ、散乱する木製品等の改修にあたりるとともに、大石垣本体の状態や構造の確認を行い、あわせて復旧工事に向けて里道の確認など旧状の把握につとめた。

3. 遺構

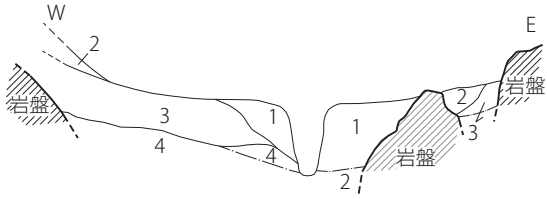
大石垣本体および基底部

調査では、谷部の積石残存状況を確認するため表面清掃を行い、また積石ラインを確認するために、石垣背面 3 ヶ所に調査トレンチを入れた。南側斜面の石垣は正面を精査し、積石の観察を行った。

これにより大石垣の長さは 25 m、基底部幅 6 m、天端幅 4 m、前面の高さ 6 m と分かった。また、石垣はどこかに寄りかかっているのではなく、自立していると想定された。また南側斜面から谷部へ下った箇所、平面形が折れ曲がる屈曲部が確認された。屈曲は 120 度あまりの角度をもって曲がっているが、その角は必ずしも立っていない。石垣は谷部全体としてアーチ状に堰き止めていたことが窺える。

石垣の基底部については、中央部～北側崩壊部付近で確認を行った。谷底は花崗岩盤で、この上に

B地点土層観察メモ



- 1.白黄色砂（粗い。平成15年災害以降の土砂層）
- 2.灰白色砂（粗い。自然堆積層）
- 3.暗灰色砂（青灰色の粘質土が混じる。木製品が出土。
大石垣築造後、石垣裏に水が貯まって、湿地を形成した際の埋土）
- 4.明白灰色砂（粗い。大石垣築造後に堆積した自然堆積層と見られる。
4層検出面から20~40cm下に岩盤の存在が推測される。遺物なし）

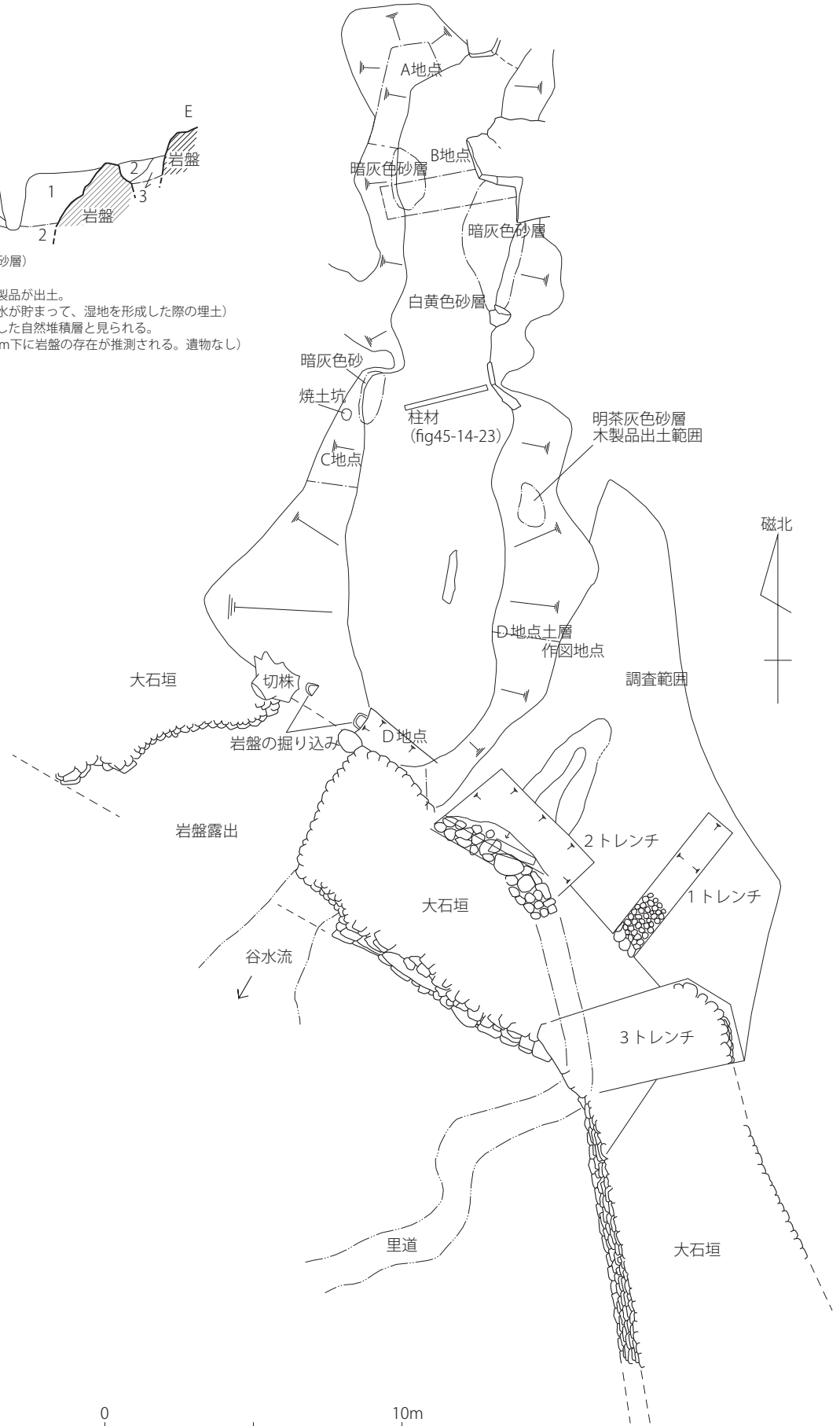


fig45-1 大野城跡第 45 次調査 全体配置図 (1/200)

栗石状の礫がみられ、さらにその上に1×2 m程度の巨石を要所に据えていることを、石垣前面で確認した。

なお水門の有無については、基底部まで検出した谷部の北側（西側）半分では検出できなかった。東側半分については被災を免れた積石が良好に残っているが、その前面の土砂を除去することで石垣が不安定になることを恐れたため、このときは基底部の確認は行わなかった（そのうち一部については第 45-2 次調査時に確認を行っている）。

大石垣前面

天端から中位にかけては、平成 15 年の土砂災害によって大きく欠失していたが、中位から下位にかけては大石垣正面の積石がほぼ残存していることが分かった。欠失した部分には裏込め石が露出しているが、石の間には土砂が充満していた。残存する石垣は表面の長さ 1 m、高さ 0.5 m 前後の大きな花崗岩を用いている。

なお、下位には災害の土砂流が厚く堆積しており、これを除去することは危険が伴う可能性もあると判断し、今回はこれ以上の調査は行わなかった。基底部の状況は確認していないが、現況で大石垣中央部の高さは約 7 m を測り、更に 1～2 m は高くなると考えられる。

大石垣背面

大石垣中央から南東側にかけて 3ヶ所トレンチを設定した。

1 トレンチ

大石垣中央部の背面東側に設定し、長さ約 5 m、幅 1 m の範囲で掘り下げた。最上層には平成 15 年の災害土砂である暗茶褐色土が堆積し、その下に橙色砂・青灰色砂などが大石垣

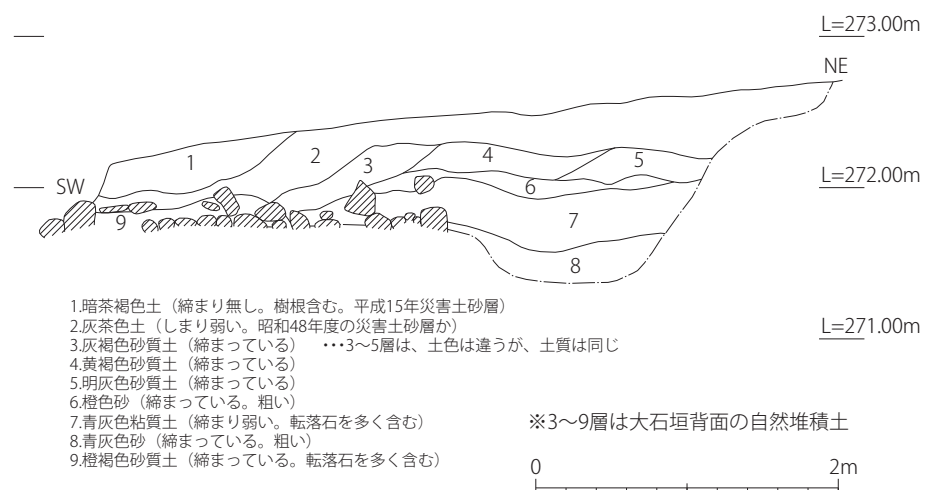


fig45-2 大野城跡第 45 次調査 1 トレンチ北壁土層図 (1/50)

に堰き止められる形で自然堆積している。石垣背面の積石はトレンチの南側で段積みされているのを確認した。

2 トレンチ

大石垣中央部の背面にトレンチを設定した。ここでは、平成 15 年の災害土砂（暗茶褐色土）を除去すると、昭和 50 年に復元工事で整備された通路の敷石・積石を確認した。敷石を一部除去すると、昭和 50 年に復元整備した際に使用した赤褐色砂質土を検出した。また石垣背面では昭和 50 年調査のトレンチを確認し、大石垣積石を検出した。この石垣上面では東西方向の石垣積石を検出し、1 トレンチの成果と併せて背面ラインを確定することができた。尚、2 トレンチは第 45-2 次でも調査を行っている。

3 トレンチ

1 トレンチの南側で、大石垣が東から斜面を下り緩やかに屈曲する地点の上面の精査と背面の石積プランを確認するためトレンチを入れた。上面は表面の平成 15 年の災害土砂である暗茶褐色土を除去、災害の土砂流により大破していたのを確認した。背面の積石に関してはトレンチの北東側では東側斜面に積まれた石垣背面の続きで段積みされているのを確認した。なお、トレンチ北側は排水路として利用していたため、この部分の調査は次年度実施することとした（第 45-2 次調査 4 トレンチの項参照）

谷部北西側斜面岩盤と石垣

の取り付け

石垣背面では、岩盤に接する石列を検出した。これは中央部および東端で検出した大石垣背面の石列に連続しており、ここが大石垣背面の面（つら）になると考えられる。また、そのすぐ山側の岩盤で 50cm ほどの割り込みが 2 基、2 m ほどの高低差で並んでいることを確認した。足場設置等の痕跡とも考えられる。

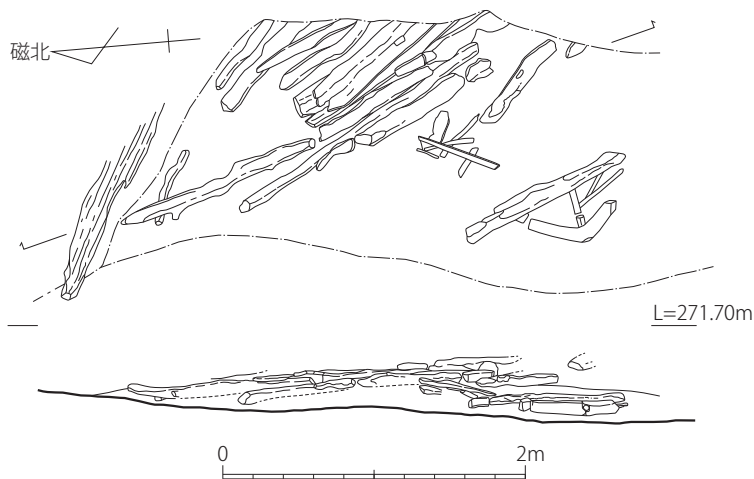


fig45-3 D 地点（大石垣裏）明茶灰色砂層木製品出土状況（1/50）

石垣前面でも石列を確認した。ここでは基盤の花崗岩盤を割り込み、石をはめ込んでいる様子が観察された。この面が表面となっていると考えられる。

背面の土砂堆積状況

大石垣背面には、現存する石垣の高さまで土砂が堆積している。被災後からその表面に縄目叩き瓦や角材・丸太材などの木製品が露出しており、大石垣背面の北側谷約 20 m の地点から大石垣までの範囲で、災害時以降の堆積土とそれ以前の堆積土などの状況を見分けながら遺物の取り上げを行った。

この谷の土砂については、今回の災害で欠失した北側谷部に沿って土層観察を行うことができた。上層は平成 15 年災害土砂（暗茶褐色土）や昭和 48 年に発生した土石流堆積層があり、下層は大石垣築造後堰き止められる形で自然堆積した層だと考えられる。堆積層はほとんどが粗い砂で構成されており、ところどころに有機質を含む黒色粘質土がある。下層には粘土層があり一時期水が溜まることもあったとみられるが、ここに加工木材が含まれていた。また D 地点の明茶灰色砂層の下面から加工木材や自然木が集中して検出され、水平かつ平行に敷き並んでいる状況も確認している。

大石垣欠損部の背面につながる谷部も同様に 2 層に分層できる。上層は白黄色砂層で、平成 15 年災害以降に堆積したものである。ここから奈良時代の縄目叩き瓦片・土器片・板材や丸太材などの木製品が出土している。その下には、砂層や粘質土層が自然堆積しており、ここから奈良時代以前の遺物が出土している。

谷底は花崗岩の岩盤であり、その直上は黒色粘質土が堆積していた。ここからの土器の出土はほとんどなく堆積時期の判定は困難である。

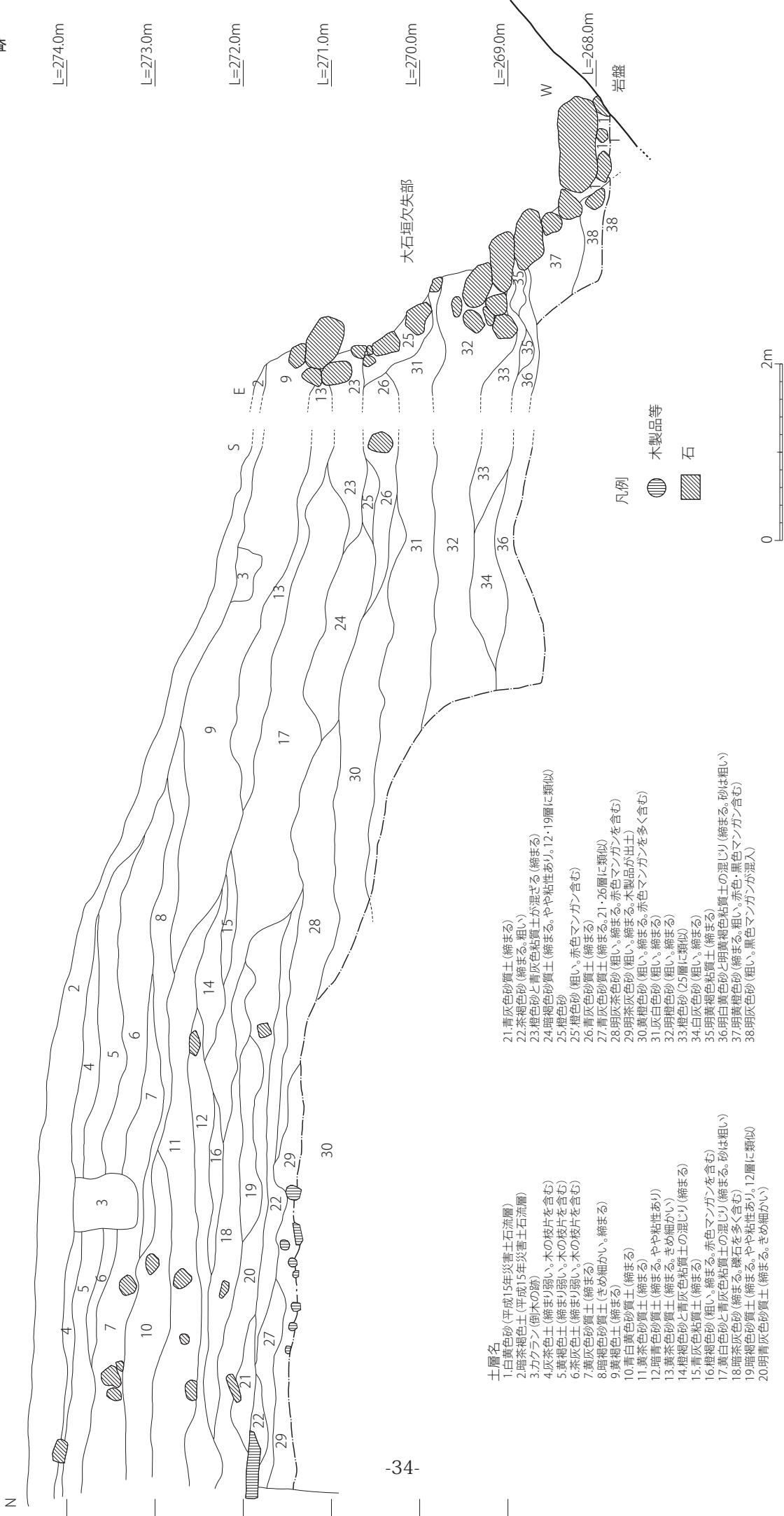


fig45-4 大石垣裏D地点 調査区壁面土層図 (1/60)

里道

被災以前には、石垣を断ち割るように里道が通っていた。今回の復旧作業に際し、里道の取り扱いを検討するために調査を行った。昭和 48 年被災以前より石垣を短距離で横断し、石垣背面を西側谷に抜ける通路様のものを検出している。

4. 遺物

a. 土器・瓦類

1 トレンチ黄褐色砂層出土遺物 (fig45-5)

須恵器

坏 c (1) 復元口径 13.6cm、器高 4.2cm、高台は欠損するが径 9cm 程度とみられる。胎土は 2.0mm 以下の砂粒を含む。焼成・還元とも良好で、灰色～青灰色を呈す。

1 トレンチ青灰色砂層出土遺物 (fig45-5)

瓦類

丸瓦 (2) 残存長 6.2cm。凸面は風化が進み調整不明。凹面は布目痕がみられる。胎土は 2.0mm 以下の砂粒を含む。端部調整も磨滅し不明。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、淡灰茶褐色～黒灰色～黒褐色を呈す。

2 トレンチ黒褐色土層出土遺物 (fig45-5)

その他の遺物

ガラス瓶 (3) 琥珀色を呈したガラス瓶の底部である。長軸 6.6cm、高さ 5.3cm。近現代の遺物である。

3 トレンチ暗茶褐色土層出土遺物 (fig45-5)

土師器

小皿 a (4) 残存高 0.95cm。胎土は 1mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、黄土色を呈す。

白黄色砂層出土遺物 (fig45-6)

須恵器

坏蓋 (5) 口縁部の破片である。残存高 2.7cm で、大凡 15.0cm 前後の口径を有す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、暗灰青色を呈す。

蓋 3 (6) 口縁部～天井部の破片である。口径 15.8cm に復元され、残存高 1.1cm。天井部全体に回転ヘラケズリを施す。胎土は 1mm 以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、還元もしておらず、にぶい茶褐色を呈す。

坏 (7) 口縁部の破片である。残存高 3.4cm。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、硬質に仕上がる。還元はわずかにかかっている程度で、暗いあずき色を呈す。

坏 c (8) 底部の破片である。残存高 1.5cm。胎土は 0.5mm 以下の砂粒を含む。還元はしているが、焼成はややあまく、軟質に仕上がりに、淡灰色を呈す。

壺 a (9) 口縁部～肩部の破片である。復元口径 6.4cm、残存高 4.6cm。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、硬質に仕上がる。還元はわずかにかかっている程度で、淡茶褐色～にぶい灰色・灰褐色を呈す。

壺 (10～11) 10 は肩部の破片である。残存高 3.8cm。胎土は 0.5mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、硬質に仕上がる。還元は断面がより進んでおり、表面は若干酸化炎にあたったようである。このため断面は淡青灰色、内外表面は淡茶褐色を呈す。

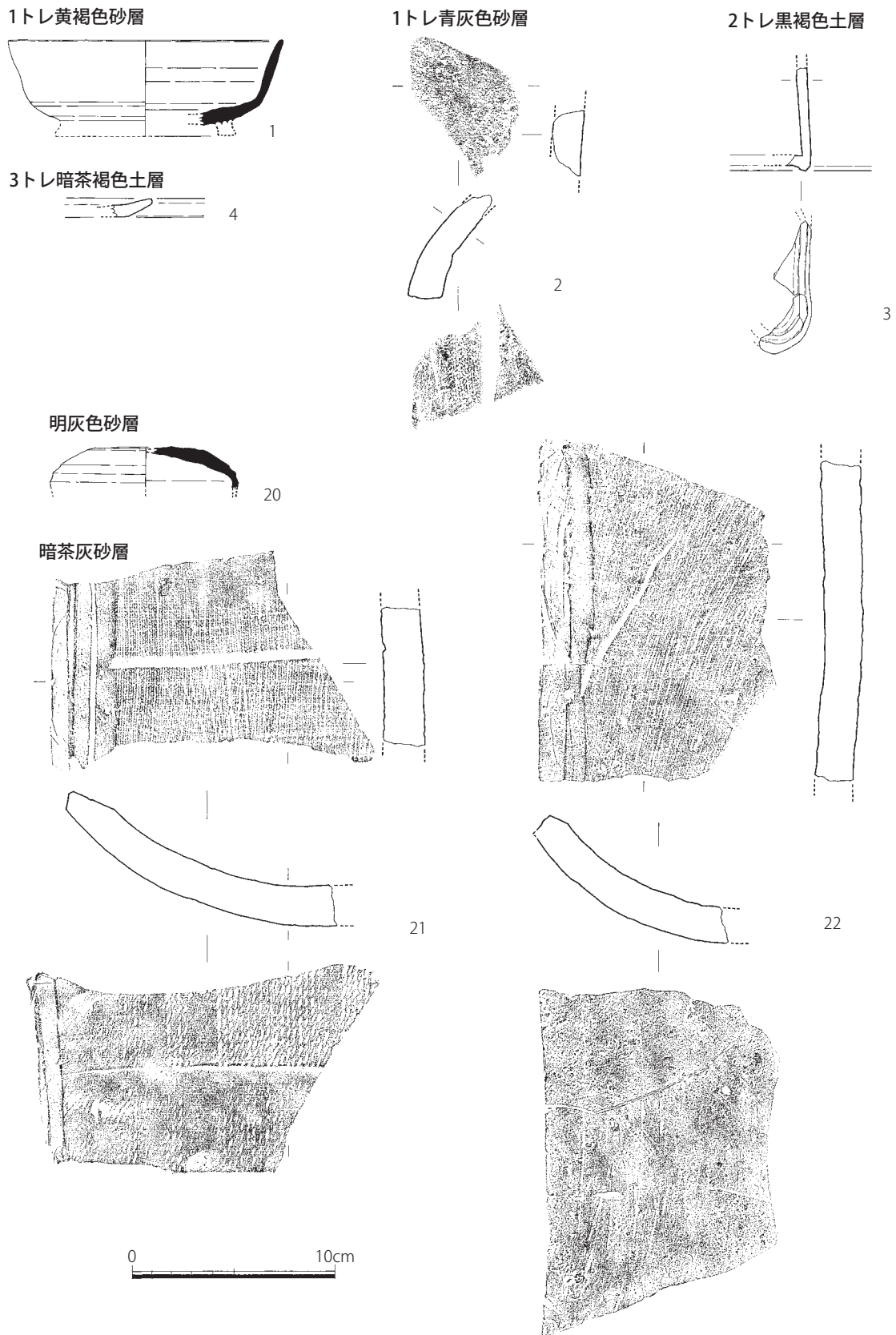


fig45-5 第 45 次調査 出土遺物実測図その 1 (1/3)

白黄色砂層

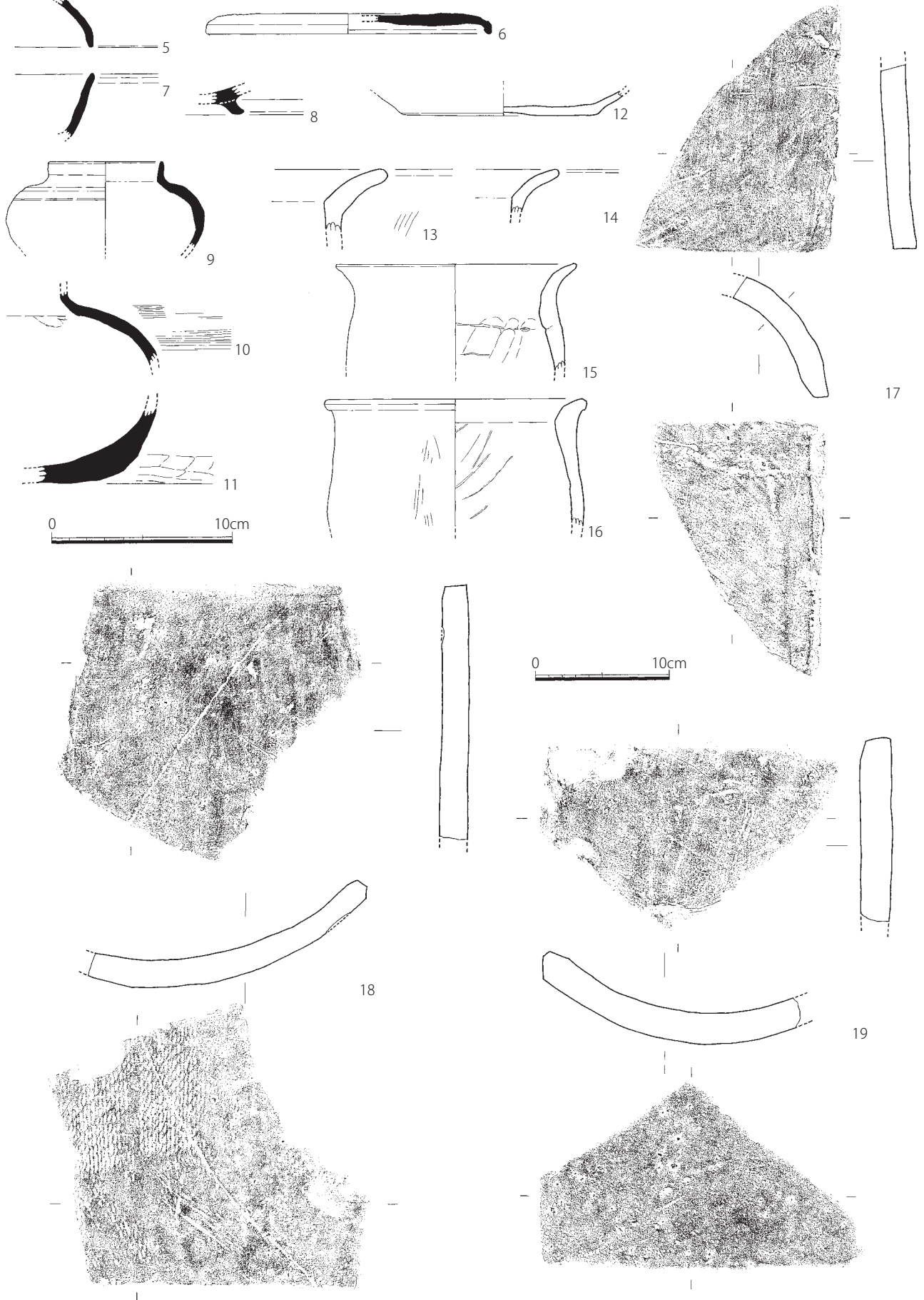


fig45-6 第 45 次調査 出土遺物実測図その 2 (5 ~ 16 は 1/3、17 ~ 19 は 1/4)

白黄色砂層

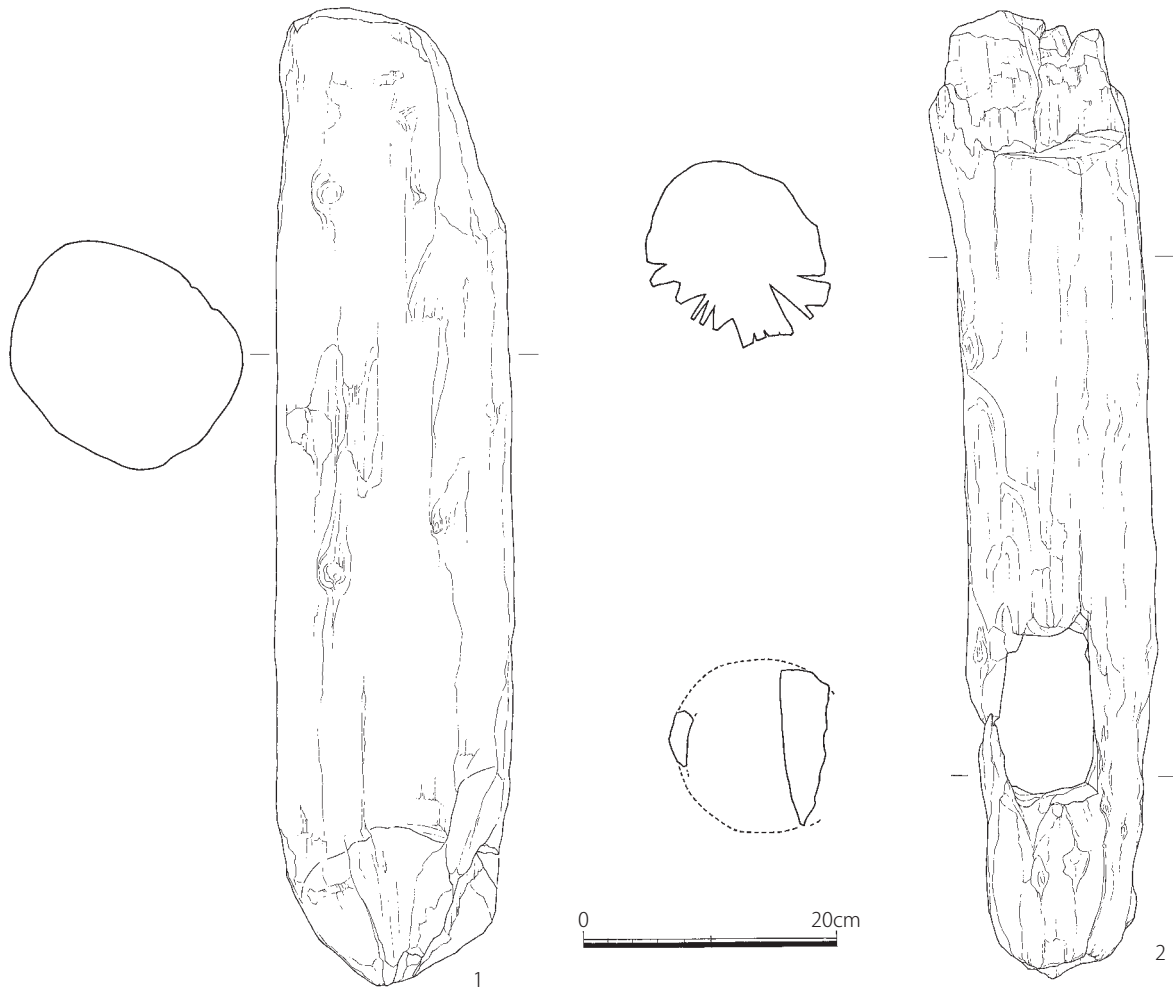


fig45-7 第45次調査 出土木製品実測図その1 (1/6)

11は底部の破片である。残存高4.0cm。胎土は4mm以下の砂粒を比較的多く含む。焼成は良好だが、還元は断面の一部に観察されるのみである。断面にみられる還元部分は淡青灰色を呈すが、その他は赤茶褐色～暗橙色を呈す。

土師器

坏 a×皿 a (12) 底部の破片である。残存高1.3cm、還元底径11.0cm。底部調整はヘラ切りか。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、風化あるいは磨滅により調整不明。淡白茶褐色を呈す。

甕 (13～16) 13は口縁部の破片である。残存高3.4cm。風化・摩耗が進むが、外面にハケ目が観察される(甕 a)。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成はあまく、淡褐灰色を呈す。内面には二次焼成とみられるにぶい灰褐色の変色も観察される。

14は口縁部の破片である。残存高2.3cm。表面は風化・摩耗が進む。胎土は1mm以下の砂粒を多く含み、角閃石も含む。焼成はあまく、淡褐茶色を呈す。

15は口縁部～胴部上半の破片である。還元口径13.3cm、残存高5.8cm。胎土は0.5mm以下の砂粒をわずかに含み、角閃石も含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈す。

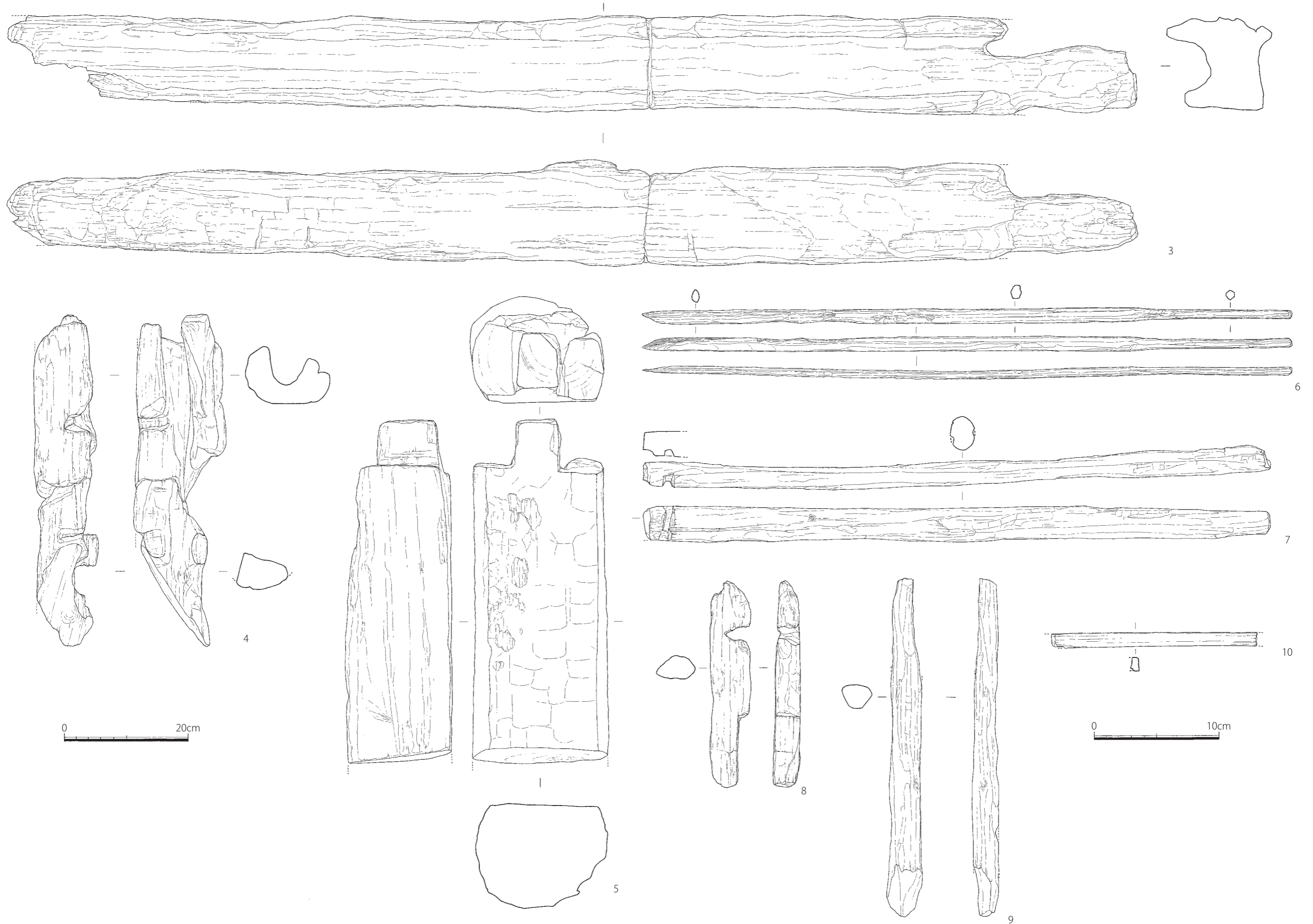


fig45-8 第45次調査出土木製品実測図その2 (10は1/3、その他は1/6)

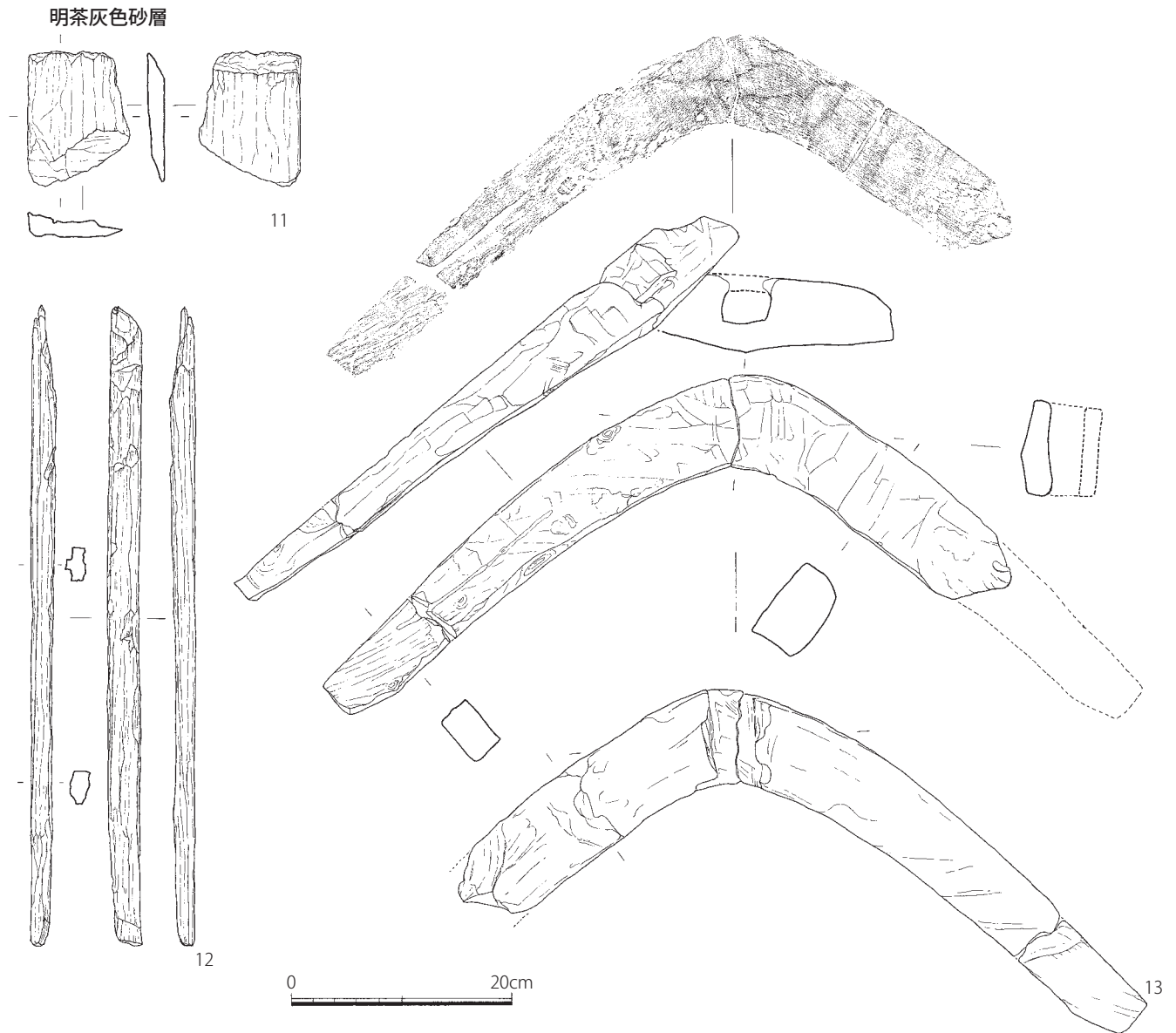


fig45-9 第 45 次調査 出土木製品実測図その 3 (1/6)

16 は口縁部～胴部上半の破片である。復元口径 14.5cm、残存高 7.0cm。胎土は 2mm 以下の砂粒をわずかに含む。焼成はややあまく、淡茶白色を呈す。

瓦類

丸瓦 (17) 残存長 18.5cm。凸面はナデ消しで、凹面は布目痕および糸切り痕がみられる。端部調整は小口はケズリで、側面は 2ヶ所にケズリを施す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、瓦質に仕上がり、淡灰褐色を呈す。

平瓦 (18～19) 18 は残存長 21.2cm。内外面とも風化が進むが、凸面は縄目叩きが、凹面は布目痕がみられる。端部調整は小口はケズリを、側面は 3ヶ所にケズリを施す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、淡白褐色～灰黒色を呈す。端部調整から一枚作りとみられる。

19 は残存長 14.1cm。凸面は風化により不明。凹面は布目痕がみられる。端部調整は 2～3ヶ所に施す。胎土は 3mm 以下の砂粒を含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、淡白褐色～淡白灰色を呈す。端

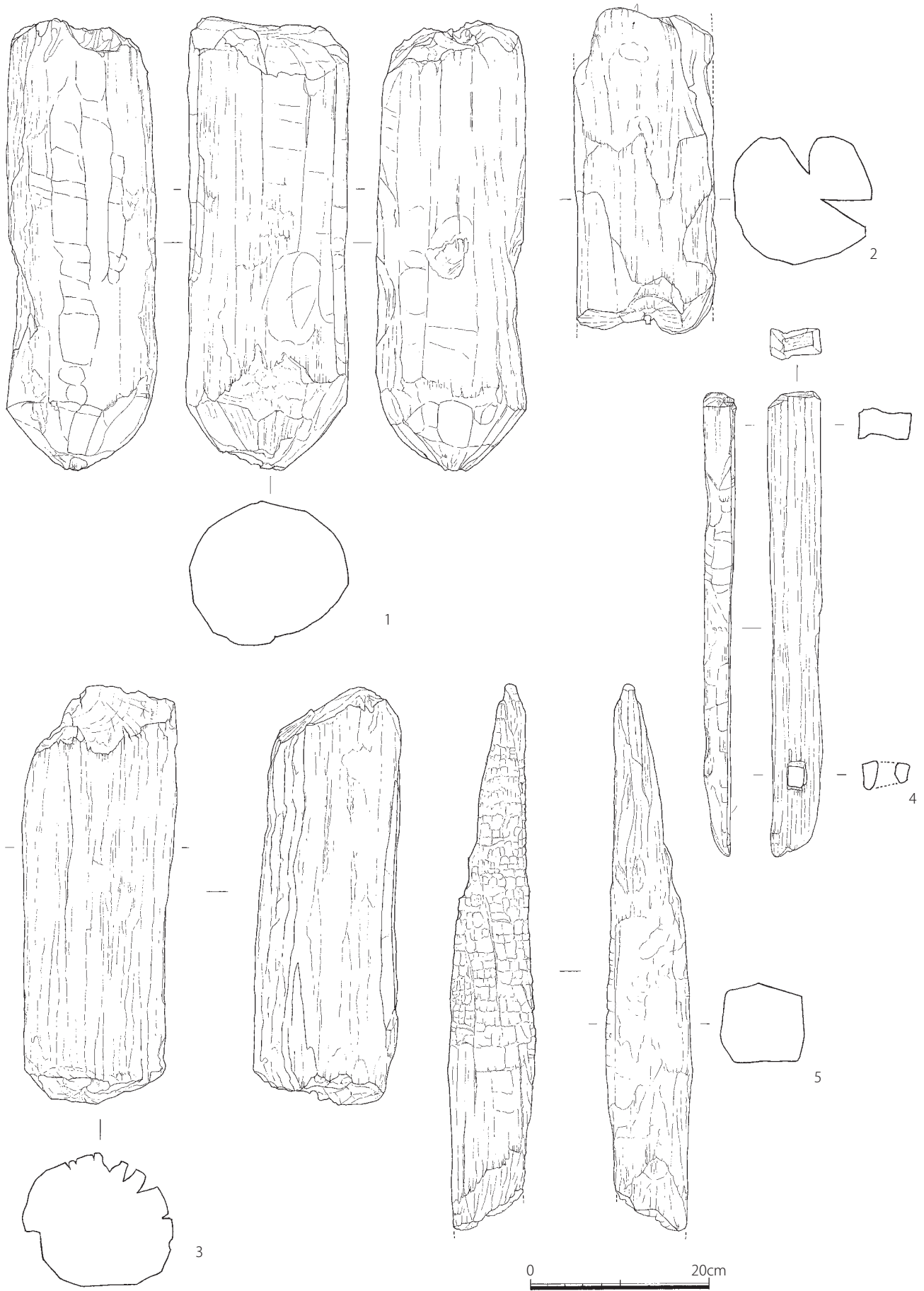


fig45-10 大石垣地区災害後採集木製品実測図その1 (1/6)



fig45-11 大石垣地区災害後採集木製品実測図その 2 (1/6)

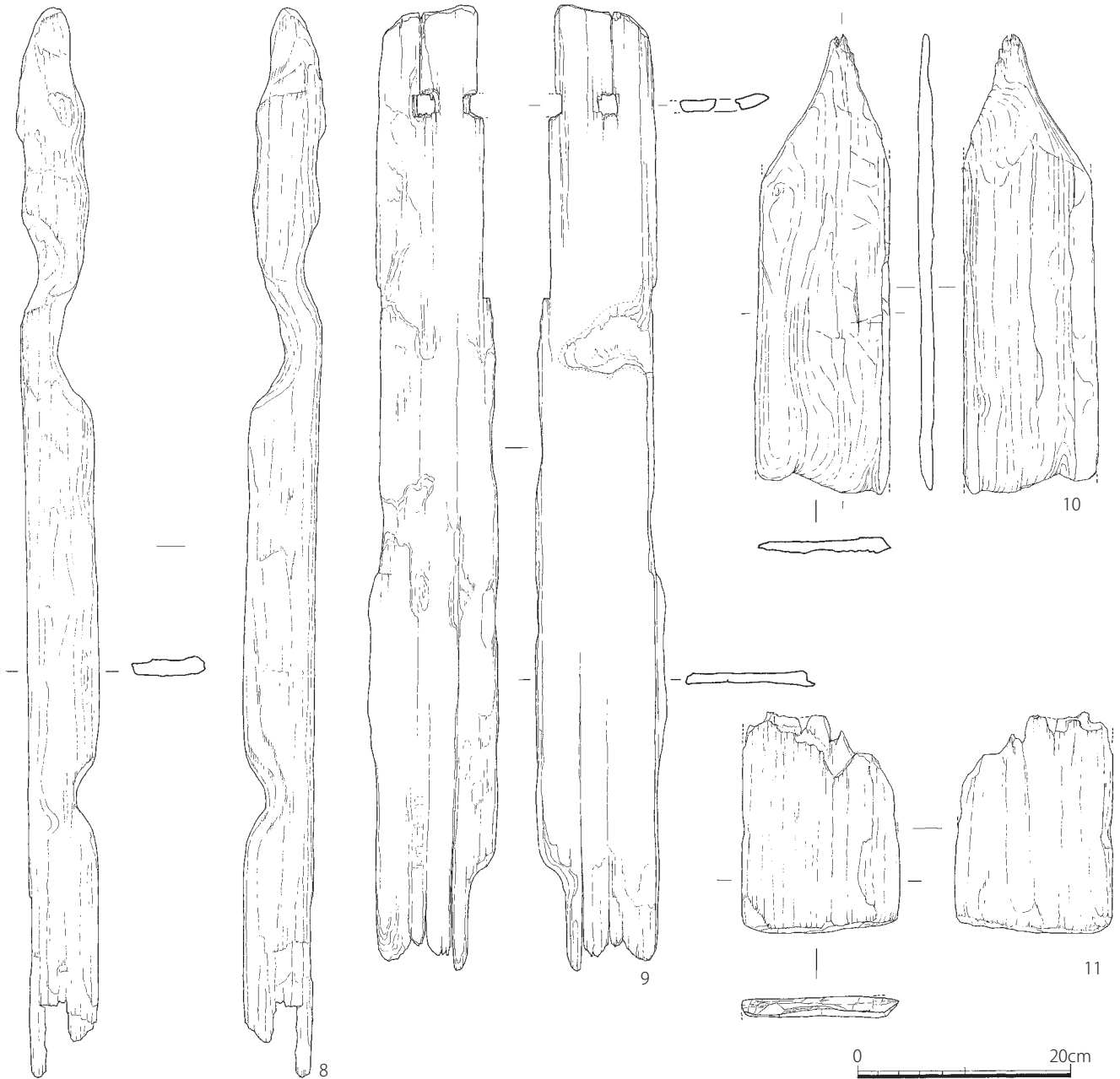


fig45-12 大石垣地区災害後採集木製品実測図その 3 (1/6)

部調整から一枚作りとみられる。

明灰色砂層出土遺物 (fig45-5)

須恵器

坏蓋 (20) 残存高 2.1cm。口径は 9.2cm 程度に復元されようか。天井部と口縁部の境に沈線がめぐる。

胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、灰褐色～灰色を呈す。

暗茶灰砂層出土遺物 (fig45-5)

瓦類

平瓦 (21～22) 21 は残存長 9.8cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕がみられる。端部調整はケズリを 2～3ヶ所に施す。胎土は 7mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、瓦質～須恵質に仕上がり、淡

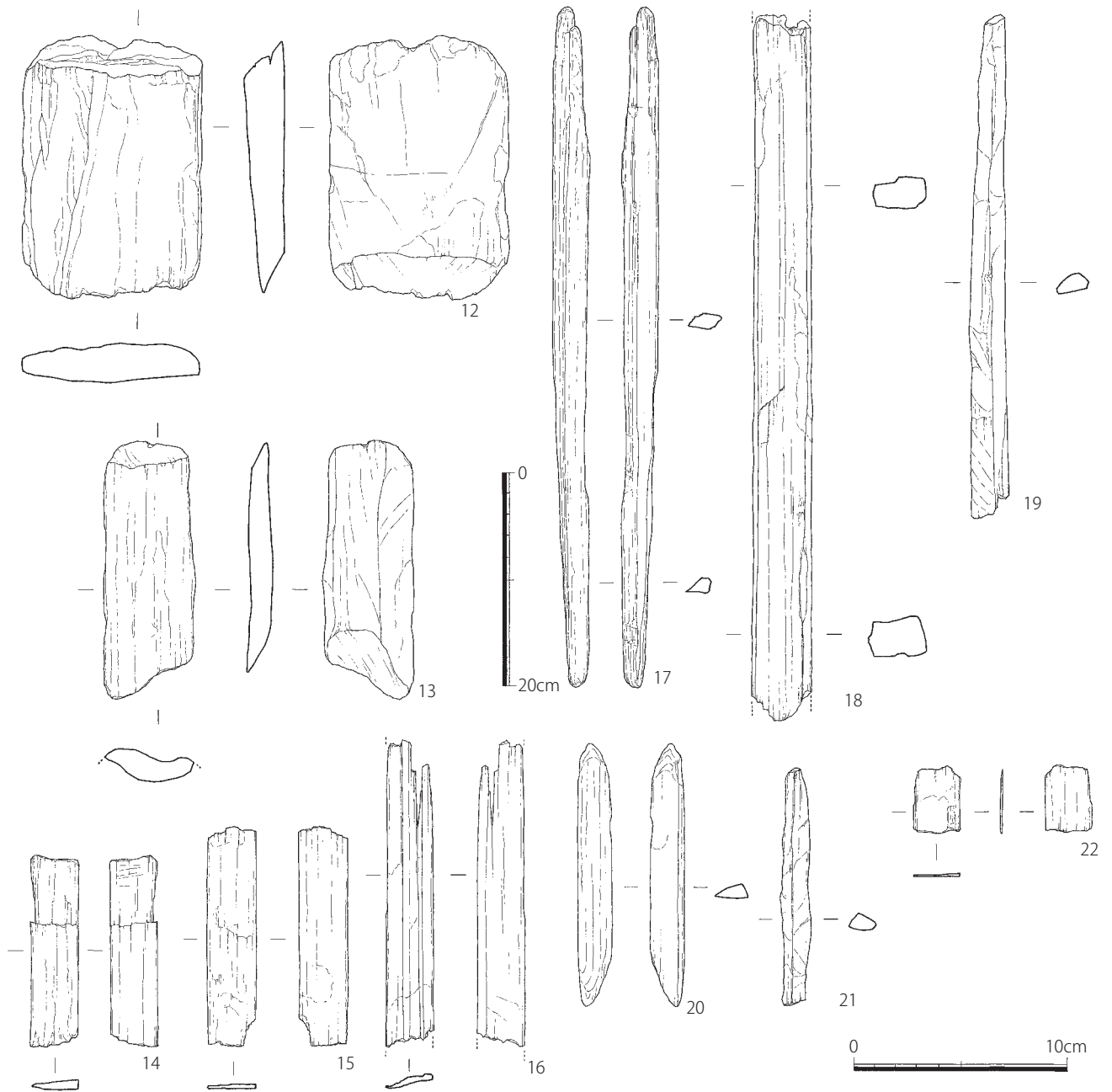


fig45-13 大石垣地区災害後採集木製品実測図その4 (17は1/6、その他は1/3)

暗茶灰色～黒灰色を呈す。端部調整から一枚作りとみられる。

22は残存長17.3cm。凸面はナデ消し、凹面は細かな布目痕と糸切りとみられる条痕が観察される。端部調整はケズリを2ヶ所に施す。胎土は4mm以下の砂粒を含む。焼成は良好で、須恵質に仕上がり、断面は暗赤紫褐色、その他は紫がかった灰色～赤茶褐色を呈す。糸切り痕および端部調整から一枚作りとみられるが、焼成の良好さや凸面ナデ消しなど古い印象も受ける。

b. 木製品

白黄色砂層出土木製品 (fig45-7)

柱材（1～2） 1は丸太材で、残存長78.3cm、径19.2×18.3cm。図の上端は欠失しているが、下端を長さ約18cmにわたってケズリを入れる。杭として使用したもののか。

2は丸太材で、腐植が進んでいる。残存長77.4cm、径17.5×15.0cm。図の上端は欠失しているが、下位には、長軸13.0cm、短軸約7.5cmの断面四角形のホゾを穿っている。

明茶灰色砂層出土木製品（fig45-8・9）

柱材（3～5） 3は残存長184.2cmの角材で、断面は22.0×17.1cmを計る。一方の面が幅約9.0cm、深さ最大7.0cmとU字形に抉れている。このため樋の可能性も考えられるところだが、腐植もすみ判然としないため、ここでは柱材として報告している。

4は残存長54.1cmの材で、断面は15.1×9.3cm程度を計る。一方の面がU字形に抉れており、これも樋の可能性が考えられる。図の下位右側にもU字の抉れを観察することができる。ただし腐植が進んでいるため判然としないため、ここでは柱材として報告している。なお図の下端小口は取り上げ時に切断したものである。

5は残存長56.0cmで、22.0×17.1cmのやや扁平した断面形を呈す。一端にホゾの凸部をもつ。ホゾは、断面10.5×7.3cm、長さ8.0cmを計る。なお図の下端小口は取り上げ時に切断したものである。

木刀状製品（6） 長さ105.7cmの製品で、図の右側が長さ26.4cmにわたって柄のように削られている。柄と想定する部分の断面を図示した箇所では径1.5cmを計る。刃と想定した部分の断面を図示した箇所では中央は2.3×1.8cmを計る。木刀としてはやや細身の印象を受ける。

加工材（7～8） 7は長さ102.1cm、断面は5.6×4.0cmを計る。一端に幅1.5cm、深さ1.0cmのホゾ穴が穿たれている。

8は判然としないが、加工材とみて報告した。残存長33.7cm、断面は6.75×3.9cmを計る。図の下半の切れ込みに見える部分は、材が脆くなり割れ剥がれたものと考えられるが、図の上部にホゾの可能性のある割りこみがみられる。

杭（9） 長さ55.2cm、断面は5.0×3.9cmを計る。図の下端にケズリを入れている。

棒状製品（10） 柱目に沿って加工された製品である。残存長16.5cm、断面は1.1×0.7cmを計る。

加工チップ（11） 手斧で削り取ったチップとみられる。長さ12.4cm、幅8.8cm、厚さ1.3cm。

不明加工材（12） 細長い加工材である。長さ58.7cm、幅3.1cm、厚さ2.0cm。

くびき（13） 荷車等の長柄の先端の牛馬の頸にかける材（くびき）とみられる。図上で残存幅56.3cm、高さ35.3cm。7.6×5cm程度の角材を「く」字に折った形を呈す。屈曲部には図の天地方向に4.5×3.0cm程度の断面長方形のホゾ穴が穿たれる。一端が残存しており、幅75.4cmの製品に復元される。成形は全面ケズリを施している。

大石垣地区災害後採集木製品出土遺物出土遺物（fig45-10～14）

柱材（1～3・23） 1は残存長51.1cm、断面は18.3×16.3cmを計る。側面は、一部に表皮がついているもののケズリ加工を施す部分もみられる。図の下端は長さ約18cmにわたってケズリを入れる。杭として使用したもののか。

2は残存長36.1cm、断面は15.7×15.7cmを計る。

3は残存長47.4cm、断面は17.4×15.0cmを計る。一部にケズリ加工を施す。

23は長さ2.80m、断面は31×28cmを計る。半分に面取りの痕跡が残っている。ただ手斧を用いた痕跡は所々しか観察できない。小口は両方ともに切断している。なお重みで扁平していて、下になっ

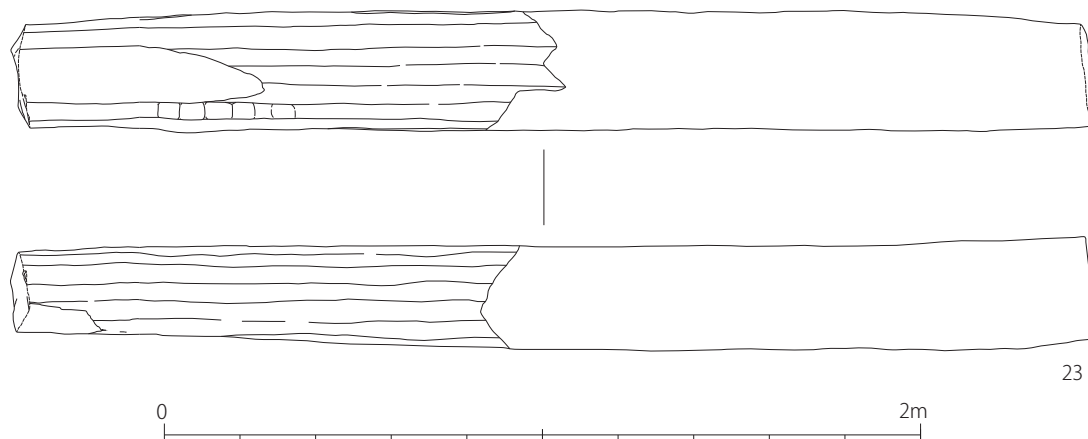


fig45-14 大石垣地区災害後採集木製品実測図その5 (1/20)

ていた部分の加工痕は消えている。

角材 (4～5) 4は残存長 52.5cm、断面は 6.05×3.5cm を計る。図の上部に 3.2×2.1cm の断面四角形のホゾ穴が穿たれている。

5は残存長 62.0cm、断面は 9.4×8.7cm を計る。上位はほとんど焼損し炭化している。

板材 (6～11) 6は残存長 153.3cm、断面は 16.0×3.4cm を計る。表面は板材にするための割り放しが観察される。なお図の右側はかなり摩耗している。一部に 2.0×1.8cm の断面方形のホゾ穴が穿たれている。

7は残存長 127.6cm、断面は 10.4×2.7cm を計る。表面は図の右側がかなり摩耗している。板材にするための割り放しが観察される。

8は残存長 101.4cm、断面は 6.7×1.9cm を計る。表面は両面ともかなり摩耗している。このため、側面に数ヶ所抉りがみられるものの、これが加工によるものか、風化によるものか判然としない。

9は残存長 91.7cm、断面は 12.4×1.3cm を計る。図の上位中央に 2.0×1.8cm の断面方形のホゾ穴が穿たれており、その横にも同規模のホゾ穴が観察される。なお図の右側中央は火を受け炭化している。

10は残存長 42.9cm、断面は 12.8×1.5cm を計る。板材にするための割り放しが観察される。

11は残存長 21.0cm、断面は 14.9×1.9cm を計る。

加工チップ (12～13) 12は手斧で削り取ったチップである。残存長 12.3cm、断面は 8.4×2.0cm を計る。

13は手斧で削り取ったチップである。残存長 12.1cm、断面は 4.3×1.6cm を計る。

木札状製品 (14～16) 14は残存長 9.0cm、断面は 2.2×0.45cm を計る。

15は残存長 10.3cm、断面は 2.3×0.2cm を計る。

16は残存長 14.3cm、断面は 2.2×0.3cm を計る。

棒状加工品 (17～21) 17は残存長 64.85cm、断面は 3.5×1.7cm を計る。

18は残存長 33.0cm、断面は 2.8×1.9cm を計る。

19は残存長 23.5cm、断面は三角形を呈し、1.7×1.0cm を計る。摩耗が進む。

20は残存長 12.05cm、断面は三角形を呈し、1.6×0.7cm を計る。上端は火を受け炭化している。

21は残存長 11.1cm、断面は三角形を呈し、1.9×0.8cm を計る。

削屑 (22) 残存長 4.1cm、断面は 2.2×0.15cm を計る。

tab45-1 大野城跡第 45 次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時 期	地区番号
1トレ黄褐砂	1トレンチ 黄褐色砂層	堆積層				7c末～	1トレンチ
1トレ青灰砂	1トレンチ 青灰色砂層	堆積層				～奈良	1トレンチ
2トレ暗茶褐土	2トレンチ 暗茶褐色土層	堆積層				古代	2トレンチ
2トレ黒褐土	2トレンチ 黒褐色土層	堆積層	平安期の土師器あり。 ガラス薬瓶？は混入か			—	2トレンチ
3トレ暗茶褐土	3トレンチ 暗茶褐色土層	堆積層				平安中期～	3トレンチ
表土	表土						—
白黄色砂	白黄色砂層	堆積層	平成15年7月災害後に堆積した層。遺物は奈良時代のものが多い。			平成15～17年度	—
暗灰色砂	暗灰色砂層	堆積層				—	—
明灰色砂	明灰色砂層	堆積層				小田IV型式～	—
暗茶灰色砂	暗茶灰色砂層	堆積層				奈良～	—
明茶灰色砂	明茶灰色砂層	堆積層	大石垣地区出土木製品を第45-2次調査開始前に収集した			—	—

tab45-2 大野城跡第 45 次調査 出土遺物一覧表

※時期は、各項に含まれる最新の出土遺物から判断したものである。実際は、遺構間の切り合い関係等の要素を加味する必要がある。

1トレンチ黄褐色砂	7c末～	暗灰砂層	奈良～
須 恵 器	坏c(体部に稜あり)	須 恵 器	壺か
1トレンチ青灰色砂層	～奈良	明灰砂層	小田編年IV型式～
須 恵 器	甕	須 恵 器	坏蓋(小田編年IV型式)
瓦	類 丸瓦(模骨)		
2トレンチ暗茶褐色土層	古代	暗茶灰砂層	奈良～
瓦	類 平瓦	瓦	類 丸瓦?(ナデ消し)、平瓦(縄目)
2トレンチ黒褐色土層	平安～	明茶灰砂層	
土 師 器	供膳具、破片	木 製 品	くびき、不明加工材、加工片(チップ) 板材、丸太材、角材
そ の 他	琥珀色の小瓶(薬瓶か) ……混入か		
3トレンチ暗茶褐土層	平安中期～	表土	
須 恵 器	甕	須 恵 器	瓶か?、甕
土 師 器	小皿a、甕か	土 師 器	甕
瓦	類 破片	瓦	類 平瓦(縄目(模骨))
金 属 製 品	鉄釘?		
そ の 他	炭化物		
白黄色砂層	平成15～17年度の堆積		
須 恵 器	坏蓋、蓋c、蓋3、坏、坏c、甕、壺、壺a(小型) 壺×瓶		
土 師 器	坏a×皿a、供膳具?、甕、甕a、甕(角閃石)、破片		
黒色土器B類?	椀か		
瓦	類 平瓦(縄目(模骨)、一枚作り)、丸瓦(ナデ消し)		

Ⅲ - 3. 第 45-2 次調査

1. 調査に至る経緯

この調査は、平成 17 年度末に実施した第 45 次調査を引き継いで行ったものである。

調査は平成 18 年 9 月 26 日から平成 19 年 3 月 26 日の期間で実施した。対象面積は 300 m²、調査面積は約 250 m²。土器・瓦などコンテナ 2 箱出土した。調査は井上信正・城戸康利が担当し、整理報告は井上信正が行った。

2. 調査の概要

平成 17 年度末に行った第 45 次調査に引き続き、大石垣原状復旧のための構造の確認、また里道・排水処理に関する旧状の確認を行った。

まず 17 年度の調査で回収できていなかった木製品の回収を行った。これらは第 45 次調査の項で採集木製品として報告している。

次に第 45 次調査の 3 トレンチ（大石垣の南斜面部から下った地点で緩やかに屈曲する地点）で前年度調査ができなかったトレンチ北側の調査を行うため、4 トレンチを設けた。

その後、北西側斜面に向かう大石垣の石垣裏側の表土を除去して大石垣の輪郭を出し、大石垣の方向を観察した（5 トレンチとしたが図化記録は行っていない）。また第 45 次調査では昭和 50 年整備設置通路を確認しており、復元整備の根拠とするため、2 トレンチをさらに掘り下げて古い通路の有無を確認するとともに、昭和 50 年通路跡とみられる窪みの西半分を 6 トレンチとして調査した。

その他調査時には、大石垣南斜面の掃除、大石垣下流の掃除などを行った。

3. 遺構

大石垣前面

第 45 次調査では前面の調査を見送ったが、水門の有無確認も必要と判断し、大石垣基底部の確認を可能な範囲で実施することにし、崩壊部の脇を流れる谷水流付近を掘り下げた。

結果、この位置では水門は確認されなかった。根石となる巨石の下は、径 0.15 ～ 0.4 m 程度の礫が乱雑に敷かれている様子が確認できた。さらに下は明茶褐色～灰色の砂層・砂礫層が花崗岩盤の上に堆積している状況であった。大石垣は最下部に巨石を利用することでその間を水が抜けるような暗渠機能をもっていたとみられる。

大石垣背面

4 トレンチおよび 45-2SX021 (fig45-2-1 ～ 2)

第 45 次調査 3 トレンチの北に設けたトレンチで、東南からの急斜面を下ってきた大石垣を谷部でどう支持しているかを確認した。

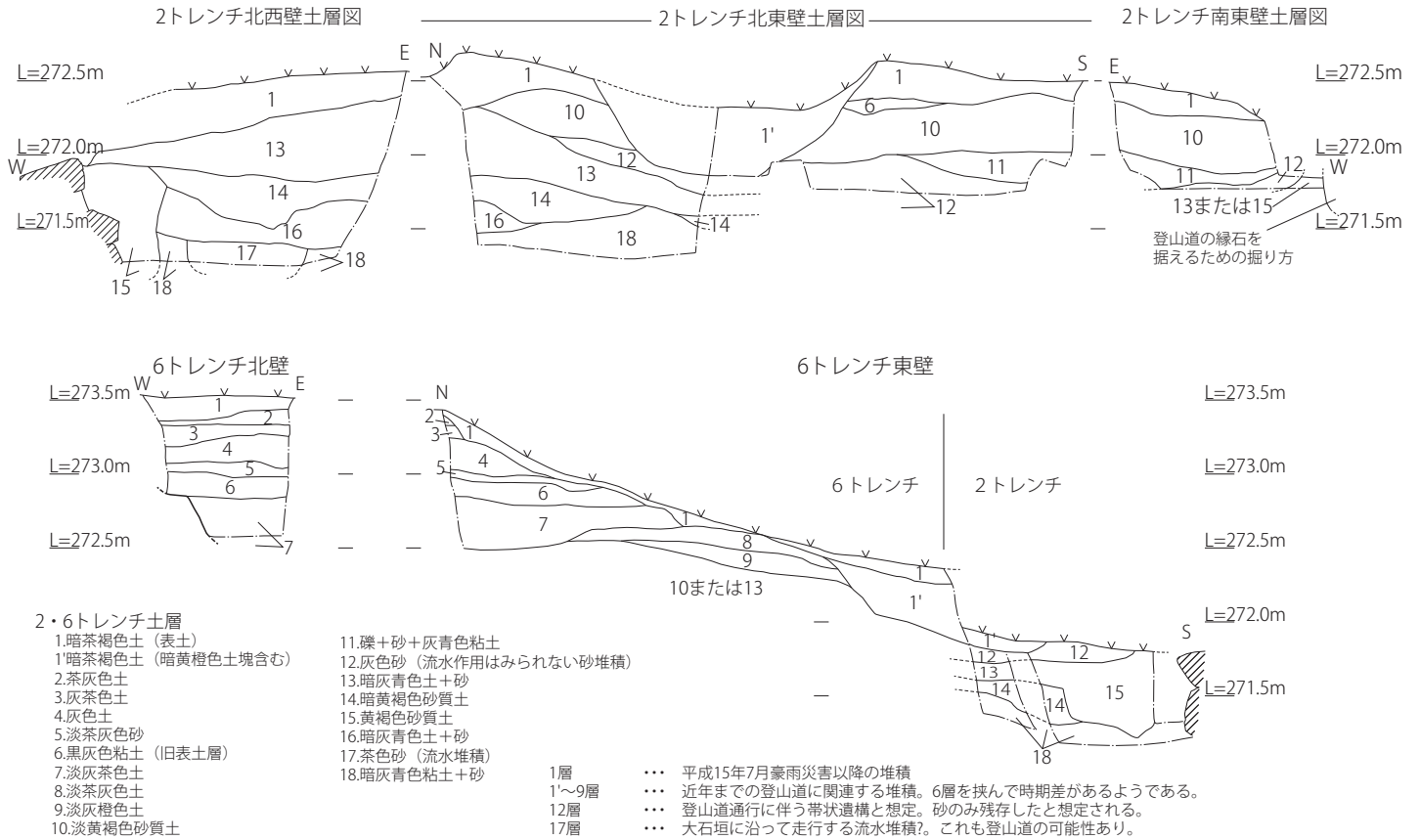
その結果、谷部の石垣は自立していることが確認され、急斜面の石垣の荷重を支えているわけではないことがわかった。このことから、斜面の石垣は斜面にもたれかかるよう施工されたことが明らかとなった。

東南斜面から下ってきた大石垣は、ここで北西側へ約 120 度屈曲していることも確認され、ここから比較的まっすぐに反対斜面へ石垣が取り付けられている。

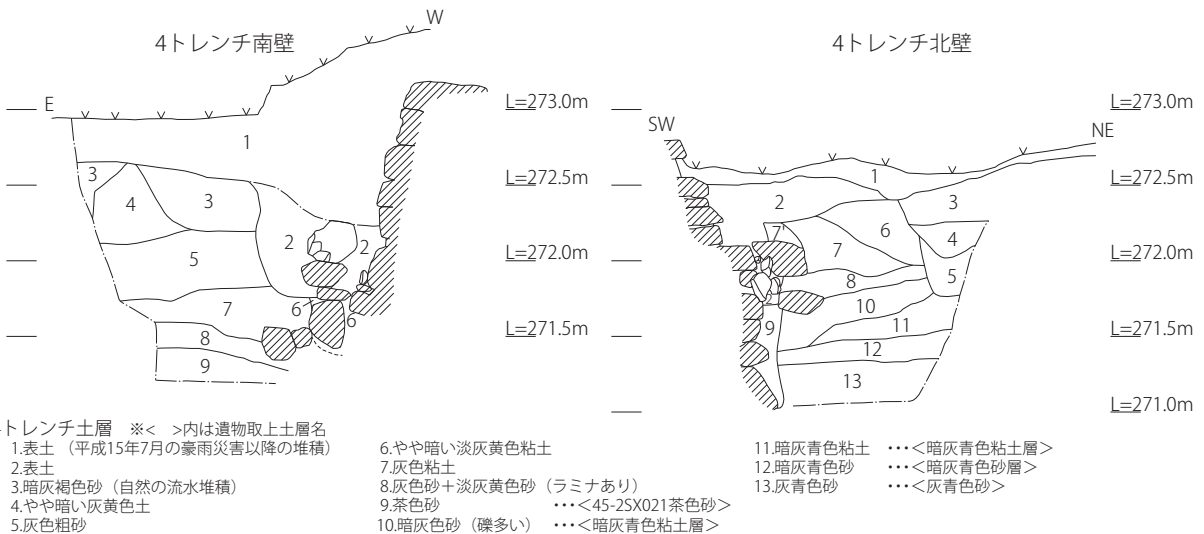
4 トレンチを掘り下げると、暗灰青色粘土層までは昭和以降の堆積であった。その下位は縄目叩き



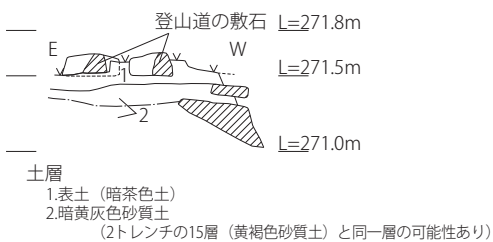
fig45-2-1 大野城跡第45・45-2次調査 全体配置図(1/100)



4トレンチ



SF022大石垣上面敷石下



大石垣最下位基礎部

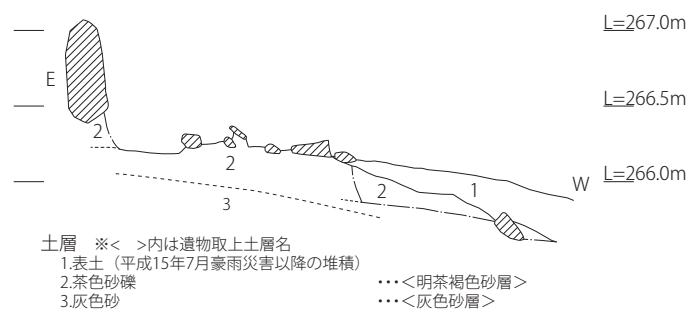


fig45-2-2 大野城跡第 45-2 次調査 各土層図 (1/50)

瓦など奈良時代以前の遺物を含む堆積層がある。そして明橙茶色砂層（酸化が進んでいる）を検出したところで調査を終了した。

なお大石垣背面には深い溝状の堆積層がみられた。石垣に沿って自然に形成された流路とみられるが、ここから現代のプラスチック椀などが出土した。ビニールなどは石垣の中に入った状態で確認されており、近年まで大石垣背面が露出していたこと、石垣の内部は隙間があることが窺えた。

里道

2・6 トレンチおよび 45-2SF022 (fig45-2-1 ~ 2)

大石垣中央部の背面に設定した 2 トレンチ（第 45 次調査）をさらに掘り下げ、土層観察を行った。15 層・黄褐色砂質土層を除去したところで大石垣に平行する窪みを確認。17 層・茶色砂層が流水堆積の体をなしていることから、古い登山道で雨水が流下した可能性を想定している。

また第 45 次調査で確認した大石垣上の里道（昭和 50 年整備設置通路）を SF022 としたが、この北延長部に里道跡とみられる窪みが続いており、その西側半分を 6 トレンチと設定し掘り下げたところ、通行等にもなうとみられる堆積層を確認した。

SF022 についてはさらに、大石垣上面の敷石をはずして状況を観察した。敷石の下には表土層だったとみられる汚れた土が薄く堆積し、その下に茶色砂礫層を検出、この一部を掘り下げたところ、下から大石垣本体裏込石とみられる径 10 ~ 20cm の礫が検出された。これにより元々この位置に里道があったわけでないことが確認できた。

4. 遺物

45-2SX021 (4 トレンチ) 出土遺物

45-2SX021 暗黄褐色土出土遺物 (fig45-2-3)

その他の遺物

プラスチック椀 (1) 口径 11.7cm、器高 5.7cm、復元底径 7.9cm。かなり風化が進んでいるが、口縁部が擦れて摩耗している様子が観察される。想像逞しく推測すると、以前行われた発掘調査の用具の可能性もあるのではなかろうか。

45-2SX021 茶色砂出土遺物 (fig45-2-3)

土師器

甕 (2) 頸部～肩部の破片である。残存高 6.1cm。外面は摩耗し調整不明だが、内面はケズリが観察される。胎土に角閃石をふくむ。焼成は良好で、明茶褐色～暗茶褐色を呈す。

45-2SF022 黄灰茶色粘土出土遺物 (fig45-2-3)

瓦類

平瓦 (3) 残存長 7.3cm。凸面は格子目叩き (1.1cm 四方程度) で、凹面は風化して不明。胎土は 0.5 ~ 1mm 大の砂粒を少し含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、淡黄白色を呈す。

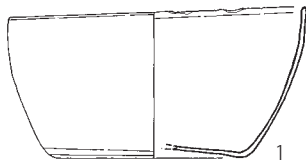
2 トレンチ各層出土遺物

2 トレンチ暗灰青色土+砂層出土遺物 (fig45-2-4)

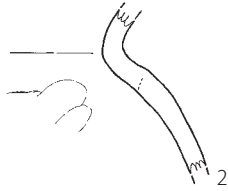
須恵器

蓋 1 (11) 口縁部の破片である。残存高 1.7cm。胎土は 0.5 ~ 1mm 大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で硬質に仕上がる。還元は表面のみで暗青灰色～淡灰色を呈し、断面は淡茶灰色を呈す。

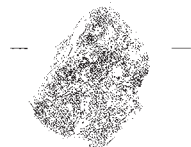
SX021 暗黄褐色土



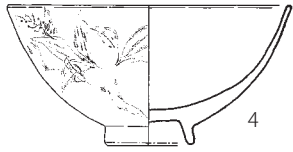
SX021 茶色砂



SF022 黄灰茶色粘土



4トレ暗灰青色粘土層



4トレ暗灰青色砂層

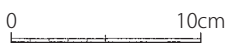
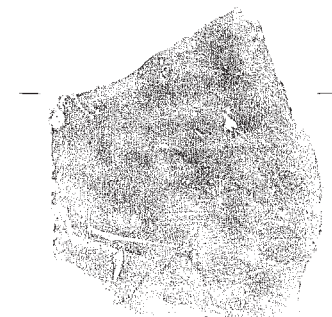
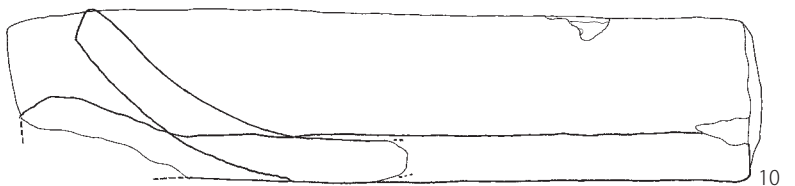
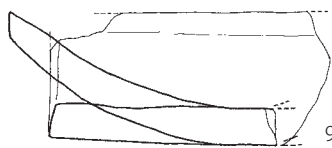
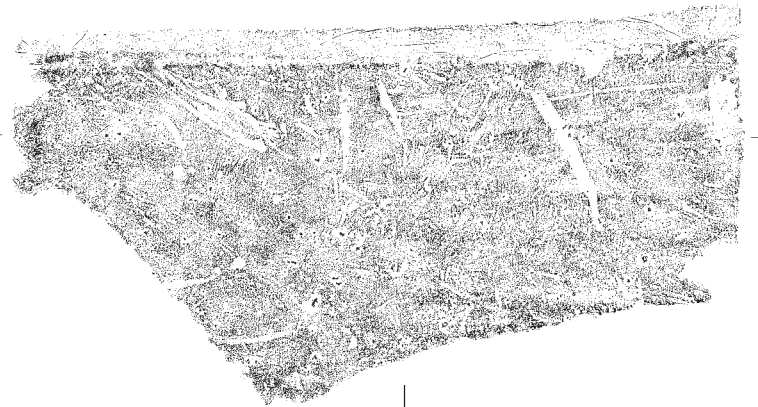
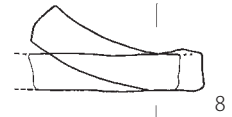
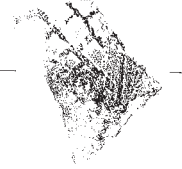
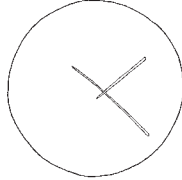
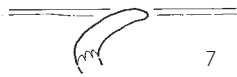
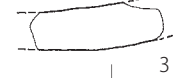
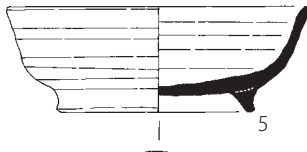


fig45-2-3 第 45-2 次調査 出土遺物実測図その 1 (1 ~ 8 は 1/3、9 ~ 10 は 1/4)

坏 (12) 口縁部の破片である。残存高 2.2cm。胎土は 0.5 ～ 1mm 大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で硬質に仕上がる。還元も良好で淡灰色を呈す。

4 トレンチ各層出土遺物

4 トレンチ暗灰青色粘土層出土遺物 (fig45-2-3)

国産磁器

碗 (4) いわゆる茶碗である。口径 11.2cm、器高 5.0cm、高台径 3.6cm。素地は白色で高台底を除き、全面に薄く透明釉がかかる。内面には鉋削りとみられる縦方向の条痕を施した後中心から外側に向けてのナデが観察される。外面には木枝・葉・実が描かれ、木枝は暗褐茶色の濃淡で描かれ、葉は暗緑色で、実は明赤褐色で盛り上げて絵付けされる。

4 トレンチ暗灰青色砂層出土遺物 (fig45-2-3)

須恵器

坏 c (5) 復元口径 12.0cm、器高 4.2cm、復元高台径 7.8cm。内面見込みの摩耗が進んでいる。また外面高台内に「×」のヘラ記号を焼成前に施す。胎土は 1mm 以下の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、暗青灰色を呈す。

甕 (6) 頸部～肩部の破片である。残存高 6.6cm。外面は細かな格子目叩きで、内面は同心円文叩きを施す。胎土は 1mm 以下の砂粒をごく少量含む。焼成還元ともに良好で、内外面は暗灰色、断面は暗紫灰色を呈す。

土師器

甕 (7) 口縁の破片である。残存高 2.2cm。内外面とも摩耗し調整不明。胎土は 1mm 以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、淡褐黄色を呈す。

瓦類

平瓦 (8) 四隅端部の一角の破片である。残存長 5.9cm。凸面は縄目叩き後ナデを施す。凹面は布目痕が観察される。端部調整は、小口はケズリ、側面は凹面側に切り込みを入れた後割り放している。胎土は 1mm 以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で瓦質に仕上がり、暗青灰色～淡灰白色を呈す。なお平瓦として報告したが丸瓦の可能性もあろうか。

4 トレンチ灰青色砂層出土遺物 (fig45-2-3・4)

瓦類

平瓦 (9～10) 9 は四隅端部の一角の破片である。残存長 14.7 cm。凸面は叩きをナデ消している。凹面は風化が進んでいるが布目痕が観察される。端部調整は、小口はケズリ、側面は 2ヶ所にケズリを施す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、白灰色～淡黒灰色を呈す。端部調整から一枚作りとみられる。

10 は長軸が完存する。長さ 40.0cm、残存幅 18.6cm。凸面は縄目叩きで風化が進んでいる。凹面も風化が進んでいる。端部調整は、小口はケズリ、側面は 2ヶ所にケズリを施す。胎土は 5mm 以下の砂粒を若干含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、白灰色～淡灰褐色を呈す。端部調整から一枚作りとみられる。

木製品

木札状製品 (20) 残存長 13.3cm、幅 3.0cm、厚さ 0.8cm を計る。一部にケズリ痕跡がみられる。

2トレ暗灰青色土+砂層



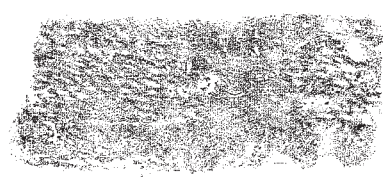
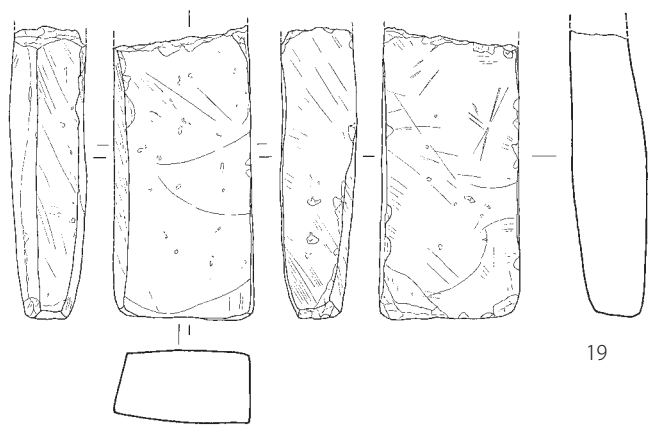
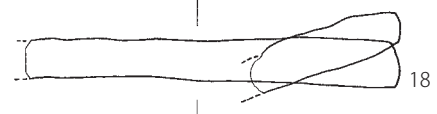
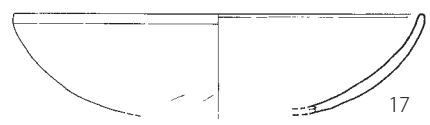
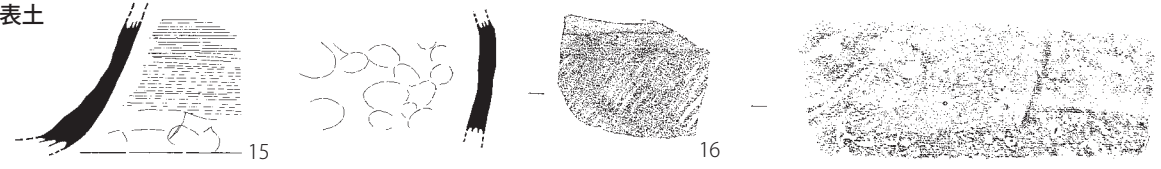
石垣裏込内



明茶褐色砂層



表土



4トレ灰青色砂層

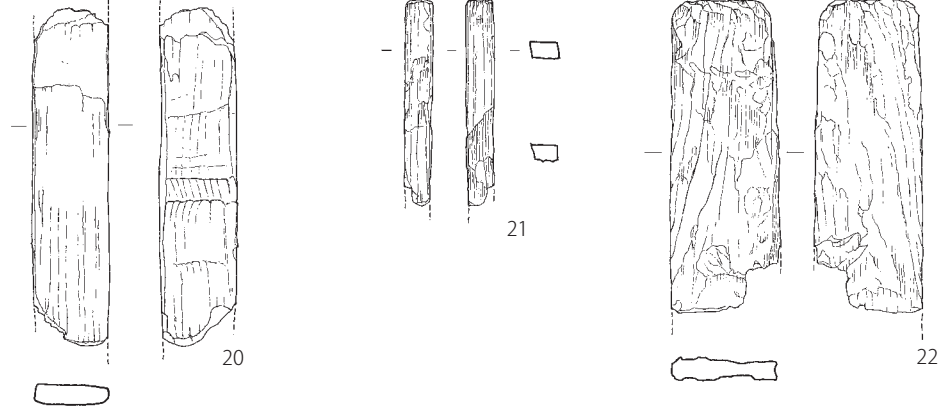


fig45-2-4 第 45-2 次調査 出土遺物実測図その 2 (1/3)

その他の遺構・各層出土遺物

石垣裏込内出土遺物 (fig45-2-4)

須恵器

甕 (13) 高坏の脚端部の可能性もあるが、判然としないため甕口縁として報告した。残存高 1.65cm。内面端部をわずかな凹みを一周させている。内外面とも回転ナデを施す。胎土は 2mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で硬く焼きしまっているが、還元は判然とせず、黒茶色～暗茶色～茶色を呈す。

明茶褐色砂層出土遺物 (fig45-2-4)

土師器

坏 a (14) 平安期の土師器供膳具底部の破片である。小皿 a の可能性もあるがここでは坏 a として報告する。残存高 0.5cm。底部調整はヘラ切り。胎土は 1mm 以下の砂粒をわずかに含む。角閃石も 1 つみられる。焼成はややあまく、淡褐灰色を呈す。

表土出土遺物 (fig45-2-4)

須恵器

壺 (15) 胴部下位の破片である。残存高 5.2 cm。外面は横方向の搔き目を、最下位はケズリを施す。内面は回転ナデを施す。胎土は 2mm 以下の白色砂粒が散見される。焼成は良好で硬質に仕上がり、還元も良好。暗青灰色～灰色を呈す。大石垣前面北側の谷部表土から出土。

壺 d×f (16) 胴部下位の破片である。残存高 4.3cm。肩部外面はヨコナデ、胴部外面は平行目の叩きで、胴部内面は指頭痕跡・ナデが観察される。胎土は 1～2mm 以下の砂粒を含む。焼成はあまく、還元は不良。外面および断面は淡灰色～淡茶灰色、内面は淡赤茶色を呈す。肥後荒尾産。大石垣背面で出土。

土師器

皿 b (17) 復元口径 16.2cm、残存高 4.0cm。内外面とも風化が進むが、外面底部に手持ちケズリの痕跡をわずかに確認できる。胎土は 0.5mm 程度の砂粒をわずかに含むものの精良である。焼成は良好で、明茶褐色～暗橙色を呈す。大石垣前面北側の谷部表土から出土。

瓦類

平瓦 (18) 四隅端部の一角の破片である。残存長 15.0 cm。全体に風化が進んでいる。凸面は縄目叩きで、凹面は模骨痕が観察される。端部調整は、小口はケズリ、側面も 2ヶ所にケズリを施す。焼成はあまく、瓦質に仕上がり、灰黒色～淡灰黒色を呈す。大石垣前面北側の谷部表土から出土。

石製品

砥石 (19) 残存長 12.0cm、幅 5.4cm、厚さ 2.9cm。小口は加工しているものの粗く表面調整をする。その他は摺面となっており、いずれも平滑である。砂岩とみられ、堆積面に沿って酸化層（茶褐色）が観察される。大石垣の北へ続く斜面の石垣背面に挟まっていたものである。

木製品

不明製品 (21) 残存長 8.1cm、幅 1.1cm、厚さ 0.6cm を計る。

木札状製品 (22) 残存長 12.4cm、幅 4.1cm、厚さ 0.9cm を計る。

tab45-2-1 大野城跡第 45-2 次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
21	城45-2SX021	溝?	大石垣背面の石垣に沿った溝。自然に形成された流路の可能性あり	茶色砂→淡灰茶色土→暗黄褐色土		昭和	4トレンチ
22	城45-2SF022	大石垣上の登山道(遊歩道)					6トレンチ
黄褐色砂質土	黄褐色砂質土層	石垣裏込め					2トレンチ
淡灰青色粘土	淡灰青色粘土層	石垣裏込め					2トレンチ
暗灰青色土+砂	暗灰青色土+砂層	堆積層	大石垣背面の堆積土。2トレンチ北端で検出				2トレンチ
暗灰青色粘土	暗灰青色粘土層	堆積層	大石垣背面の堆積土。粘土を主体とする	灰青色砂層→暗灰青色砂層→暗灰青色粘土層			4トレンチ
暗灰青色砂	暗灰青色砂層	堆積層	大石垣背面の堆積土。砂を主体とするが、粘土も含まれている	灰青色砂層→暗灰青色砂層→暗灰青色粘土層			4トレンチ
灰青色砂	灰青色砂層	堆積層	大石垣背面の堆積土。砂を主体とする	灰青色砂層→暗灰青色砂層→暗灰青色粘土層			4トレンチ
淡灰茶色土	淡灰茶色土層	堆積層					5トレンチ
明茶褐色砂	明茶褐色砂層	堆積層	大石垣前面最下位基礎部の堆積層。				左谷南石垣前面基礎部

tab45-2-2 大野城跡第 45-2 次調査 出土遺物一覧表

左谷北側大石垣裏側 表土

須	恵	器	壺(肥後系?)
土	師	器	壺
石	製	品	砥石

左谷南石垣前面 表土

須	恵	器	壺、甕
土	師	器	皿b
瓦		類	平瓦(縄目)

左谷南石垣前面 明茶褐色砂

須	恵	器	壺×供膳具
土	師	器	煮炊具、甕a、坏a?(ヘラ)

2トレ南側 淡黄褐色砂質土

須	恵	器	壺×甕(カキ目あり)
---	---	---	------------

2トレ 黄褐色砂質土

須	恵	器	瓶(の口縁部)?
土	師	器	供膳具、煮炊具
瓦		類	片

2トレ 暗灰青色土+砂 遺物だけ見ると、古代～

須	恵	器	坏、蓋l
土	師	器	甕

4トレ S-21淡灰茶色土 現代

須	恵	器	壺
そ	の	他	ビニール、鋤滓?

4トレ S-21暗黄褐色土 現代

そ	の	他	プラスチック製のお椀
---	---	---	------------

4トレ S-21茶色砂 遺物だけみると、7c後～

土	師	器	甕
---	---	---	---

4トレ 暗灰青色粘土 現代

土	師	器	煮炊具、供膳具 (いずれも磨耗)
そ	の	他	現代の茶碗、清酒「いそのさわ」の一升瓶と蓋 ガラス瓶、明治ジュースのプラスチック製の蓋

4トレ 暗灰青色砂 8c～

須	恵	器	坏c(7世紀第3～4四半期)、甕
土	師	器	甕、供膳具 (いずれも磨耗)
瓦		類	片(縄目、磨耗)

4トレ 灰青色砂 遺物だけみると、奈良～

土	師	器	片
瓦		類	平瓦(縄目、磨耗している)

S-22登山道敷石基礎埋土 遺物だけみると古代～

須	恵	器	甕片
土	師	器	煮炊具(角閃石入もあり)、大型坏>丸坏、供膳具

S-22黄灰茶色粘土 平安～

土	師	器	甕、供膳具(平安)、甕a
瓦		類	平瓦(格子目)

石垣ウラ込め内 古代～

土	師	器	片
---	---	---	---

Ⅲ - 4. 第 48 次調査

1. 調査に至る経緯

本調査地は、太宰府市大字太宰府字岩谷 1790-1、大字観世音寺字大浦谷 715-51（大野城跡増長天南地区）に所在する。

大石垣地区の東側には、通称「馬責（うまぜめ）」と呼ばれる東西に細長い平坦地がある。この南側を区切るよう外周土塁が通っているが、調査地はこの「馬責」東端にある。ここは増長天（鏡池）地区礎石群から南へ直線距離で 150 m、太宰府口城門からほぼ南西 210 m で、標高 320 m 前後の地点である。

本地区では、平成 15 年 7 月の豪雨災害により外周土塁前面が表層崩壊した。これにより、これまで知られていなかった城門遺構の一部が表れ、崩壊のり面に石材や版築状土塁が露出した。このため、平成 19 年度に発掘調査を行い、土塁および城門の被災状況の把握、旧状の確認を行った。

調査は平成 19 年 9 月 20 日から平成 20 年 3 月 31 日の期間で実施した。対象面積は 300 m²、調査面積は 133.8 m²。土器・瓦などがコンテナ 4 箱出土した。調査は井上信正・下高大輔が行い、整理報告は井上信正が行った。

2. 調査の概要

調査では、まず崩落部のり面全面に堆積する表層土を除去し、土塁の毀損状況と残存遺構を面的に確認した。また土塁範囲および地山層の確認を行い、復旧工事の範囲を確定させることにした。

この作業によって、崩落部のり面全体で版築積土を検出し、その中央で、石材を用いた城門遺構が輪切りの状態で検出された。このすぐ上の土塁も大きく凹んでおり、城門の切り通しであることが確定した。

さらに、この城門の外側には、南へと尾根筋を下っていく林道があり、城門と林道との関連が想定されるため、土塁切り通しとつながりよう林道復旧することとなった。ただ、城内側に溜まった雨水がここに集中し、再び崩落する懸念もあり、切り通し中央に簡易水路を設けることとした。このため工事に際して地下遺構への影響を確認する目的で、また城門埋没過程や城門範囲把握を目標に、城門中央にトレンチを入れた。その結果、通行によると見られる堆積・硬化面を検出し、その下から城門の石敷き・石階段等を検出した。城門は石敷きの時期とそれ以前の時期の 2 時期あったことが判断された。

3. 遺構

城門 (fig48-1 ~ 6)

48SB001 (観世音寺口城門)

城門遺構は、崩落部のり面での断面観察、また排水路設置予定部のトレンチでの観察を行った。これにより城門は少なくとも新旧二時期があることが想定された。

新時期（Ⅱ期）の城門（SB001 新）は、床は石敷き、壁は石垣で、城内から城門に下る箇所（1.5 m の比高差）に 10 段の石階段を設けている。長さ 9.85 m 以上、石垣内法幅は 4.37 m 程度に復元できる。この城門の石積裏込土などをみると、黄色土系の埋土が使用されているのが特徴的であるといえる。これと同様の埋土の特徴をもつ小穴が城門前面の城門南壁石垣に沿った位置で確認された（SB001b）。門柱の一つとみられ、直径 1.6 m 程度の掘り方を持ち、柱痕部分は径 30 ~ 40cm 程度ある。門道部を

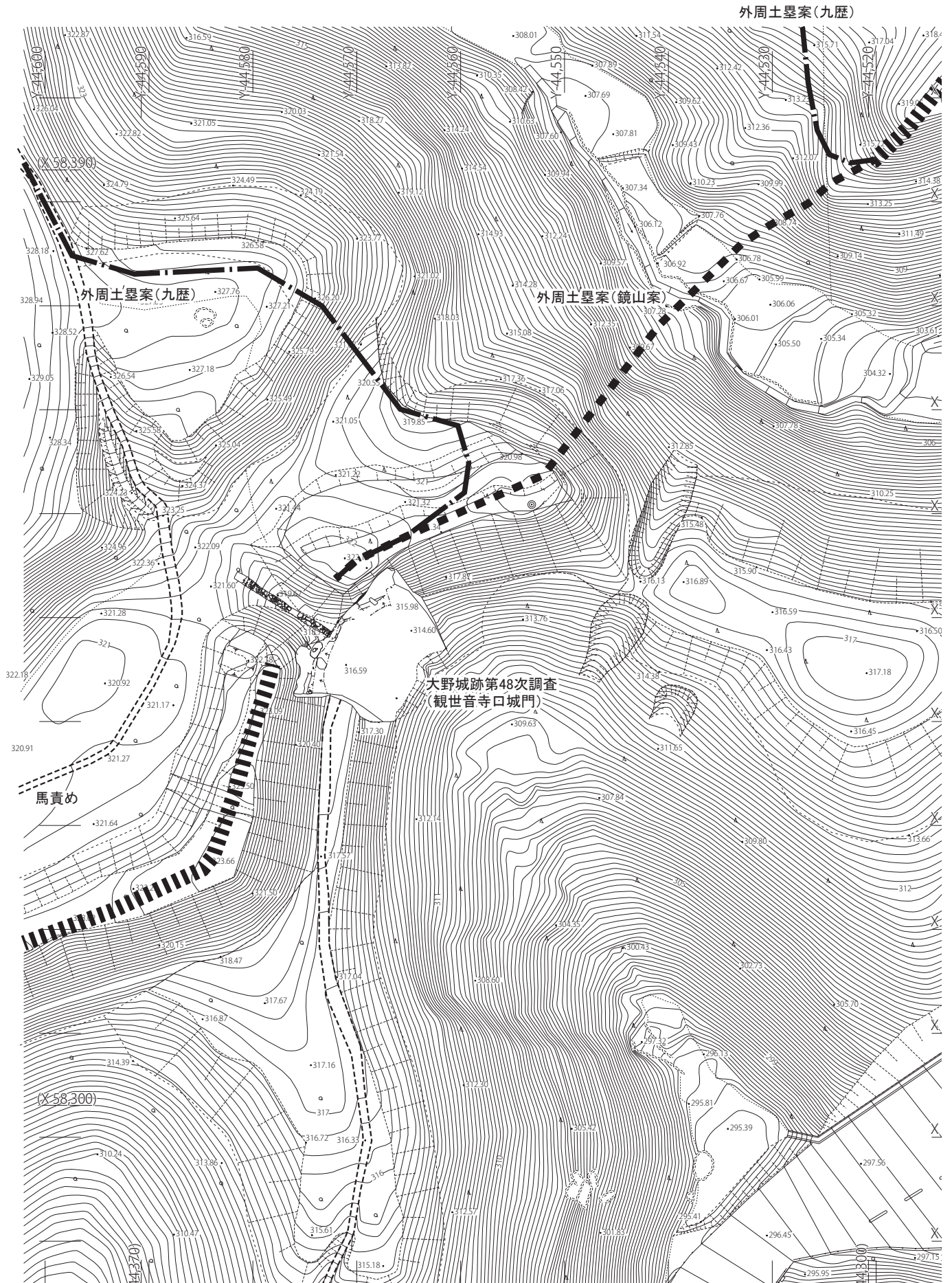


fig48-1 大野城跡第 48 次調査 周辺図 (1/500、() 内の座標は世界測地系)

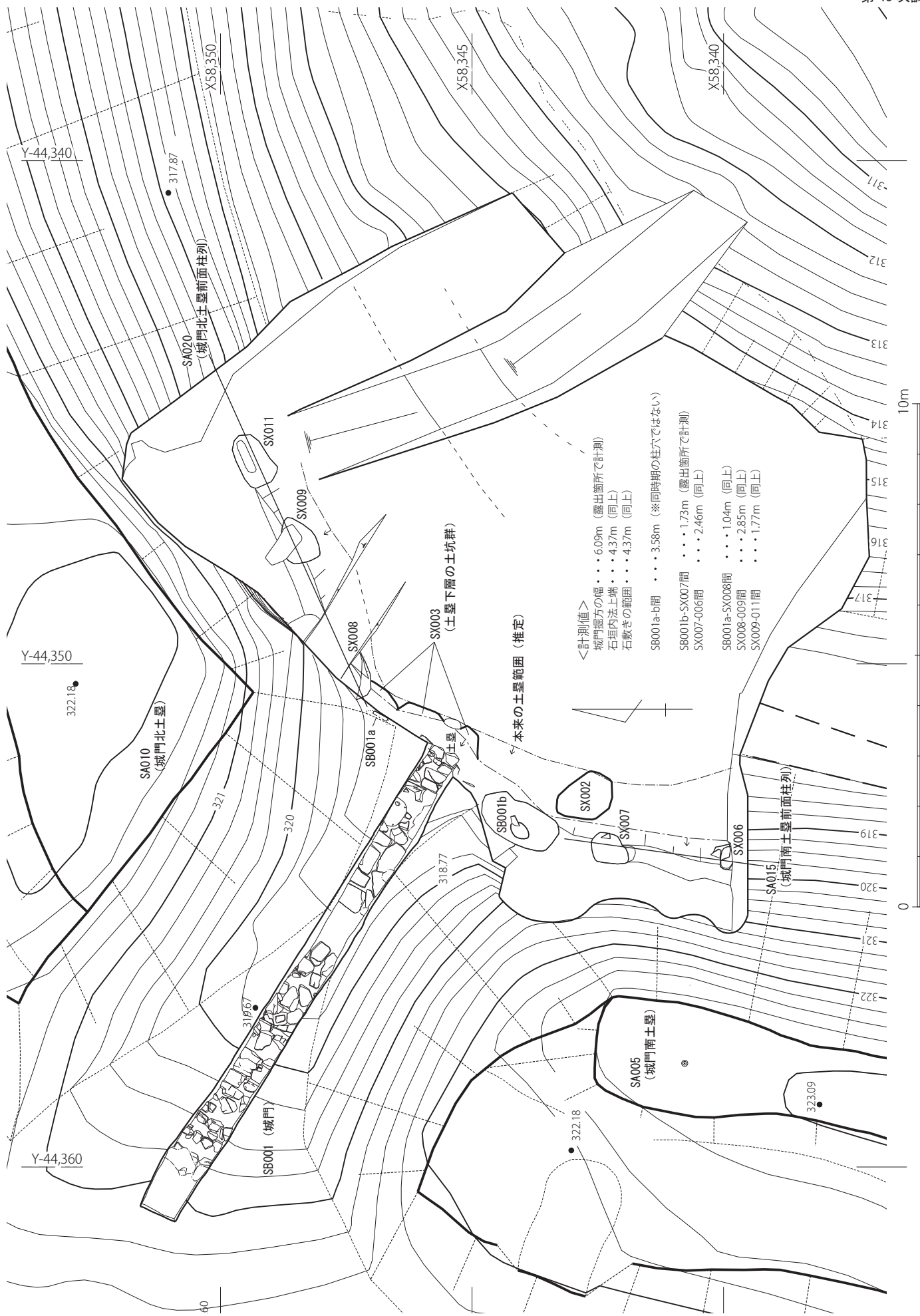


fig48-2 大野城跡第48次調査 全体遺構図 (1/100)

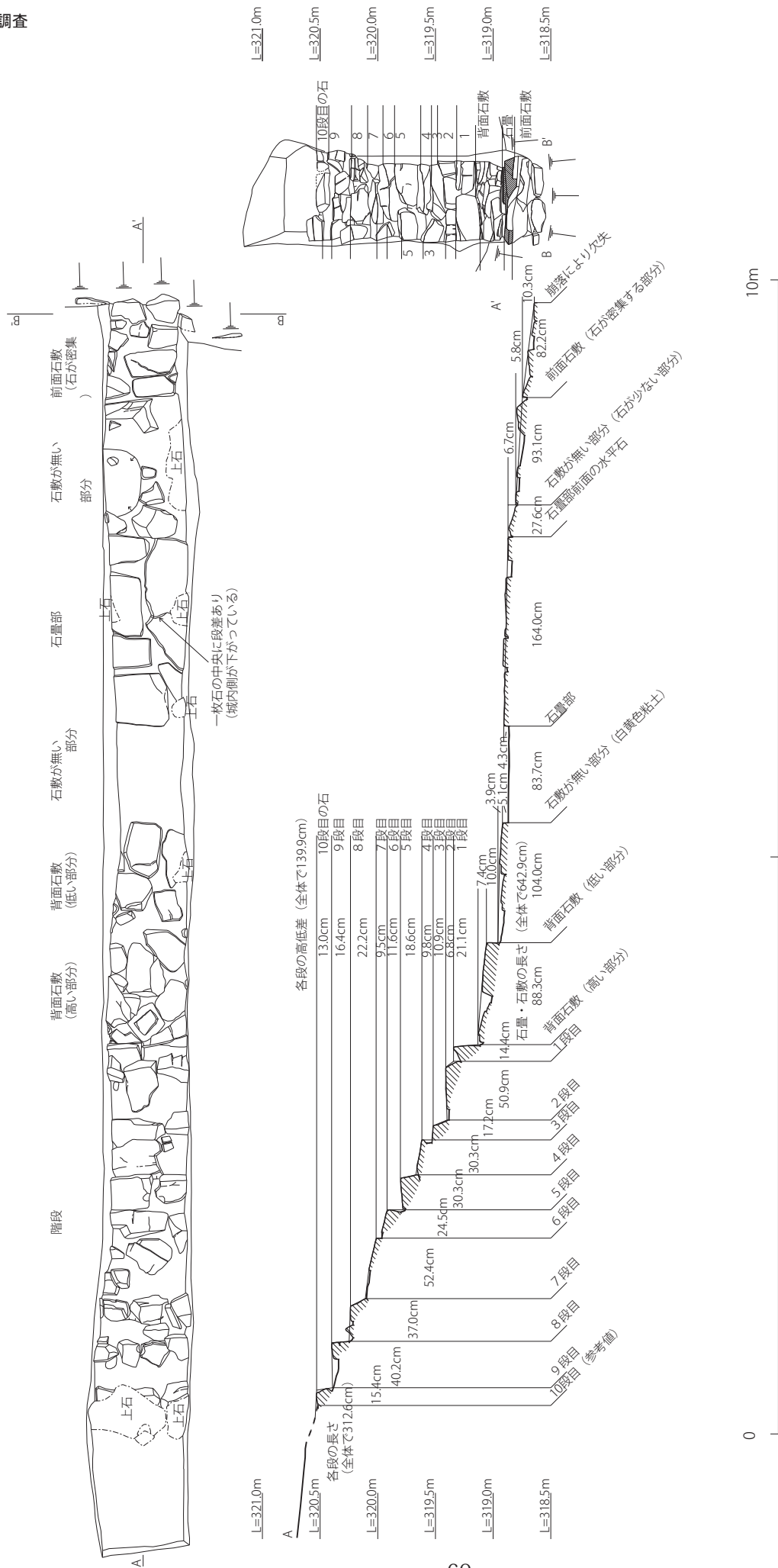
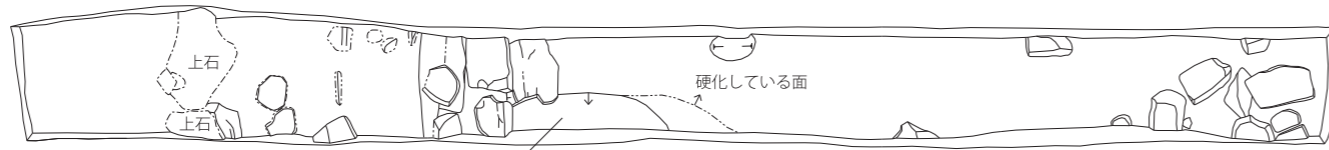


fig48-3 城 48SB001 城門石敷実測図 (1/50)

植物根除去時

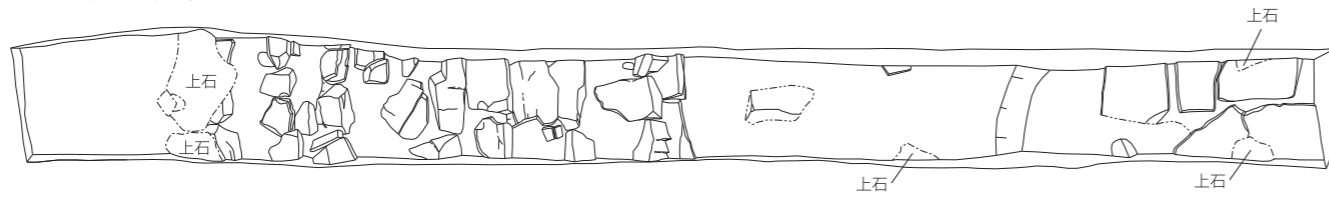


硬化面（通行痕跡）検出時



攪乱を受けている箇所 (SX012 (土層6))

淡白黄色粘土検出時



石敷・石畳検出時

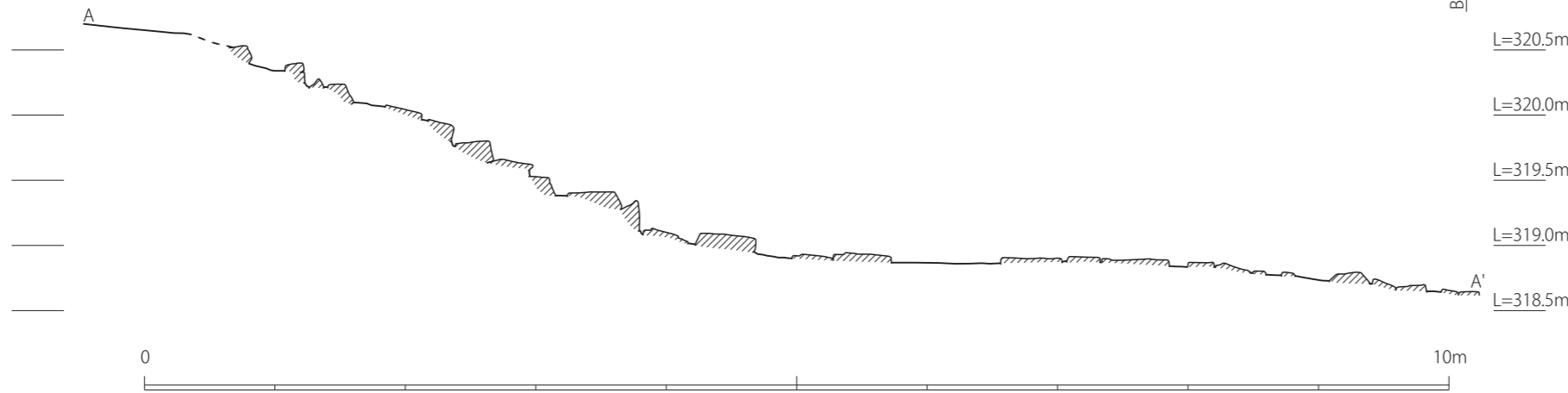
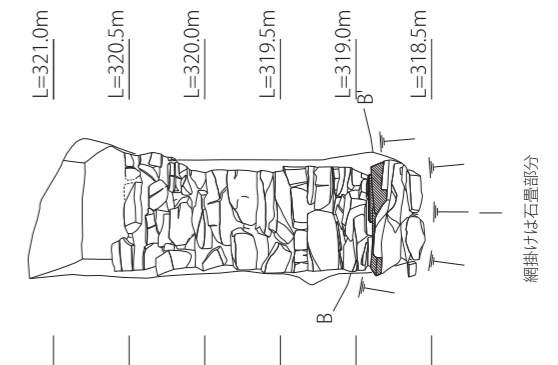
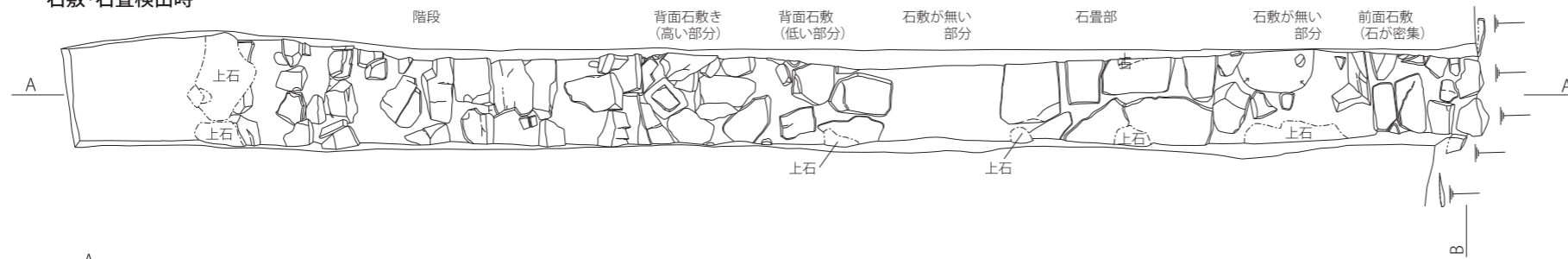
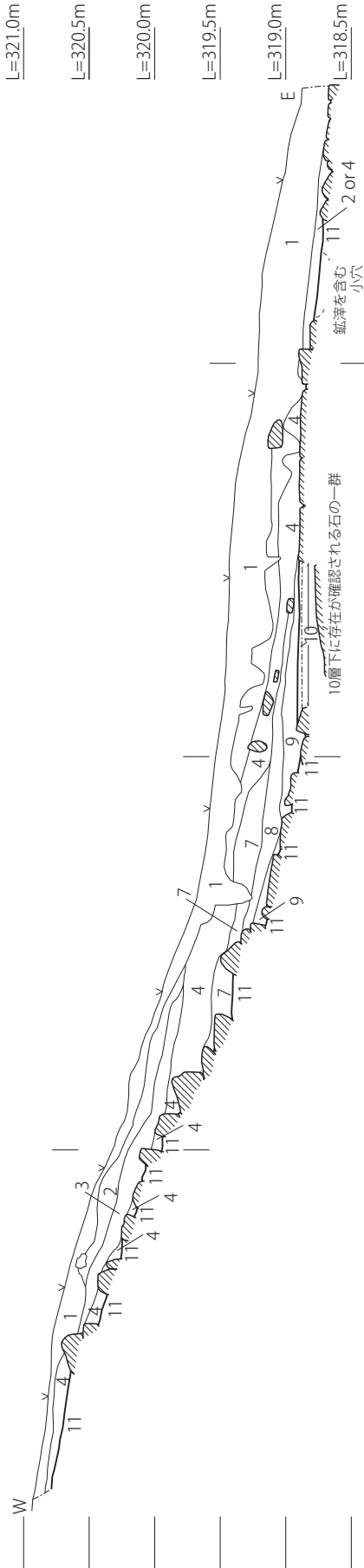
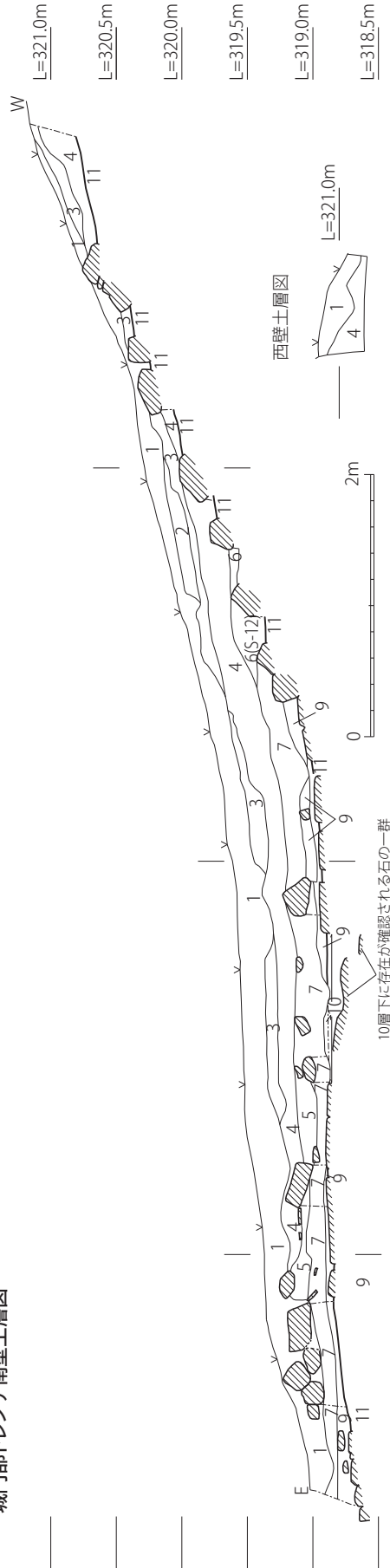


fig48-4 城48SB001城門部調査実測図 (1/50)

城門部トレンチ北壁土層図



城門部トレンチ南壁土層図



土層名 ※<>内は遺物取り上げ土層名

- 1.表土 (植物・樹木根の層)
- 2.赤土 (暗茶灰褐色土、軟らかい)
- 3.暗灰褐色土 (旧表土)
- 4.淡灰黄色土 (比較的しつかりとして安定した層。版築のようなごく薄い層がやや東側に傾斜しつつもほぼ水平に堆積している) ... 〈淡灰黄色土層〉
- 5.やや暗い淡白茶色土 (瓦片が少し含まれる)
- 6.暗茶褐色土 (階段下から3・4段目の南側で検出。3段目の階段の石が動いた様子がみられ、4段目は無くなっていて、階段を補修した際の掘り方とみられるが、その部分が弱いので、ズレてしまい、そのまま埋没したのだろう)
- 7.淡白茶色土 (比較的しつかりとして安定した層。トレンチ内北側の本層上面は硬化している。通行によるものだろう。) ... 〈淡白茶色土層〉
- 8.暗灰褐色土 (6層と基本的に同層とみられるが、瓦片が多く含まれているようだ。西側(山側)からの流入が)
- 9.淡白黄色粘質土 (石敷き直上を覆う層。地山土を定の裏につけたまま石敷き直上を穿いたため、石敷き直上に土が堆積した、というような雰囲気である。) ... 〈淡白黄色粘土層〉
- 10.白黄色粘土 (石敷き直上の西側(山側)の敷石がみられない部分にみられる基盤層は11層に比べて白黄色の粘土層が強い印象を受ける。この部分に石敷きみられない理由として、西から流入する雨水を受け止める排水溝(南北に向く)の存在・城門屋根からの雨落ち溝等も検討されることとあり、この埋土のわずかな違いを記録として留めることとした)
- 11.淡黄白色土 (石敷き・階段を据えつけた基盤層。崩落部調査区東壁土層8あるいは11層) ... 〈淡黄白色土層〉

fig48-5 城 48SB001 城門部トレンチ土層図 (1/50)

みると、床面中央付近にて、上面をほぼ水平に揃えた石畳が門道方向に直行して幅約 1.88 m に亘り敷かれていた。他より大きな石を使用していること、上面をほぼ水平に保ちしかも平滑に仕上げていること、ここが南北に迫る土塁の最頂部ラインともほぼ一致していること等をみると、ここが城門中心部であり、門扉がここにあったことが推測される。なお、石畳幅 1.88 m の 1/2 の 0.94 m を一単位とみた場合と、城門に関わる石敷きがこの単位を基に規格性を有して配置されていることも窺える。(fig48-11 参照) こうした状況を踏まえ、崩落部で検出した門柱跡 (SB001b) および石畳や石敷きにみる方向を基準として、城門平面プランもある程度予想可能とみられる。

古時期 (I 期) の城門 (SB001 古) は、城門設置の土塁掘り込みを崩落部のり面で土層確認したほか、II 期城門の床面石敷きに塞がれている柱穴 (SB001a) を確認している。SB001a は掘り方約 1 m 程度、柱痕 (または抜き取り) 部分は径 50cm 程度である。掘り方埋土は土塁版築層と極めて近似しており、II 期城門関連遺構にみられる黄色土系埋土とは異なっている。

土塁 (fig48-1・6)

48SA005 および 48SA010

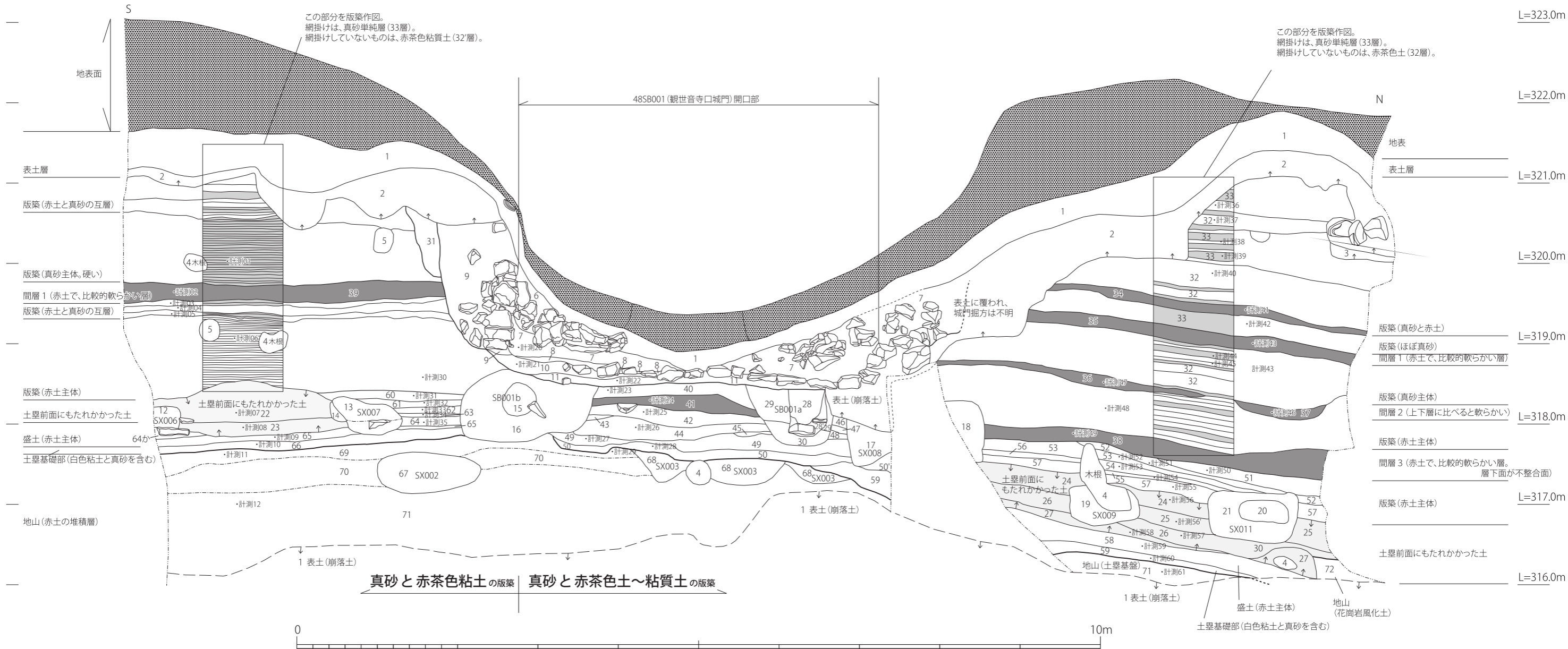
城門を境に、南側土塁を SA005、北側土塁を SA010 とした。土塁の基盤層はいわゆる赤土の谷堆積層で、これを概ね水平に均した後、白色粘土・真砂などをブロック状に投入した様子が窺える層が検出範囲全体で確認された (fig48-6 の 50・59・66 層)。粘土の周囲は酸化し錆びて赤茶色に変色していることから、粘土を土嚢等に詰めていた可能性も考えられる。その上には、層厚約 20cm の赤土が 1 m 弱ほど積まれ、炭等を含む軟らかい層 (間層) を挟んで、赤土主体の版築 (層厚は約 3cm) を 1～1.5 m 程度の厚さで行っている。この上に再び軟らかい赤土からなる層 (間層) を入れて、上に真砂 (花崗岩バイラン土) 主体の版築 (層厚は約 3cm) を約 1 m 程度の厚さで行っている。さらにその上はやや厚めに真砂と赤土を交互に入れて版築している。土塁版築の途中には、ここで「間層」と呼ぶ、周囲と比べて土壌硬度が低い (軟らかい) 層が入る。この間層を境に、上下の層が不整合となったり、版築土の種類が若干異なるなど、変化が観察される。この層の成因についてははっきりしないが、表土層のような様子が窺えるものもあり、土塁構造上の軟弱層の設置、作業過程によるもの、あるいは構築時期の差、など想定される。

土塁版築に使用した赤土は城門南西付近を境に北と南で違いがみられる。南側土塁には粘土というべき強い粘質のものを使用しているが、城門下位～北側土塁については粘土を使用せず、粘質土・土が使われている。その理由については調査では判らなかった。門や土塁復元との関係もあり、今後の課題としたい。

なお fig48-1 に示すように北側土塁 SA010 やその外面裾部をみると鏡山猛案に沿って土塁が延びている。かえって九歴案を満たす所見は現地観察・測量では得られていない。ここでは鏡山案を支持したい。

土塁基底部 (fig48-2・6)

土塁前面基底部では、基盤層 (地山の谷堆積) に切り込んで構築された小穴列を確認した (SX003 ほか)。土塁下に小穴列が存在することは、大野城跡原地区 (第 40 次調査) をはじめ大野城土塁ではよく知られており、これらも土塁構築と密接に関わることが窺える。これが確認されたことで、基盤層と土塁構築土との境を遺構から追認でき、また小穴の存在範囲から土塁築造当初の構築範囲を推定することができる。

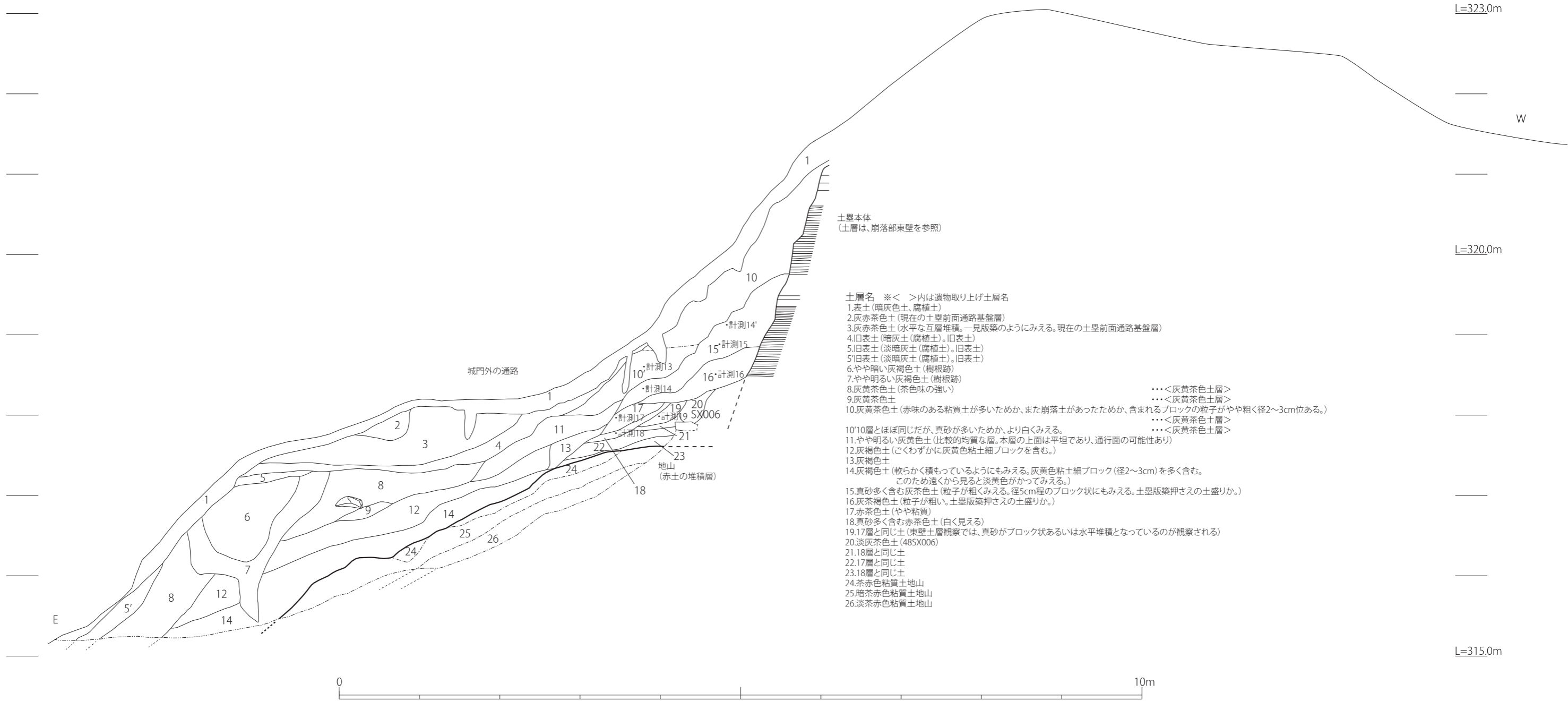
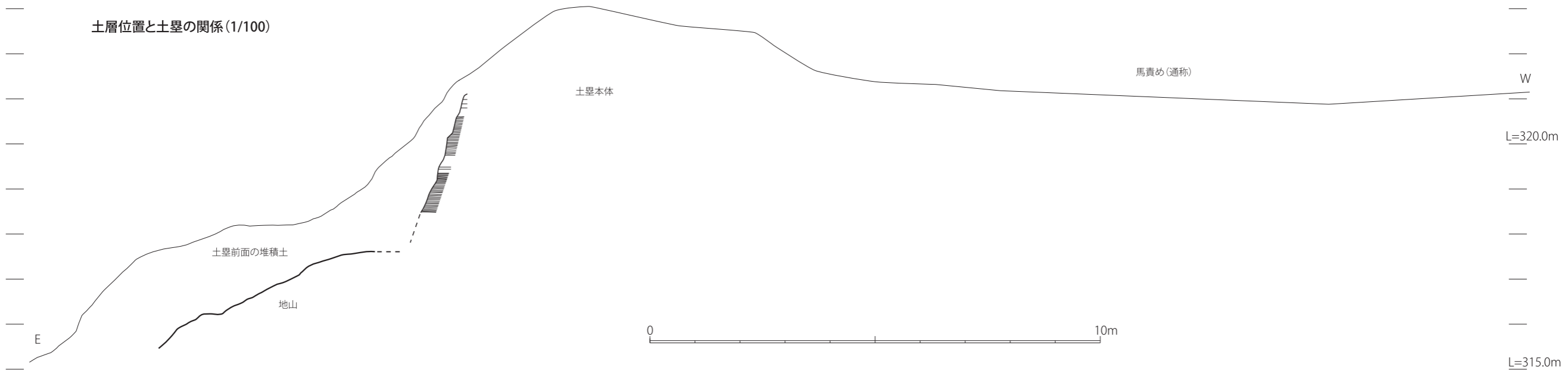


- 土層名**
- 1.表土
 - 2.灰茶黄色土 (=崩落部南壁10層)
 - 3.赤茶土(崩落土。軟らかい。=崩落部南壁10層)
 - 4.木の根による攪乱
 - 5.暗い暗赤茶色粘土
 - 6.淡灰黒茶色土
 - 7.淡灰茶色土(軟らかい。=城門部淡灰黄色土層)
 - 8.赤茶色粘土と淡灰茶粘質土の混層(城門石敷の隙間を埋める層)
 - 9.淡灰茶色粘質土(砂を多く含む。軟らかい印象。城門南石垣の裏込土)
 - 10.真砂(淡茶色土含む。硬い。城門石敷の裏込土)
 - 11.真砂+淡茶色土(城門石敷の裏込土)
 - 12.淡灰茶色土(48SX006埋土)
 - 13.淡灰茶色土(48SX007埋土)
 - 14.淡灰茶色土(13層とは異なる)
 - 15.やや暗い淡灰茶色土(48SB001b柱痕)
 - 16.淡灰茶色土(48SB001b掘方)
 - 17.淡灰茶色土(48SX008)
 - 18.暗灰茶色土~淡灰茶色土(攪乱か遺構か不明)
 - 19.淡灰茶色土(やや軟らかい。SX009埋土)
 - 20.淡赤灰茶色土(48SX011の柱抜き取り跡か?)
 - 21.淡灰茶色土(軟らかい。48SX011埋土)
 - 22.真砂を含む赤茶色土(やや粘質。版築本体の前面にもたれかかる層。南壁19層)
 - 23.真砂含む赤茶色土。上層ほど粘質ではない(版築本体の前面にもたれかかる層。南壁21層)
 - 24.赤茶色粘質土(軟らかい)
 - 25.赤茶色粘質土(砂が多いためか、24層より白っぽい)
 - 26.赤茶色土(淡灰茶色粘質土(周囲は酸化)がブロック状に混入)
 - 27.真砂+赤茶色土
 - 28.暗灰褐色土(大変軟らかい。48SB001a柱痕)
 - 28'.暗灰褐色土(28層より硬い。石を含む。48SB001a柱痕)
 - 29.やや暗い赤茶色土(左側の土層層に良く似ており硬い。48SB001a掘方)
 - 30.真砂+やや暗い赤茶色土(48SB001a掘方)
 - 31.真砂を多く含む明灰茶色土~淡茶色土(48SB001aに伴う城門掘方か)
 - 32~33層は、土壘の上部~中位の版築を構成する層
 - 32.赤茶色土(北側土壘の版築で、粘性土として使用)
 - 32'.赤茶粘質土(南側土壘の版築で、粘姓土として使用)
 - 33.真砂(土壘版築で、砂として使用。花崗岩風化土を使用したもの)
 - 34~39および41層は、土壘版築中で比較的軟らかく、炭粒を含むなど、包含層の様相を呈す土層
 - 34.やや暗い赤茶色粘質土(暗灰褐色土等の混入がみられ、土壘下位(50層以下)の赤茶色粘質土より軟らかい)
 - 35.淡赤茶色粘質土(比較的軟らかい)
 - 36.淡赤茶色粘質土(比較的軟らかいが、34・35・38層より硬いか)
 - 37.赤茶色粘質土(比較的軟らかいが、34・35・38層より硬いか)
 - 38.赤茶色粘質土(比較的軟らかい)
 - 39.やや暗い赤茶色粘土(暗灰褐色土等の混入がみられ、土壘下位(59層以下)の赤茶色粘土より軟らかい。)
 - 40.真砂+暗赤茶色粘質土
 - 41.暗赤茶色粘質土(比較的軟らかく包含層の印象。やや粘質強い。炭粒含む)
 - 42~50層は城門下位の土壘版築層
 - 42.暗灰赤茶色土
 - 43.暗赤茶色粘質土(41層に近い印象)
 - 44.真砂主体の層(赤茶色粘質土もわずかに混じる)
 - 45.真砂
 - 46.赤茶色土
 - 47.真砂+赤茶色土
 - 48.赤茶色土
 - 49.赤茶色粘質土(真砂多く含む)
 - 50.赤茶色粘質土と淡灰茶色粘土ブロックの混層。粘土ブロックの表面は酸化。(59層および66層(南壁23層)と対応)
 - 50'.灰黄色粘質土
 - 51~59層は北側土壘下位の版築層
 - 51.明赤茶色粘質土(やや硬い)
 - 52.明赤茶色粘質土(硬い)
 - 53.赤茶色土(硬い)
 - 54.暗赤茶色土(硬い)
 - 55.淡赤茶色土(やや軟らかい)
 - 56.淡茶色灰砂(やや軟らかい)
 - 57.赤茶色土(やや硬い)
 - 58.灰黄色粘質土
 - 59.淡灰茶色粘土がブロック状に混じる層。粘土ブロックの表面は酸化。(50層および66層(南壁23層)と対応)
 - 60~66層は南側土壘下位の版築
 - 60.赤茶色粘質土(粘質強い)
 - 61.赤茶色粘質土(粘質弱く、比較的軟らかい)
 - 62.赤茶色粘質土(粘質強い)
 - 63.赤茶色粘質土(粘質弱く、比較的軟らかい)
 - 64.赤茶色土(白い真砂をブロック状に含む)
 - 65.赤茶色土(南壁22層)
 - 66.真砂含む赤茶色土(50層および59層(南壁23層)と対応)
 - 67~68は土壘下層の柱穴群
 - 67.赤みの強い淡灰黄褐色土(48SX002)
 - 68.淡黄灰色粘質土(48SX003)
 - 69~72は地山
 - 69.茶赤色粘質土地山(南壁24層)
 - 70.暗茶赤色粘質土地山(南壁25層)
 - 71.淡茶赤色粘質土地山(南壁26層)
 - 72.花崗岩風化土地山

fig48-6 大野城跡第48次調査 崩落部東壁土層図 (1/50)

※「計測○」は、土壌硬度計で計測した箇所(tab48-3参照)

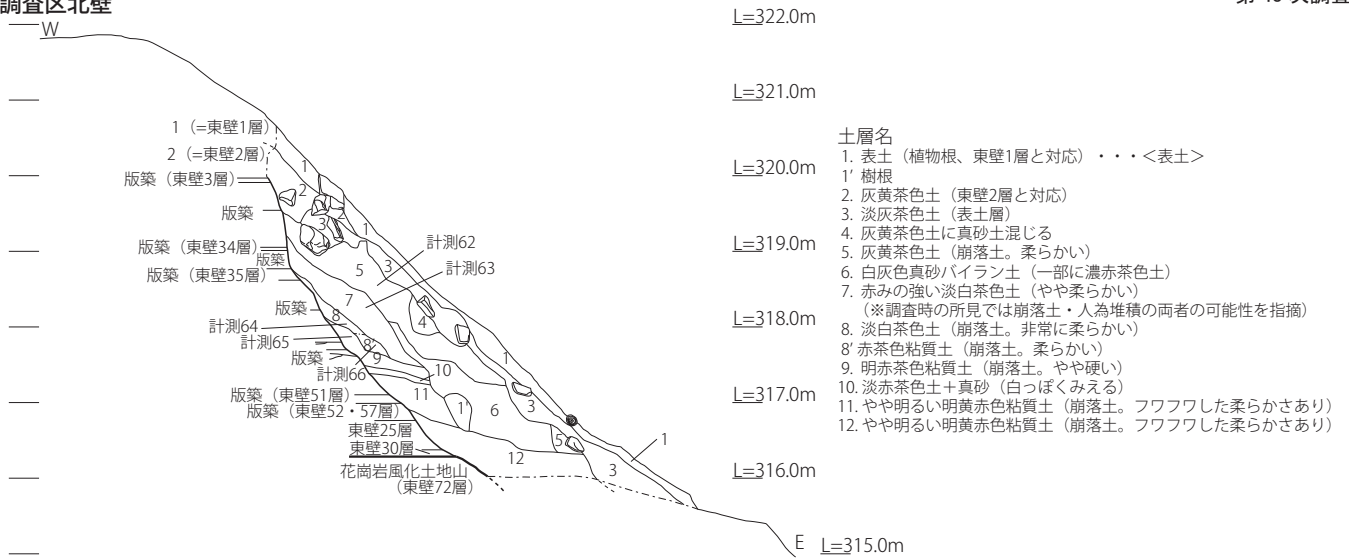
土層位置と土塁の関係(1/100)



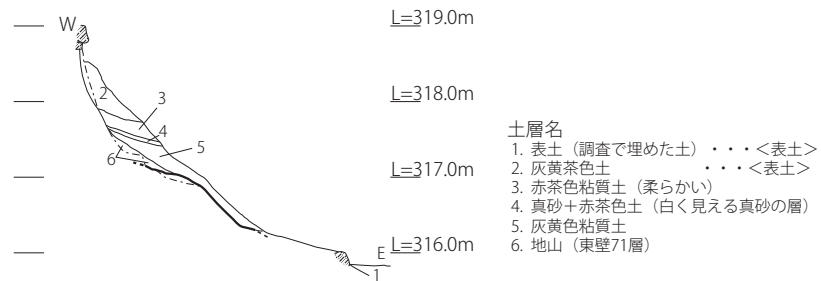
- 土層名 ※< >内は遺物取り上げ土層名
- 1.表土(暗灰色土、腐植土)
 - 2.灰赤茶色土(現在の土塁前面通路基盤層)
 - 3.灰赤茶色土(水平な互層堆積。一見版築のように見える。現在の土塁前面通路基盤層)
 - 4.旧表土(暗灰色土(腐植土)。旧表土)
 - 5.旧表土(淡暗灰色土(腐植土)。旧表土)
 - 5'旧表土(淡暗灰色土(腐植土)。旧表土)
 - 6.やや暗い灰褐色土(樹根跡)
 - 7.やや明るい灰褐色土(樹根跡)
 - 8.灰黄茶色土(茶色の強い)
 - 9.灰黄茶色土
 - 10.灰黄茶色土(赤味のある粘質土が多いためか、また崩落土があったためか、含まれるブロックの粒子がやや粗く径2~3cm位ある。)
 - 10'10層とほぼ同じだが、真砂が多いためか、より白くみえる。
 - 11.やや明るい灰黄色土(比較的均質な層。本層の上面は平坦であり、通行面の可能性あり)
 - 12.灰褐色土(ごくわずかに灰黄色粘土細ブロックを含む。)
 - 13.灰褐色土
 - 14.灰褐色土(軟らかく積もっているようにもみえる。灰黄色粘土細ブロック(径2~3cm)を多く含む。このため遠くから見ると淡黄色がかって見える。)
 - 15.真砂多く含む灰茶色土(粒子が粗くみえる。径5cm程のブロック状にもみえる。土塁版築押さえの土盛りか。)
 - 16.灰茶褐色土(粒子が粗い。土塁版築押さえの土盛りか。)
 - 17.赤茶色土(やや粘質)
 - 18.真砂多く含む赤茶色土(白く見える)
 - 19.17層と同じ土(東壁土層観察では、真砂がブロック状あるいは水平堆積となっているのが観察される)
 - 20.淡灰茶色土(48SX006)
 - 21.18層と同じ土
 - 22.17層と同じ土
 - 23.18層と同じ土
 - 24.茶赤色粘質土地山
 - 25.暗茶赤色粘質土地山
 - 26.淡茶赤色粘質土地山

fig48-7 大野城跡第48次調査 崩落部南壁土層図 (1/50) ※「計測○」は、土壤硬度計で計測した箇所(tab48-3参照)

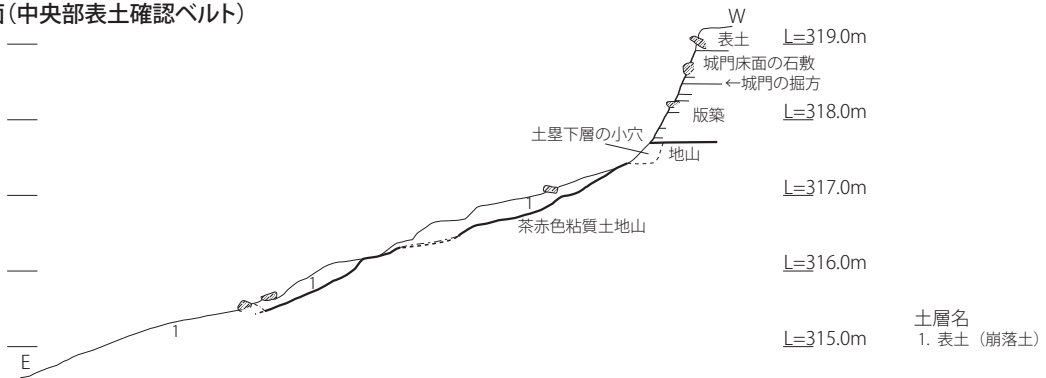
調査区北壁



城門前面 (48SB001a東脇ベルト)



城門前面 (中央部表土確認ベルト)



Bトレンチ南壁 (表土確認ベルト)

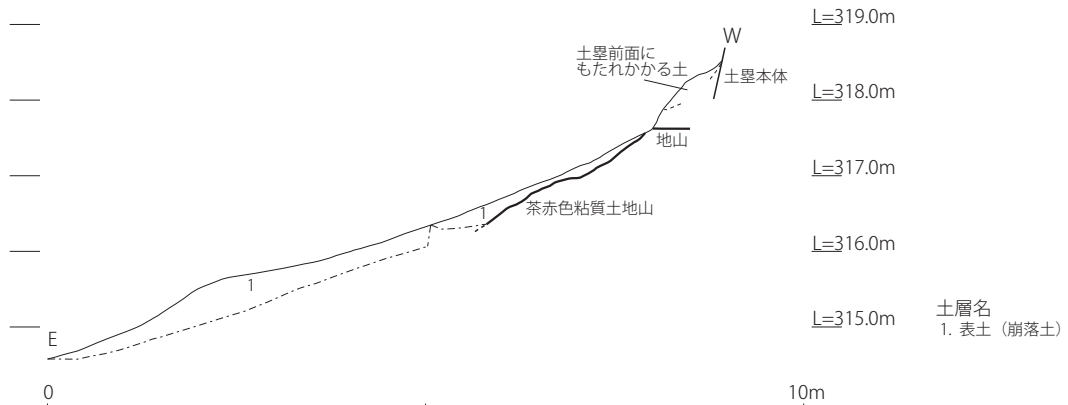


fig48-8 大野城跡第48次調査 調査区北壁および崩落部内土層観察 (1/100)

なお本調査区の崩落部南側では、SX002 など小穴が現土塁より前面に露出している。今回のものでない堆積土がこれらを覆っており、この場所は以前から崩落あるいは削平等が起こっていたことを窺うものである。

土塁のり面中位にみられる小穴列 (fig48-2・6)

前述のように、土塁のり面の前面中位でも小穴列を確認した (48SA015 および 48SA020)。これらは城門両側から土塁に沿って伸びており、黄色味を帯びた埋土であることから、Ⅱ期城門 (SB001 新) と関連があると観察される。特に南側に延びる小穴列は、SB001 新の門柱 (SB001b) とほぼ同じ高さに設けられ、かつ同一線上にある。これら小穴列は、土塁前面にもたれかかるように撒かれた (あるいは置かれた) 黄色味を帯びた埋土の上を切り込んでいることが確認されている。前述のように崩落部南端は早い時期に土塁崩落が起こっていることが確認できるが、ここは旧状に戻すことはなされず、同時あるいは後に土塁前面に土が撒かれ (置かれ)、この上から小穴列が掘り込まれたのであろう。

前述のように、土塁前面は過去に崩落あるいは削平されたことが窺えるため、土塁前面にもたれかかった土が土塁保護の用をなした可能性や、土塁の押さえ盛土が施された可能性が考えられるが、小穴列もそうした用のため設けられたことは十分考えられる。今回は明確な回答を得られなかったが、類例の追加をまちたい。

小穴列

48SA015

城門南側の土塁前面の小穴列で、SX006・007 が対応する。土塁前面にもたれかかる土が確認されたが、いずれもその土に切り込んで構築されている。土塁に平行しており、SB001b と軸をそろえる。いずれも黄色土系の柔らかい印象をもつ埋土であり、Ⅱ期城門 (SB001 新) との関連が窺える。

48SA020

城門北側土塁前面の小穴列で、SX008・009・011 が対応する。これも土塁に平行し、土塁前面にもたれかかる土に切り込む。SA015 と同様の性格が考えられる。

4. 遺物

遺構出土遺物

観世音寺口城門出土遺物

48SB001b 柱痕出土遺物

土師器

煮炊具 (P1a36 参照) 外面にハケ目とみられる調整が観察される。内面は平滑で炭とみられる黒色付着物がある。胎土は 0.5mm 以下の砂粒および角閃石を含む。焼成はややあまく、淡茶褐色を呈す。甕 a か。

48SB001 石敷下出土遺物

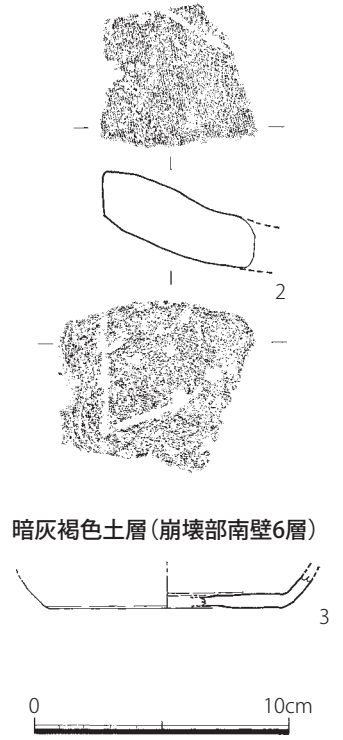
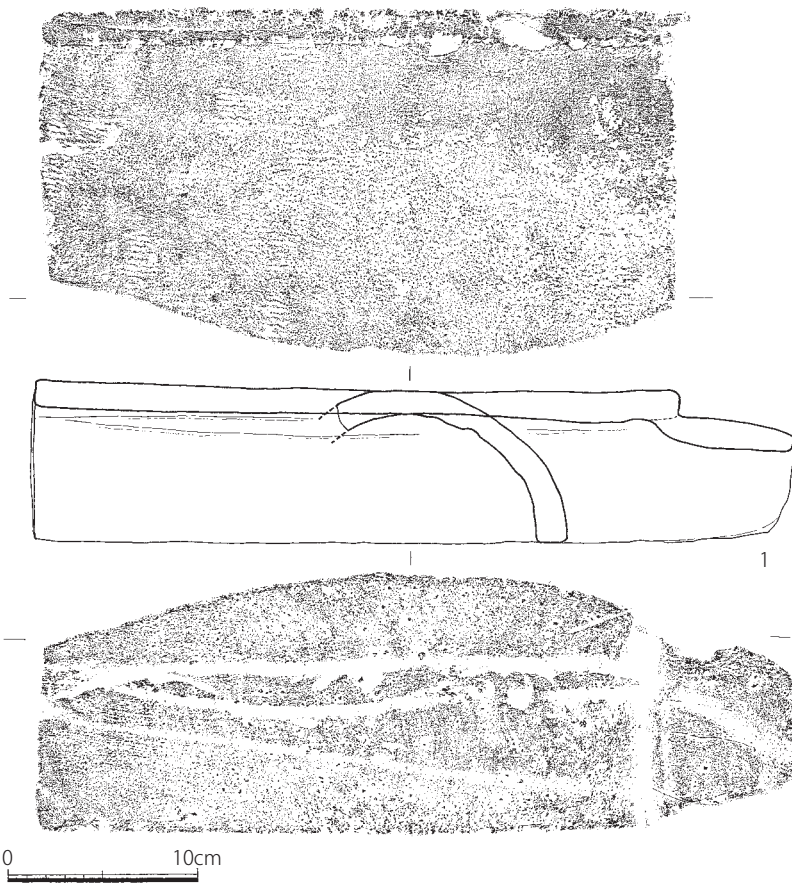
土師器

破片 (P1a36 参照) 外面のみ残存する。外面には条痕がみられ、ハケ目の可能性がある。胎土は 1mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、淡橙色を呈す。これも甕 a などの煮炊具の可能性が高い。

48SB001 石垣上層表土出土遺物 (fig48-9)

瓦類

丸瓦 (1) 玉縁を有する丸瓦で、長軸が完存する。全長 40.4cm。玉縁部の長さは 6.0cm。全体的に風化が進んでいるが、凸面は縄目叩き、凹面は布目痕がみられる。端部調整は小口はケズリ、側面は切



暗灰褐色土層(崩壊部南壁6層)

淡灰黄色土層

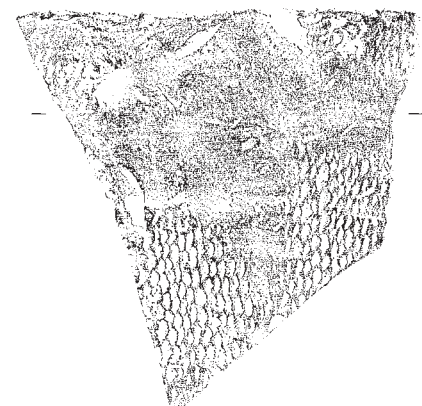
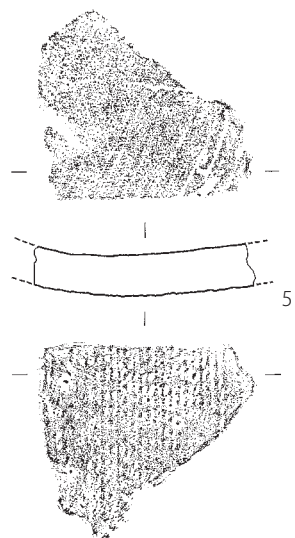
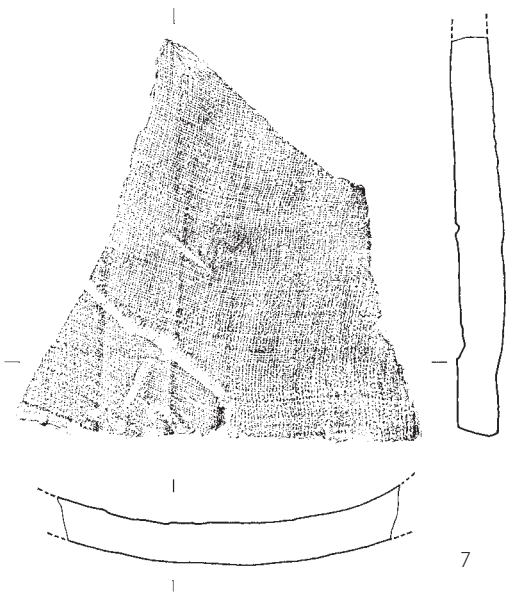
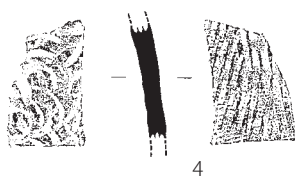
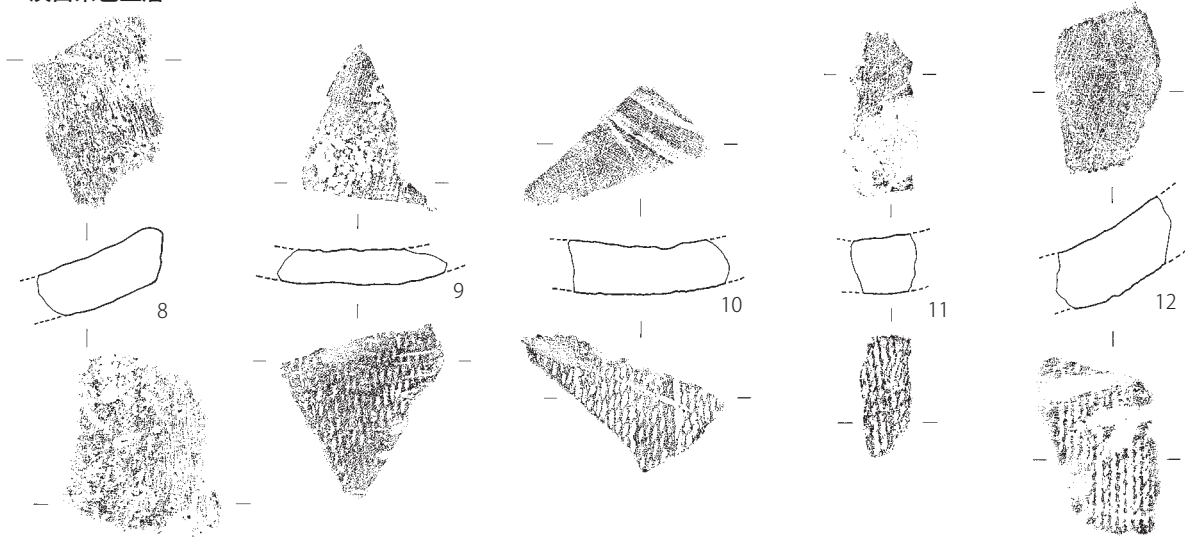


fig48-9 第 48 次調査 出土遺物実測図その 1 (1 は 1/4、その他は 1/3)

淡白茶色土層



淡白黄色粘土層

表土



fig48-10 第48次調査 出土遺物実測図その2 (1/3)

り割りに可能性があるが、風化が進んでいるためはっきりしない。胎土は 5mm 以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がる。にぶい黄褐色～灰色～暗灰色を呈す。

48SX012 出土遺物 (fig48-9)

平瓦 (2) 残存長 7.1cm。凸面は縄目叩きとみられるが、風化により明瞭ではない。凹面は布目痕がみられる。端部処理はケズリを 2ヶ所に施す。胎土は、1.5mm 以下の砂粒を含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、淡黄灰色～灰色を呈す。端部処理から一枚作りとみられる。

各層出土遺物

暗灰褐色土層 (崩落部南壁 6 層) 出土遺物 (fig48-9)

土師器

坏 a (3) 底部の破片である。残存高 1.3cm、復元底径 9.7cm。底部切り離しはヘラ切りとみられ、板状圧痕がある。胎土は 0.5mm 未満の微細な砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、淡灰黄色を呈す。平安期の遺物とみられる。

淡灰黄色土層出土遺物 (fig48-9)

須恵器

甕 (4) 胴部の破片である。外面は細かな格子目叩きで、内面は同心円文叩きを施す。胎土は 0.5～1mm の砂粒をわずかに含む。焼成還元ともに良好で、内外面は暗青灰色、断面は淡茶灰色を呈す。城内部西側出土。

瓦類

平瓦 (5～7) 5 は残存長 7.9cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕および糸切り痕跡がみられる。胎土は 1.5～2mm の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、暗灰褐色を呈す。城内部東側出土。

6 は残存長 15.6cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕および糸切り痕がみられる。胎土は 0.5～2mm の砂粒を含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、淡褐灰白色～暗灰褐色を呈す。城内部東側出土。

7 は残存長 16.2cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。胎土は 0.5～1mm の砂粒を少し含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、暗褐色～暗灰褐色を呈す。城内部東側出土。

淡白茶色土層出土遺物 (fig48-10)

瓦類

平瓦 (8～12) 8 は端部が残る破片である。残存長 7.8cm。全体的に風化が著しく、凸面は縄目叩きとみられるが、凹面は調整不明。端部調整も不明。胎土は 0.5～3mm の砂粒を多く含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、やや黄色味を帯びた淡灰色～暗灰色を呈す。

9 は残存長 7.0 cm。風化がやや進んでいるようだが、凸面は縄目叩き、凹面は布目痕が観察される。胎土は、0.5～1mm の砂粒を少量含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、やや黄色味を帯びた淡灰色～暗灰色を呈す。

10 は残存長 4.0cm。凸面は縄目叩き、凹面は布目痕が観察される。胎土は、2～3mm の砂粒をごく少量含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、やや黄色味を帯びた淡灰色～暗灰色を呈す。

11 は残存長 7.4cm。凸面は縄目叩き、凹面は布目痕およびナゲまたは糸切りが観察される。胎土は、0.5～3mm の砂粒を少量含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、やや黄色味を帯びた淡灰色～暗灰色を呈す。

12 は残存長 7.8cm。凸面は縄目叩きで、凹面は風化が進むが糸切りが観察される。胎土は 0.5～

3mmの砂粒をごく少量含む。焼成はあまく、瓦質～土師質に仕上がりに、やや黄色味を帯びた淡灰色～暗灰色を呈す。

淡白黄色粘土層出土遺物 (fig48-10)

種別不明製品

破片(13) 瓦質～土師質の製品で、風化により調整不明。瓦の可能性が高いが、厚みが1.2cmと他になく薄い。弥生土器等の壺底部のようにも見える。このほか、同様の不明破片が出土している。

瓦類

平瓦(14) 四隅の一角の破片である。残存長7.4cm。全体的に風化が進んでいるが、凸面は縄目叩きでナデ消しを行った可能性もある。凹面は布目痕および模骨痕が観察される。端部調整は凹面に切り込みを入れて割り放している。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成はあまく、瓦質に仕上がりに、灰色～灰黒色を呈す。端部調整および模骨痕から桶巻き作りとみられる。

表土出土遺物 (fig48-10)

須恵器

甕(15) 胴部の破片である。外面は細かな格子目叩き、内面は同心円文叩きを施す。胎土は密で、焼成・還元ともに良好で硬質に仕上がる。内外面とも黒灰～黒褐色。断面は暗赤褐色を呈す。城門部表土出土。

土製品

ふいご羽口(16) 残存高3.6cm。内外面とも指押さえで整形する。胎土は0.5mm前後の砂粒を少量含む。焼成は良好で、外面は灰褐色に変色し、内面は橙色を呈す。崩落部中央Aトレンチ表土出土。

瓦類

平瓦(17～22) 17は残存長9.2cm。凸面は縄目叩きで、凹面はわずかに布目痕がみられる。胎土は0.5mm以下の砂粒をごく少量含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、淡灰白色～黒灰色を呈す。端部処理の状況から一枚作りとみられる。崩落部中央Aトレンチ表土出土。

18は残存長8.2cm。凸面はナデ消しており、凹面は布目痕がみられる。端部調整は、小口ではケズリを2ヶ所に、側面はケズリを3ヶ所に施す。胎土は0.5～2mmの砂粒をごくわずかに含む。焼成は良好で瓦質に仕上がりに、淡灰色～淡黒灰色を呈す。端部処理の状況から一枚作りとみられる。崩落部中央Aトレンチ表土出土。

19は残存長5.8cm。全体的に風化が進むが、凸面は縄目叩きである。凹面は不明。端部調整は2ヶ所にケズリを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒をごく微量含む。焼成は良好で瓦質に仕上がる。淡茶褐色～淡灰黄褐色を呈す。端部処理の状況から一枚作りとみられる。城門部表土出土。

20は残存長10.2cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕がみられる。小口の端部調整はケズリを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成はややあまく、瓦質に仕上がりに、灰色～黒灰色を呈す。城門部表土出土。

21は残存長11.5cm。凸面は縄目叩きで、凹面は風化により不明。端部調整は2ヶ所に施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で瓦質に仕上がりに、淡灰黄褐色～暗灰黄褐色を呈す。端部処理の状況から一枚作りとみられる。城門部表土出土。

22は残存長7.8cm。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕および糸切り痕がみられる。端部調整は2ヶ所にケズリを施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を若干含む。焼成は良好で瓦質に仕上がりに、淡灰黄褐色～灰色～黒褐色を呈す。端部調整および糸切り痕から一枚作りとみられる。崩落部中央Aトレンチ表土出土。

5. 小結

(1) 観世音寺口城門について

平成 15 年 7 月の豪雨災害後の毀損箇所見回りの際、文化財課職員がこの場所を発見した。崩落箇所には人頭大の花崗岩が散乱しており、石は崩落面にも見られるため、発見した職員は城門の可能性を考えていたが、本調査で確かに城門と確認されたことが最大の成果といえる。

初めに取りかかった崩落部の調査で城門の存在が明らかとなり、切り通しはそのまま利用して林道を復旧することとなったが、城内側からの水がここに集中して再び崩落するという懸念があり、ここに簡易水路を設けることとなった。このため工事に際して地下遺構への影響を確認する目的で、かつ城門埋没過程や城門範囲把握を目標に、城門中央に幅 80cm のトレンチを入れた。その結果、通行によると見られる堆積・硬化面を検出し、ここが通路として使い続けられていたことを把握した。またその下から城門の石敷き・石階段等を検出するに至った。

この城門は二時期の変遷がうかがえ、石を用いた施工は新時期（Ⅱ期）の城門（SB001 新）に伴うと判断される。門の構造については、床面中央付近に、石の上面をほぼ水平に揃えた石畳が通行方向に直行して幅 1.6 m に亘って敷かれているのが注目される。他の石敷きと違って、ここを水平に保つ必要性があつて、しかも最も美しく仕上げていること、この部分が南北に迫る土塁の最頂部ラインともほぼ一致していることを考えると、ここに門扉があつたことが想定される。城内側への引き戸と考えると石畳両端前面付近に門柱と扉軸受けがあることが推測される。

古時期（Ⅰ期）の城門（SB001 古）については、前面の崩落部にて門柱の一部とみられる柱穴を確認している。これが古いとする理由は 2 つある。最大の理由は、本来柱があつた柱痕の上面を新時期城門の床面石敷きが覆っていたことである。もう一つは、掘方埋土がⅡ期柱穴と異なり、版築土塁と同じ土を使用していることである。柱痕部分は抜き取りにより空洞となっていたためか、脆く崩れやすい土が入り込んでいたこと、底に礎板として石を据えていたことから柱穴の存在はすぐにわかったが、その掘り方の埋土は土塁の土に似た真砂・赤土を使用しており、はじめはわからなかった。精査中に土塁構築土層と柱穴掘方土層とが不整合となっている砂層を発見し、ようやくそのプランを確認できた次第である。このように柱穴掘方の埋土が土塁と一体化している状況を見ると、Ⅰ期門設置と土塁構築が同時とみて良い、とみている。城門設置手順に関する事柄として後考に委ねたい。

その他、土塁前面の調査では、土塁と地山との分層や、土塁下の小穴の存在等から当初の土塁線を確認することができた。また土塁前面部の傾斜面に土を持ちかけていること、その土を掘り込んで土塁に平行する小穴列が設けられていることもわかった。南側土塁前面の小穴列は、Ⅱ期の城門柱穴に

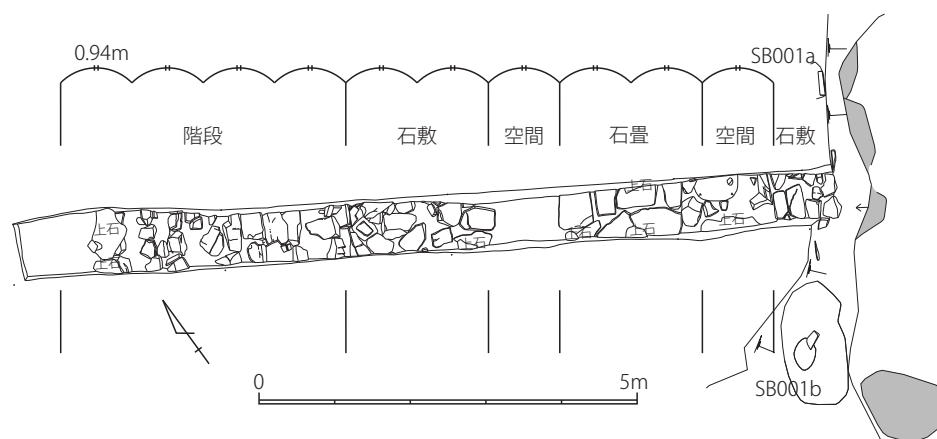


fig48-11 観世音寺口城門の規格推定 (1/100)

延びており、両者の埋土が類似していることから、これらの小穴列はⅡ期城門に関連すると想定している。

(2) 城門の名称 (図 2 参照)

城門の名称については、調査時には「増長天南城門」と仮称していたが、既存の城門が麓名を冠していることから、これに沿った形で「観世口城門」あるいは「観世音寺口城門」と名称案を太宰府市で検討した。県・九州歴史資料館・近隣市町で構成する大宰府史跡等整備検討会(平成 20 年 9 月 25 日)で協議した上で、大宰府史跡調査研究指導委員会(九州歴史資料館主催、平成 20 年 10 月 21 日)に諮り、原口城門とともに観世音寺口城門が正式名称となったのである。これによって城門の通称が確定したわけだが、歴史的には別の名があったことがうかがえる。

大野城の南辺にある門が「遠賀門」と呼ばれていたことが、延喜 5 年(905)に提出された観世音寺資財帳にみえる。

【史料 1】 『延喜五年観世音寺資財帳』

山章(中略)

御笠郡 大野城山壹処

四至 従寺以北限 大野南牖辺遠賀門下道、

東限 大野川、

南限 路、

西限 松岳并学処東小路。南限大野・・・

ここには、観世音寺北側の大野城が置かれた「大野城山」に、寺が所有する「山」があったこととともに、その四至が示されている。その北限に「遠賀門」が登場するが、諸橋轍次の大漢和辞典によれば、「牖(イウ)」は「窓、南向きの窓、みちびく」を意味する用語であり、「大野南牖辺遠賀門」は、大野城の南に設けられた城門「遠賀門」を意味している。

この「遠賀門」については、太宰府口城門とする想定もあったが(澤村仁「大宰府の防衛施設 山城と水城」『太宰府市史 建築美術工芸資料編』平成 10 年 5 月)、今回新たに見つかった観世音寺口城門は、①太宰府口城門よりさらに南に位置しており、②今も観世音寺口城門から中世山城岩屋城跡・推定金光寺跡を通して観世音寺へ下る道があることから、ここが遠賀門と呼ばれていたと想定される(井上信正「新発見城門(原口城門・観世音寺口城門)について」『大野城と四王寺』九州国立博物館 2008 年)。

太宰府側に開いた城門と麓を結ぶ山道は、いずれも基本的に尾根に沿って設けられている。太宰府口城門から尾根を下ると連歌屋・太宰府天満宮付近に、坂本口城門から下る道は坂本・大宰府政庁付近に、水城口城門から下る道は筑前国分寺付近や水城東門に至る。おそらく原口城門も同様であろう。近年基肄城でも登城路について検討されているが、(『峠山遺跡第 3 次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 107 集 筑紫野市教育委員会 2013 年)、それをみても登城路が尾根をそれ谷をまたぐようなコースを基本的に想定する必要はないとみられる。

再び観世音寺所有の「山」の四至についてみると、南限は「路」とだけあり何を指すか判然としなないが、東限は「大野川」、西限は「松岳」ならびに「学処東小道」と場所を示す地名等が記されている。この地名に関して別の史料が存在する。

【史料 2】 『観世音寺文書』長徳 2 年(996) 閏 7 月 25 日付けの大宰府牒

府牒 観世音寺

施入郭地壺町三段事
 左郭四条七坊八坊内
 四至 東限大野河 南限同河
 西限寺大門 北限大路 (後略)

【史料 3】 『平安遺文』 3-938 康平二年 (1059) 七月廿七日大宰府政所下文案

政所下 左郭司

応令任流記帳公驗理、觀世音寺領掌学校院東小路東地式段事、
 右、權中納言兼中宮權大夫都督藤原卿 (經輔) 宣、件地式段、觀世音寺與学校院
 互成相論、仍令比較兩方公驗之處、『学校院公驗』以天祿四年 (973) 四月十日立燒
 亡日記狀註載云、四至東限松埼小溝者、『觀世音寺公驗』以寛平五年 (893) 十一月
 一日付朝集使進官資財帳、為流記帳尚以置之、其狀註載四至、西限松岳并学校東小
 道者、(中略)

史料 2 は觀世音寺大門 (南大門) 前が大宰府条坊の左郭 4 条 7 坊だったことを示すもので、これと条坊遺構を照らして条坊各坪の呼称や範囲が復元されている (井上信正復元案、『大宰府条坊跡 44』太宰府市の文化財 122 集 2014 年ほか参照)。この史料から大野川が左郭 8 坊の東を南流していたことが窺え、埋蔵文化財調査でも、觀世音寺の東側は平安時代後期以前には砂堆積が広がり、以前の遺構がない結果となっている。ここに川が流れていたことは間違いないだろう。4 条以北の上流側の状況は十分明らかではないが、史料 1 の觀世音寺所有山地の東限は、左郭 8 坊付近と推定することが可能である。この北側は岩屋城址方面から延びる尾根が下ってきている (東觀世団地造成で一部消失)。この尾根は中世には東側の崇福寺との境界となっており、これが寺有山地の東限だったと考えられる。

史料 3 は学校院と觀世音寺の土地争論に関する史料である。「松埼小溝」「学校東小道」は大宰府史跡第 74・77 次調査で検出された溝や道路遺構と比定され (『大宰府史跡—昭和 56 年度発掘調査概要報告書』九州歴史資料館 昭和 57 年 3 月)、ここが左郭 5 坊・6 坊の境界 (左郭 5 坊路) となっている。「松岳」がどこに比定されるかは不明だが、境界の北延長には小字「安養寺」の東側丘陵があり、これを南端とする尾根筋は岩屋城址付近に達している。この尾根が松岳と呼ばれた寺有山地の西限と考えられる。

このように、遺構・史料・地形から觀世音寺所有山地の東西範囲を検討してみると、それは觀世音寺口城門への登城路ともよく整合している。よって觀世音寺口城門を「遠賀門」と比定することに矛盾はないと結論づけたい。

なお、「遠賀門」という門号について、古代の宮城門には門を守護した氏族の名が冠されたことが知られており、この門号には門の守護者の名が冠されていると考えられる。「遠賀」とは筑前国遠賀郡 (岡郡) に関わる名称に違いないが、市内の水城小学校から出土した「遠賀団印」(国重要文化財) によって、筑前国の軍団の一つが遠賀団だったことも知られている。大宰府前面の不丁地区出土木簡から出土した木簡の分析から、大宰府の守衛には西海道各国の軍団兵士が当たっていたことが窺われることから (松川博一「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37 2012 年)、おそらく觀世音寺口城門は遠賀団が守衛する門だったと考えられる。

延喜 5 年時点では、すでに律令軍団制は廃止され、大野城も機能していたかどうか定かでない。大野城の名も以降の史料では見られなくなる中、門号が当時も残っていたという事実は、以前は門守衛者が固定化されていたことを伝えているように思われる。

tab48-1 大野城跡第 48 次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時 期	地区番号
1	城48SB001	城門 (観世音寺口城門)	新旧2時期があることを確認。旧時期については不明。新時期については、石敷・石垣を施す。出土する瓦はこの時期に帰属すると想定できる。	城門石垣裏込土は、灰茶色土	5・10→1	古時期：不明 新時期：8c	城門部
1a	城48SB001a	柱穴	古期の城門に帰属する柱穴。新期城門石敷きに柱痕部(抜き取りの可能性高い)が塞がれている。	掘方は、土塁の土に似た、真砂・赤土。	1a→城門石敷き		崩落部
1b	城48SB001b	柱穴	新期の城門に帰属する柱穴。外側門柱	掘方は灰茶色土	1b→城門部の掘方	おそらく8c	崩落部
1石敷下	城48SB001石敷下	石敷の基礎土、もしくは旧城門の掘方	東壁11層から土師器片出土				崩落部
2	城48SX002	土塁下の小穴	土塁下の小穴列の一つ。	赤味の強い、淡灰黄褐色土			崩落部
3	城48SX003	土塁下の小穴群	土塁下の小穴列の一つ。	淡黄灰粘質土	3→土塁本体		崩落部
4	欠番						—
5	城48SX005	土塁	城門南側の土塁本体。南北に走行。版築の赤土はいわゆる粘土ではなく、粘質土。SX010とは、版築の積み方(使用土砂の順)は似ている。				
6	城48SX006	小穴	SX005前面で検出。土塁にもたれかかる土に切り込む。	淡灰茶色土			崩落部
7	城48SX007	小穴	SX005前面で検出。土塁にもたれかかる土に切り込む。	淡灰茶色土			崩落部
8	城48SX008	小穴	不明な点も多いが、S-9・11と列が揃い、埋土も似ているので、一連のものと考えている。	淡灰茶色土			崩落部
9	城48SX009	小穴	SX010前面で検出。土塁にもたれかかる土に切り込む。	淡灰茶色土			崩落部
10	城48SX010	土塁	城門北側の土塁本体。北東-南西に走行。版築の赤土はいわゆる粘土。5とは、版築の積み方(使用土砂の順)は似ている。				

tab48-1 大野城跡第 48 次調査 遺構番号台帳

11	城48SX011	小穴	SX010前面で検出。土塁にもたれかかる土に切り込む。	淡灰茶色土			崩落部
12	城48SX012	小穴×土坑	城門階段の下から3～4段目の補修痕跡			8c	城門部A2
13	城48SX013	小穴	城門石畳のすぐ前面に位置する。鈹滓が詰まっている。				城門部A0
14	欠番						—
15	城48SX015	小穴列	城門南側土塁前面で検出した小穴列。S-6・7が対応し、その位置からS-1bも含む可能性がある。	淡灰茶色土			崩落部
20	城48SB020	小穴列	城門北側土塁前面で検出した小穴列。S-6・9・11が対応。	淡灰茶色土			崩落部
暗灰褐色土 (カクラン)		木根攪乱	南壁土層6層。遺物が出土(南壁②③)				崩落部
明灰褐色土 (カクラン)		木根攪乱	南壁土層7層。遺物が出土(南壁①④)				崩落部
淡灰黄色土		城門埋没土層	旧表土直下の層。				城門部
淡白茶色土		城門埋没土層 (通行による堆積)	層の上面は硬化している。通行によるためか、しっかりしている。				城門部
淡白黄色粘土		城門石敷直上の層	石敷上面に薄くかぶる粘土。ところどころ石敷きが顔を出しており、これも通行により、足の裏についた周囲の粘土が体積したようにもみえる。				城門部
淡白黄色土		城門石敷基盤層	石敷を据えた基盤層。西壁土層の29・31・32に相当するとみられる。				城門部
表土		表土層	「表土植物根層」の下に「表土灰褐色土」				調査区全体

tab48-2 大野城跡第 48 次調査 出土遺物一覧表

※時期は、各項に含まれる最新の出土遺物から判断したものである。実際は、遺構間の切り合い関係等の要素を加味する必要がある。

S-1石垣上層表土	崩落部	淡灰黄色土	城門部西側
瓦	類丸瓦(縄目)	須 恵 器	甕(断面赤色)
		瓦	類片(縄目)、不明製品
S-1b柱痕	崩落部	木 製 品	木片
土 師 器	煮炊具(甕aか)		
S-1石敷下	崩落部	淡白茶色土	城門部A1~2区
土 師 器	煮炊具(甕aか)	瓦	類片(縄目)、平瓦(縄目、一枚作りか)
S-12	城門部A2区	淡白黄色粘土	城門部A1~3区
瓦	類片(縄目)、平瓦(縄目×ナデ消し)	土 師 器	片(供膳具×瓦)
		弥 生 土 器 ?	片(瓦の破片かも)、壺の底部
		瓦	類平瓦
S-13	城門部A0区	崩落部中央Aトレンチ付近表土	崩落部
そ の 他	鈹滓(多い)	土 製 品	ふいご羽口
暗灰褐色土(攪乱)	崩落部南壁(南壁土層6層)	瓦	類平瓦(糸切り、一枚作り)、 平瓦(ナデ消しか、一枚作り)、平瓦(縄目)
土 師 器	坏a (・・・南壁②として遺物取り上げ)		
土 製 品	片(羽口か)・・・南壁③として遺物取り上げ)		
明灰褐色土(攪乱)	崩落部南壁(南壁土層7層)	城門部表土	城門部
石 製 品	白色石(石英塊?、花崗岩中の白い岩脈か) (・・・南壁④として遺物取り上げ)	須 恵 器	甕(断面、暗赤褐色)
そ の 他	鈹滓か (・・・南壁①として遺物取り上げ)	土 師 器	片
		瓦	類片(縄目)、平瓦(縄目、模骨痕ありか?)、 平瓦(一枚づくりか)
淡灰黄色土	城門部東側	城門部表土(植物根層)	城門部
瓦	類平瓦(縄目、糸切り)、平瓦(縄目、模骨)	瓦	類平瓦(縄目)、片(縄目)

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土層土壌硬度測定

使用測定器：山中式土壌硬度計(標準型No.351 (株)藤原製作所 製造番号L0336)
 測定日時：2007/10/23、9:30～12:00、13:00～14:00
 天候：うす曇～曇り、無風
 気温：20℃前後
 計測・記録：井上信正、下高大輔

硬度指数と支持力強度との対照表(標準型)
 $P:100X/0.7952(40-X)^2$
 但し、P:支持強度
 X:「バネ」縮長

計測点01	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	23.0	最小値	23.0	24.6	10	14.6	2.9	1.9	
	2	23.0	20.0	23.0		10				
	3	23.5		23.5		10				
	4	24.0		24.0		11				
	5	24.0		24.0		12				
	6	20.0		20.0		12				
	7	20.0		20.0		6.3				
	8	27.0		27.0		20				
	9	25.0		25.0		14				
	10	28.0		28.0		24				
	11	28.5		最大値		28.5				27
	12	30.0		30.0						
	備考： 真砂を主体とする版築だが、赤土粘土が部分的に入っており、そこは硬い値が出た。									
計測点02	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	23.5	最小値	23.5	23.6	11	11.2	2.2	1.5	
	2	27.0	21.5	27.0		11				
	3	24.0		24.0		12				
	4	25.0		25.0		14				
	5	22.0		22.0		8.5				
	6	24.0		24.0		12				
	7	23.5		23.5		11				
	8	21.5		21.5		8.5				
	9	22.0		22.0		8.5				
	10	23.5		23.5		11				
	11	23.0		最大値		23.0				10
	12	25.0				25.0				14
	備考： 間層①									
計測点03	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	25.0	最小値	25.0	24.7	14	13.3	2.6	1.8	
	2	25.0	23.0	25.0		14				
	3	24.5		24.5		13				
	4	23.0		23.0		13				
	5	26.0		26.0		14				
	6	25.0		25.0		14				
	7	24.5		24.5		13				
	8	24.0		24.0		12				
	9	25.0		25.0		14				
	10	23.5		23.5		11				
	11	24.5		最大値		24.5				13
	12	25.5				25.5				15
	備考： 間層①真下の真砂									
計測点04	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	25.0	最小値	25.0	25.2	14	14.6	2.9	1.9	
	2	26.0	23.5	26.0		17				
	3	23.5		23.5		15				
	4	25.5		25.5		20				
	5	27.0		27.0		12				
	6	24.0		24.0		15				
	7	25.5		25.5		13				
	8	24.5		24.5		13				
	9	24.5		24.5		13				
	10	27.0		27.0		15				
	11	25.5		最大値		25.5				12
	12	24.0				24.0				12
	備考： 間層①下の計測点03下の赤土									
計測点05	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	27.0	最小値	27.0	24.7	20	13.9	2.7	1.8	
	2	24.0	21.0	24.0		12				
	3	24.0		24.0		12				
	4	24.5		24.5		13				
	5	26.0		26.0		17				
	6	26.0		26.0		17				
	7	26.5		26.5		18				
	8	21.0		21.0		9.2				
	9	22.5		22.5		9.2				
	10	22.5		22.5		9.2				
	11	27.0		最大値		27.0				12
	12	24.0				24.0				12
	備考： 間層①下の計測点04下の真砂									
計測点06	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
	1	28.0	最小値	28.0	27.7	24	23.1	4.5	3.0	
	2	28.0	23.0	28.0		24				
	3	28.5		28.5		27				
	4	23.0		23.0		30				
	5	29.0		29.0		20				
	6	27.0		27.0		20				
	7	27.0		27.0		20				
	8	27.0		27.0		20				
	9	27.5		27.5		22				
	10	28.5		28.5		27				
	11	26.0		最大値		26.0				17
	12	30.0				30.0				17
	備考： 赤土主体の版築									

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点07	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	20.5	最小値	20.5	20.1	6.8	6.4	1.3	0.8	
	2	21.0	16.5	21.0		7.3				
	3	20.5		20.5		6.6				
	4	21.0		21.0		7.3				
	5	20.5		20.5		6.8				
	6	22.0								
	7	19.0		19.0		5.4				
	8	19.0		19.0		5.4				
	9	16.5								
	10	19.5		19.5		5.8				
	11	19.0		最大値		19.0				5.4
	12	21.0		22.0		21.0				7.3
	備考: 特になし									
計測点08	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	22.5	最小値	22.5	21.9	9.2	9.0	1.8	1.2	
	2	18.0	18.0			5.8				
	3	19.5		19.5		7.3				
	4	21.0		21.0		6.3				
	5	20.0		20.0		5.8				
	6	19.5		19.5		7.3				
	7	21.0		21.0		13				
	8	24.5		24.5		10				
	9	23.0		23.0		8.5				
	10	22.0		22.0		17				
	11	26.0		最大値		26.0				
	12	26.0		26.0		26.0				
	備考: 特になし									
計測点09	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	18.0	最小値	18.0	21.0	4.7	7.5	1.5	1.0	
	2	21.0	17.5	21.0		7.3				
	3	21.5		21.5		7.9				
	4	23.5		23.5		11				
	5	17.5								
	6	24.0								
	7	21.0		21.0		7.3				
	8	22.5		22.5		9.2				
	9	21.5		21.5		7.9				
	10	21.5		21.5		7.9				
	11	20.5		最大値		20.5				6.8
	12	19.0		24.0		19.0				5.4
	備考: 特になし									
計測点10	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	19.5	最小値	19.5	22.1	5.8	9.0	1.8	1.2	
	2	23.5	18.5	23.5		11				
	3	24.0		24.0		12				
	4	18.5								
	5	21.0		21.0		7.3				
	6	22.5		22.5		9.2				
	7	22.0		22.0		8.5				
	8	24.5		24.5		13				
	9	25.0								
	10	22.0		22.0		8.5				
	11	20.0		最大値		20.0				6.3
	12	22.0		25.0		22.0				8.5
	備考: 特になし									
計測点11	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	16.5	最小値		18.5		5.1	1.0	0.7	
	2	18.5	16.5	18.5		5				
	3	18.0		18.0		4.7				
	4	18.0		18.0		4.7				
	5	17.5		17.5		4.3				
	6	19.5		19.5		5.8				
	7	19.0		19.0		5.4				
	8	21.5								
	9	17.5		17.5		4.3				
	10	20.0		20.0		6.3				
	11	19.0		最大値		19.0				5.4
	12	18.0		21.5		18.0				4.7
	備考: 土塁下の地山表層									
計測点12	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	20.0	最小値		21.2		7.6	1.5	1.0	
	2	21.5	20.0	21.5		7.9				
	3	21.5		21.5		7.9				
	4	22.0		22.0		8.5				
	5	21.0		21.0		7.3				
	6	21.0		21.0		7.3				
	7	22.0		22.0		8.5				
	8	20.0		20.0		6.3				
	9	21.5		21.5		7.9				
	10	21.0		21.0		7.3				
	11	22.0		最大値		22.0				8.5
	12	20.5		22.0		20.5				6.8
	備考: 土塁下の地山本体									
計測点13	測定回	指数(m,m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
										①最大・最小値
	1	21.0	最小値	21.0	19.5	7.3	5.9	1.2	0.8	
	2	18.5	15.0	18.5		5				
	3	18.5		18.5		5				
	4	20.0		20.0		6.3				
	5	20.5		20.5		6.8				
	6	20.0		20.0		6.3				
	7	22.5								
	8	19.0		19.0		5.4				
	9	19.5		19.5		5.8				
	10	15.0								
	11	20.5		最大値		20.5				6.8
	12	17.5		22.5		17.5				4.3
	備考: 特になし									

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比
計測点20	1	18.0	最小値 16.0		18.2	4.7	4.8	0.9	0.6
	2	18.5							
	3	16.0							
	4	19.0							
	5	16.0							
	6	18.0							
	7	18.5							
	8	17.5							
	9	19.0							
	10	20.0							
	11	19.0							
	12	18.0							
							備考: 城門石垣・石敷きを覆う埋土		
計測点21	1	29.5	最小値 24.0		26.5	27	18.9	3.7	2.5
	2	28.5							
	3	27.0							
	4	24.5							
	5	27.0							
	6	27.5							
	7	25.0							
	8	25.5							
	9	24.0							
	10	27.5							
	11	27.5							
	12	25.0							
							備考: 特になし		
計測点22	1	28.0	最小値 23.0		26.0	24	17.6	3.5	2.3
	2	27.5							
	3	26.5							
	4	26.0							
	5	23.0							
	6	29.0							
	7	27.0							
	8	26.0							
	9	23.0							
	10	28.0							
	11	24.0							
	12	24.0							
							備考: 薄い(厚さ0.5cm程度の)粘土と真砂の版築。		
計測点23	1	26.0	最小値 21.0		25.0	17	14.2	2.8	1.9
	2	23.0							
	3	21.0							
	4	25.0							
	5	25.0							
	6	26.0							
	7	26.0							
	8	25.0							
	9	25.0							
	10	25.5							
	11	26.0							
	12	23.0							
							備考: 上下の層より軟らかいようだが、それでも硬い(壁面の突出部分なので、少し乾いているかも。)		
計測点24	1	23.0	最小値 22.0		23.5	10	10.9	2.1	1.4
	2	22.5							
	3	24.0							
	4	24.0							
	5	22.5							
	6	24.0							
	7	23.5							
	8	22.0							
	9	23.0							
	10	26.0							
	11	23.0							
	12	25.0							
							備考: 炭粒が多く含まれる層。間層のようである。		
計測点25	1	23.0	最小値 22.0		24.8	10	13.9	2.7	1.8
	2	22.5							
	3	24.5							
	4	27.0							
	5	23.0							
	6	25.5							
	7	26.0							
	8	25.0							
	9	22.0							
	10	26.5							
	11	27.5							
	12	24.5							
							備考: 計測点22の層に似ている。		
計測点26	1	21.0	最小値 21.0		24.0	10	12.5	2.4	1.6
	2	23.0							
	3	23.5							
	4	27.0							
	5	22.0							
	6	25.5							
	7	23.5							
	8	24.0							
	9	21.0							
	10	27.0							
	11	27.0							
	12	23.0							
							備考: 真砂層。削った感触では、これは硬い層である印象あり。		

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比
計測点20	1	18.0	最小値 16.0	18.0	18.2	4.7	4.8	0.9	0.6
	2	18.5		18.5					
	3	16.0							
	4	19.0		19.0					
	5	16.0		16.0					
	6	18.0		18.0					
	7	18.5		18.5					
	8	17.5		17.5					
	9	19.0		19.0					
	10	20.0							
	11	19.0		19.0					
	12	18.0	最大値 20.0	19.0	5.4				
備考: 城門石垣・石敷きを覆う埋土									
計測点21	1	29.5	最小値 24.0	28.5	26.5	27	18.9	3.7	2.5
	2	28.5		28.5					
	3	27.0		27.0					
	4	24.5		24.5					
	5	27.0		27.0					
	6	27.5		27.5					
	7	25.0		25.0					
	8	25.5		25.5					
	9	24.0							
	10	27.5		27.5					
	11	27.5		27.5					
	12	25.0	最大値 29.5	25.0	22				
備考: 特になし									
計測点22	1	28.0	最小値 23.0	28.0	26.0	24	17.6	3.5	2.3
	2	27.5		27.5					
	3	26.5		26.5					
	4	26.0		26.0					
	5	23.0		23.0					
	6	29.0							
	7	27.0		27.0					
	8	26.0		26.0					
	9	23.0							
	10	28.0		28.0					
	11	24.0		24.0					
	12	24.0	最大値 29.0	24.0	12				
備考: 薄い(厚さ0.5cm程度の)粘土と真砂の版築。									
計測点23	1	26.0	最小値 21.0	26.0	25.0	17	14.2	2.8	1.9
	2	23.0		23.0					
	3	21.0							
	4	25.0		25.0					
	5	25.0		25.0					
	6	26.0		26.0					
	7	26.0		26.0					
	8	25.0		25.0					
	9	25.0		25.0					
	10	25.5		25.5					
	11	26.0		26.0					
	12	23.0	最大値 26.0	23.0	10				
備考: 上下の層より軟らかいようだが、それでも硬い(壁面の突出部分なので、少し乾いているかも。)									
計測点24	1	23.0	最小値 22.0	23.0	23.5	10	10.9	2.1	1.4
	2	22.5		22.5					
	3	24.0		24.0					
	4	24.0		24.0					
	5	22.5		22.5					
	6	24.0		24.0					
	7	23.5		23.5					
	8	22.0							
	9	23.0		23.0					
	10	26.0							
	11	23.0		23.0					
	12	25.0	最大値 26.0	25.0	14				
備考: 炭粒が多く含まれる層。間層のようである。									
計測点25	1	23.0	最小値 22.0	23.0	24.8	10	13.9	2.7	1.8
	2	22.5		22.5					
	3	24.5		24.5					
	4	27.0		27.0					
	5	23.0		23.0					
	6	25.5		25.5					
	7	26.0		26.0					
	8	25.0		25.0					
	9	22.0							
	10	26.5		26.5					
	11	27.5		27.5					
	12	24.5	最大値 27.5	24.5	13				
備考: 計測点22の層に似ている。									
計測点26	1	21.0	最小値 21.0	23.0	24.0	10	12.5	2.4	1.6
	2	23.0		23.0					
	3	23.5		23.5					
	4	27.0		27.0					
	5	22.0		22.0					
	6	25.5		25.5					
	7	23.5		23.5					
	8	24.0		24.0					
	9	21.0		21.0					
	10	27.0							
	11	27.0		27.0					
	12	23.0	最大値 27.0	23.0	10				
備考: 真砂層。削った感触では、これは硬い層である印象あり。									

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比		
計測点27	1	25.0	最小値 20.0	25.0	25.0	14	14.2	2.8	1.9		
	2	23.5		23.5		25.0				11	
	3	26.0		26.0		25.0				17	
	4	25.0		25.0		25.0				14	
	5	26.0		26.0		25.0				17	
	6	26.0		26.0		25.0				17	
	7	25.5		25.5		25.5				15	
	8	23.5		23.5		23.5				11	
	9	23.5		23.5		23.5				11	
	10	25.5		25.5		25.5				15	
	11	20.0		最大値 28.5		20.0					
	12	28.5				28.5					
備考: 土質は粘質土。											
計測点28	1	26.5	最小値 21.5	26.5	25.1	18	14.7	2.9	1.9		
	2	23.5		23.5		25.0				11	
	3	25.0		25.0		25.0				14	
	4	24.5		24.5		25.0				13	
	5	25.0		25.0		25.0				14	
	6	26.0		26.0		26.0				17	
	7	25.0		25.0		25.0				14	
	8	27.5		27.5		27.5				22	
	9	25.0		25.0		25.0				14	
	10	23.0		23.0		23.0				10	
	11	21.5		最大値 27.5		21.5					
	12	27.5				27.5					
備考: 土塁基面の白色粘土と真砂の層。計測点60も同様の層。											
計測点29	1	22.0	最小値 21.0	22.0	22.5	8.5	9.4	1.8	1.2		
	2	22.5		22.5		23.0				9.2	
	3	23.0		23.0		25.0				10	
	4	25.0		25.0		23.0				14	
	5	23.0		23.0		23.0				10	
	6	21.0		21.0		22.5				9.2	
	7	22.5		22.5		22.0				8.5	
	8	22.0		22.0		21.0				7.3	
	9	27.0		27.0		23.0				10	
	10	21.0		21.0		21.0				7.3	
	11	23.0		最大値 27.0		23.0					
	12	21.0				21.0					
備考: 特になし											
計測点30	1	21.0	最小値 21.0	21.0	23.5	11.0	11.0	2.2	1.4		
	2	22.5		22.5		24.0				9.2	
	3	24.0		24.0		23.0				12	
	4	24.0		24.0		25.0				14	
	5	23.0		23.0		24.0				12	
	6	25.0		25.0		24.5				13	
	7	24.0		24.0		22.0				8.5	
	8	26.0		26.0		23.0				10	
	9	24.5		24.5		22.5				9.2	
	10	22.0		22.0		22.5				9.2	
	11	23.0		最大値 26.0		23.0					
	12	22.5				22.5					
備考: 計測点06と同じ赤土版築層											
計測点31	1	26.5	最小値 23.5	26.5	25.8	18	16.5	3.2	2.2		
	2	28.0		28.0		24					
	3	25.0		25.0		25.0				14	
	4	25.0		25.0		25.0				14	
	5	24.0		24.0		25.5				15	
	6	25.5		25.5		25.0				14	
	7	25.0		25.0		27.0				20	
	8	27.0		27.0		25.0				14	
	9	25.0		25.0		27.0				20	
	10	27.0		27.0		27.0				20	
	11	23.5		最大値 30.0		23.5					
	12	30.0				30.0					
備考: 特になし											
計測点32	1	29.5	最小値 20.5	29.5	24.0	12.2	12.2	2.4	1.6		
	2	24.0		24.0		23.0				10	
	3	23.0		23.0		26.5				18	
	4	26.5		26.5		23.0				10	
	5	23.0		23.0		26.5				18	
	6	20.5		20.5		21.5				7.9	
	7	26.5		26.5		22.0				8.5	
	8	21.5		21.5		25.0				14	
	9	22.0		22.0		25.0				14	
	10	25.0		25.0		23.0				10	
	11	23.0		最大値 29.5		23.0					
	12	25.0				25.0					
備考: 特になし											
計測点33	1	22.0	最小値 20.0	22.0	26.8	8.5	20.8	4.1	2.7		
	2	20.0		20.0		24.0				12	
	3	24.0		24.0		28.0				24	
	4	26.0		26.0		28.0				24	
	5	30.0		30.0		29.0				30	
	6	28.0		28.0		27.0				20	
	7	27.0		27.0		28.0				24	
	8	28.0		28.0		28.0				24	
	9	29.0		29.0		27.0				20	
	10	27.0		27.0		28.5				27	
	11	28.5		最大値 30.0		28.5					
	12	26.5				26.5					
備考: 特になし											

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)	地山表層(計測11、	地山(計測12、	
							の平均値	5.1kg/cm2)との硬度比	7.6kg/cm2)との硬度比	
計測点41	1	25.0	最小値 21.0		25.0	24.3	14	12.9	2.5	1.7
	2	22.0								
	3	26.0								
	4	21.0								
	5	26.0								
	6	23.0								
	7	23.0								
	8	22.0								
	9	25.0								
	10	26.5								
	11	24.0								
	12	28.5								
							備考:			
							赤土の層。これが間層①。20071023以後訂正。			
計測点42	1	27.0	最小値 23.0		27.0	25.4	20	15.5	3.0	2.0
	2	26.0								
	3	23.0								
	4	27.0								
	5	25.0								
	6	26.0								
	7	26.0								
	8	26.0								
	9	24.0								
	10	23.5								
	11	26.0								
	12	24.5								
							備考:			
							真砂版築の層。			
計測点43	1	25.0	最小値 24.0		25.0	26.1	14	17.7	3.5	2.3
	2	25.0								
	3	27.0								
	4	26.0								
	5	24.0								
	6	26.0								
	7	29.0								
	8	25.0								
	9	25.0								
	10	24.5								
	11	30.0								
	12	28.0								
							備考:			
							H19指導委員会資料ではこれを間層①としていたが、計測点41の層を間層①と訂正する。			
計測点44	1	24.0	最小値 18.0		24.0	22.3	12	9.3	1.8	1.2
	2	23.5								
	3	23.5								
	4	18.0								
	5	24.0								
	6	22.0								
	7	22.0								
	8	18.0								
	9	22.0								
	10	24.0								
	11	22.0								
	12	21.5								
							備考:			
							真砂部分を計測。			
計測点45	1	23.0	最小値 20.0		23.0	24.6	10	13.6	2.7	1.8
	2	20.0								
	3	24.5								
	4	24.0								
	5	23.5								
	6	28.0								
	7	23.0								
	8	26.0								
	9	24.0								
	10	27.5								
	11	25.5								
	12	25.0								
							備考:			
							赤土部分を計測。			
計測点46	1	16.0	最小値 16.0		23.5	24.1	11	12.2	2.4	1.6
	2	23.5								
	3	26.0								
	4	23.0								
	5	25.0								
	6	27.0								
	7	23.0								
	8	23.5								
	9	24.5								
	10	24.5								
	11	23.0								
	12	24.5								
							備考:			
							間層②の北側部分。			
計測点47	1	22.0	最小値 20.0		22.0	22.8	8.5	10.2	2.0	1.3
	2	24.0								
	3	26.0								
	4	20.0								
	5	24.0								
	6	21.0								
	7	21.0								
	8	22.0								
	9	26.0								
	10	23.5								
	11	21.5								
	12	23.0								
							備考:			
							間層②の南側部分。			

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm ²)	支持力(kg/cm ²)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm ²)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm ²)との硬度比	
計測点48	1	26.5	最小値	26.5	26.4	18	18.1	3.5	2.4	
	2	22.0		22.0		26.4				17
	3	26.0		26.0		26.4				17
	4	27.0		27.0		26.4				20
	5	28.0		28.0		26.4				24
	6	25.0		25.0		26.4				14
	7	26.0		26.0		26.4				17
	8	27.0		27.0		26.4				20
	9	26.0		26.0		26.4				17
	10	28.0		28.0		26.4				20
	11	27.0		27.0		26.4				20
	12	25.0	最大値	25.0	26.4	14	備考: 赤土部分を計測。			
計測点49	1	29.5	最小値	29.5	26.3	15	17.7	3.5	2.3	
	2	23.0		23.0		26.3				20
	3	25.5		25.5		26.3				15
	4	27.0		27.0		26.3				20
	5	28.0		28.0		26.3				24
	6	26.0		26.0		26.3				17
	7	27.0		27.0		26.3				20
	8	25.5		25.5		26.3				15
	9	25.0		25.0		26.3				14
	10	27.5		27.5		26.3				22
	11	25.5		最大値		25.5				26.3
	12	25.5	29.5	25.5	26.3	15				
計測点50	1	22.0	最小値	22.0	22.9	8.5	9.9	1.9	1.3	
	2	23.0		23.0		22.9				10
	3	23.5		23.5		22.9				11
	4	22.0		22.0		22.9				8.5
	5	22.0		22.0		22.9				8.5
	6	24.0		24.0		22.9				12
	7	23.5		23.5		22.9				11
	8	23.5		23.5		22.9				11
	9	23.5		23.5		22.9				11
	10	21.5		21.5		22.9				7.9
	11	24.5		最大値		24.5				22.9
	12	20.0	24.5	20.0	22.9	7.9				
計測点51	1	20.0	最小値	20.0	21.5	6.3	8.3	1.6	1.1	
	2	23.0		23.0		21.5				10
	3	15.5		15.5		21.5				7.9
	4	23.0		23.0		21.5				10
	5	21.5		21.5		21.5				7.9
	6	20.5		20.5		21.5				6.8
	7	24.0		24.0		21.5				12
	8	20.0		20.0		21.5				6.3
	9	22.0		22.0		21.5				8.5
	10	23.0		23.0		21.5				10
	11	25.0		最大値		25.0				21.5
	12	18.0	25.0	18.0	21.5	4.7				
計測点52	1	22.0	最小値	22.0	21.7	8.5	8.2	1.6	1.1	
	2	19.5		19.5		21.7				5.8
	3	21.0		21.0		21.7				7.3
	4	22.0		22.0		21.7				8.5
	5	20.0		20.0		21.7				6.3
	6	17.0		17.0		21.7				6.3
	7	22.0		22.0		21.7				8.5
	8	23.0		23.0		21.7				10
	9	23.0		23.0		21.7				10
	10	21.0		21.0		21.7				7.3
	11	23.0		最大値		23.0				21.7
	12	25.5	25.5	21.7	21.7	10				
計測点53	1	27.0	最小値	27.0	24.7	20	13.7	2.7	1.8	
	2	27.0		27.0		24.7				20
	3	22.5		22.5		24.7				9.2
	4	25.0		25.0		24.7				14
	5	24.0		24.0		24.7				12
	6	23.0		23.0		24.7				10
	7	25.0		25.0		24.7				14
	8	28.0		28.0		24.7				20
	9	21.0		21.0		24.7				13
	10	24.5		24.5		24.7				13
	11	24.5		最大値		24.5				24.7
	12	24.0	28.0	24.0	24.7	12				
計測点54	1	27.0	最小値	27.0	24.6	20	13.7	2.7	1.8	
	2	25.0		25.0		24.6				14
	3	22.5		22.5		24.6				9.2
	4	22.0		22.0		24.6				8.5
	5	25.0		25.0		24.6				14
	6	20.0		20.0		24.6				8.5
	7	22.0		22.0		24.6				8.5
	8	26.0		26.0		24.6				17
	9	27.0		27.0		24.6				20
	10	25.0		25.0		24.6				14
	11	24.0		最大値		24.0				24.6
	12	27.0	27.0	24.6	24.6	12				

tab48-3 大野城跡第 48 次調査 土塁土壌硬度測定

計測点	測定回	指数(m.m)	①最大・最小値	②①を除く集団	②の平均値	支持力(kg/cm2)	支持力(kg/cm2)の平均値	地山表層(計測11、5.1kg/cm2)との硬度比	地山(計測12、7.6kg/cm2)との硬度比	
計測点61	1	22.0	最小値 16.5	22.0	19.9	8.5	6.4	1.3	0.8	
	2	21.5		21.5		7.9				
	3	20.0		20.0		6.3				
	4	21.0		21.0		7.3				
	5	20.5		20.5		6.8				
	6	19.5		19.5		5.8				
	7	17.0		17.0		4				
	8	20.0		20.0		6.3				
	9	16.5								
	10	22.0								
	11	21.0		最大値		21.0				7.3
	12	16.5	22.0	16.5	3.8					
備考: 土塁下の地山表層とみられる。計測点60より10~15cm下で計測。										
計測点62 調査区北壁	1	22.5	最小値 19.0	22.0	22.7	8.5	9.8	1.9	1.3	
	2	22.0		21.5		7.9				
	3	21.5		22.0		8.5				
	4	22.0		24.5		13				
	5	24.5		22.5		9.2				
	6	22.5		24.0		12				
	7	24.0								
	8	25.0								
	9	23.5		23.5		11				
	10	19.0								
	11	22.0		最大値		22.0				8.5
	12	22.5	25.0	22.5	9.2					
備考: 表土下の黄色土(表土流入層)										
計測点63	1	20.5	最小値 18.0	20.5	20.2	6.8	6.6	1.3	0.9	
	2	22.0		22.0		8.5				
	3	22.0								
	4	19.0		19.0		5.4				
	5	21.5		21.5		7.9				
	6	21.0		21.0		7.3				
	7	21.0		21.0		7.3				
	8	18.0								
	9	20.0		20.0		6.3				
	10	19.0		19.0		5.4				
	11	20.0		最大値		20.0				6.3
	12	18.0	22.0	18.0	4.7					
備考: 計測点14・15に対応する層。真砂主体。										
計測点64	1	17.0	最小値 14.5	17.0	16.1	4	3.5	0.7	0.5	
	2	16.0		16.0		3.5				
	3	14.5								
	4	17.0		17.0		4				
	5	15.5		15.5		3.2				
	6	16.0		16.0		3.5				
	7	17.0		17.0		4				
	8	18.5								
	9	16.0		16.0		3.5				
	10	15.5		15.5		3.2				
	11	14.5		最大値		14.5				2.8
	12	16.0	18.5	16.0	3.5					
備考: 版築前面の急斜面に薄く積もった層。明らかに、土塁上位の真砂版築の表面が自然に崩れて薄く前面に溜まったものと観察される。										
計測点65	1	22.0	最小値 16.5	22.0	19.5	8.5	6.0	1.2	0.8	
	2	16.5		20.0		6.3				
	3	20.0		18.0		4.7				
	4	18.0		17.0		4				
	5	17.0		20.5		6.8				
	6	20.5		18.0		4.7				
	7	18.0		18.0		4.7				
	8	18.0		19.5		5.8				
	9	19.5		20.0		6.3				
	10	20.0								
	11	22.0		最大値						
	12	21.5	22.0	21.5	7.9					
備考: 版築前面の急斜面に薄く積もった層。計測点64の下位に堆積。										
計測点66	1	16.5	最小値 12.5	16.5	16.2	3.8	3.7	0.7	0.5	
	2	12.5		13.5		2.4				
	3	13.5		16.0		3.5				
	4	16.0		16.0		3.5				
	5	16.0		19.0		5.4				
	6	19.0		15.0		3				
	7	15.0		15.5		3.2				
	8	15.5		13.0		2.2				
	9	13.0								
	10	19.0								
	11	18.5		最大値		18.5				5
	12	18.5	19.0	18.5	5					
備考: 版築前面の急斜面に薄く積もった層。明らかに、土塁下位の赤土版築の表面が自然に崩れて薄く前面に溜まったものと観察される。										

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



第 40 次調査 調査区全景（北から）



第 40 次調査 北地区 全景（南東から）



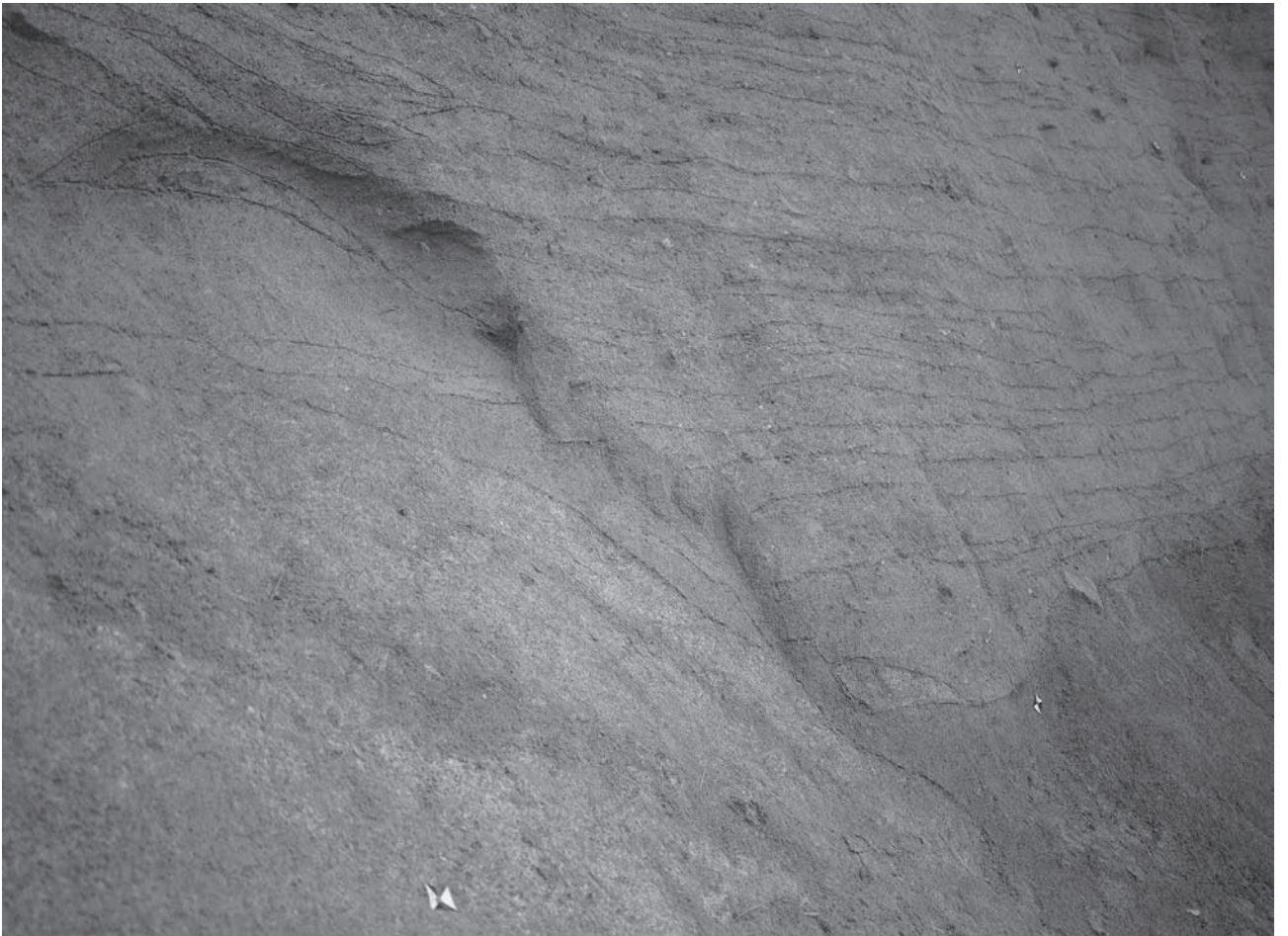
第 40 次調査 北地区 土壘版築状況（北東から）



第 40 次調査 北地区 土壘版築状況（南東から）



第 40 次調査 北地区 土塁版築近景（南東から）



第 40 次調査 北地区 土塁段切り盛土状況（南東から）



第 40 次調査 北地区 土塁基底部の地山に切り込む小穴群（北側部、南東から）



第 40 次調査 北地区 土塁基底部の地山に切り込む小穴群（北東から）



第40次調査 南地区 全景（南東から）



第40次調査 SB005 原口城門 全景（上が東）



第40次調査 SB005 原口城門 土塁外側状況（上が東）



第40次調査 SB005 原口城門 土塁内側状況（上が東）



第 40 次調査 SB005 原口城門内側 調査前状況（南西から）



第 40 次調査 SB005 原口城門外側状況（北東から）



第 40 次調査 SB005 北側軸摺穴石検出時（西から）



第 40 次調査 SB005 南側軸摺穴石検出時（南から）



第 40 次調査 SB005 北側軸摺穴石検出状況（東から）



第 40 次調査 SB005 南側軸摺穴石検出状況（東から）



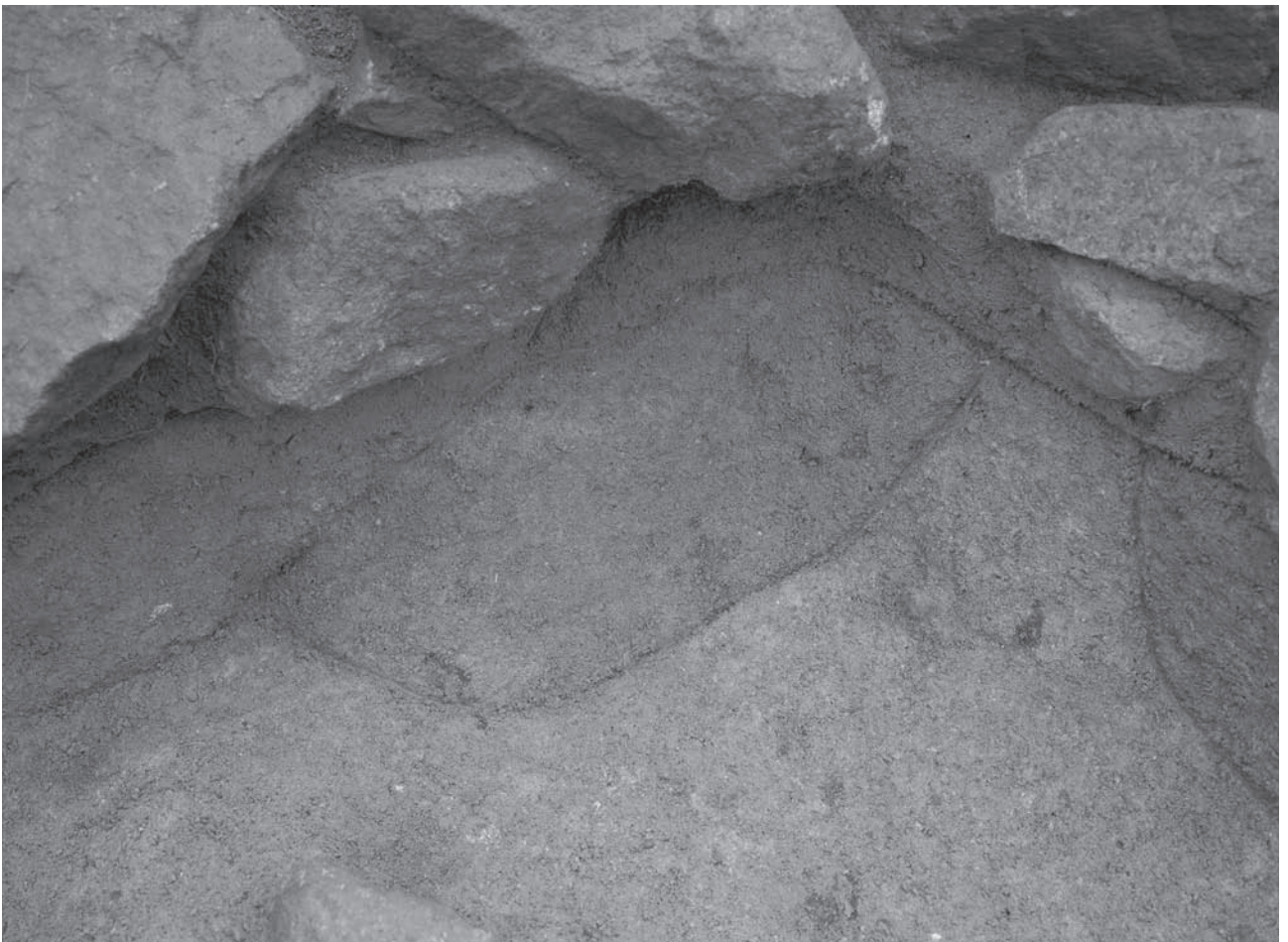
第 40 次調査 SB005 城門外側 南壁検出状況（北から）



第 40 次調査 SB005 城門外側 北壁検出状況（南から）



第 40 次調査 SX006 検出状況 (南西から)



第 40 次調査 SX007 検出写真 (北から)



第 40 次調査 南地区 土壘版築状況（東から）



第 40 次調査 南地区 土壘版築状況（南から）



第 40 次調査 南地区 土墨基底部の小穴群 北側配列状況（南から）



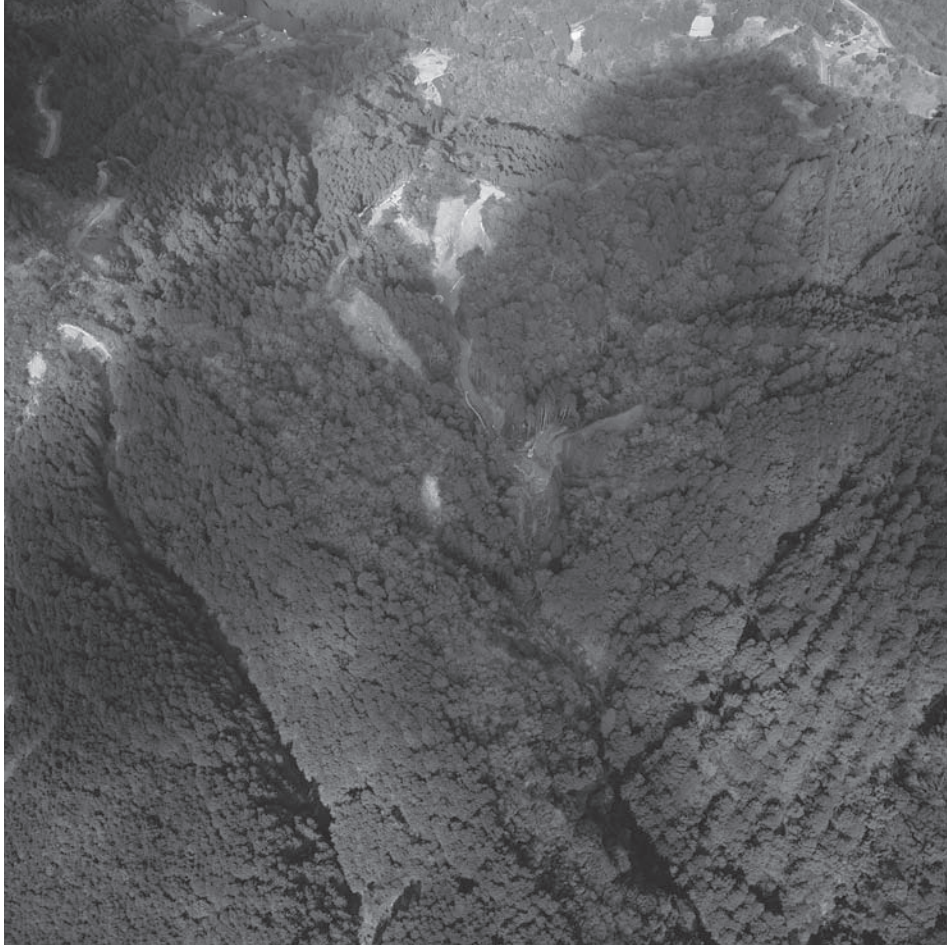
第 40 次調査 南地区 土墨基底部の小穴群 中側配列状況（南から）



第40次調査 南地区 土塁基底部の小穴群 南側配列状況（北東から）



第40次調査 SX014・SX042 半裁時土層観察（北東から）



第 45 次調査 大石垣 航空写真（南西から）



第 45 次調査 大石垣 航空写真（西から）



第 45 次調査 大石垣正面 積石崩落状況（南西から）



第 45 次調査 大石垣正面 積石崩落状況（西から）



第 45 次調査 大石垣正面 積石崩落状況（南から）



45 次調査 B 地点 土層観察状況（南から）



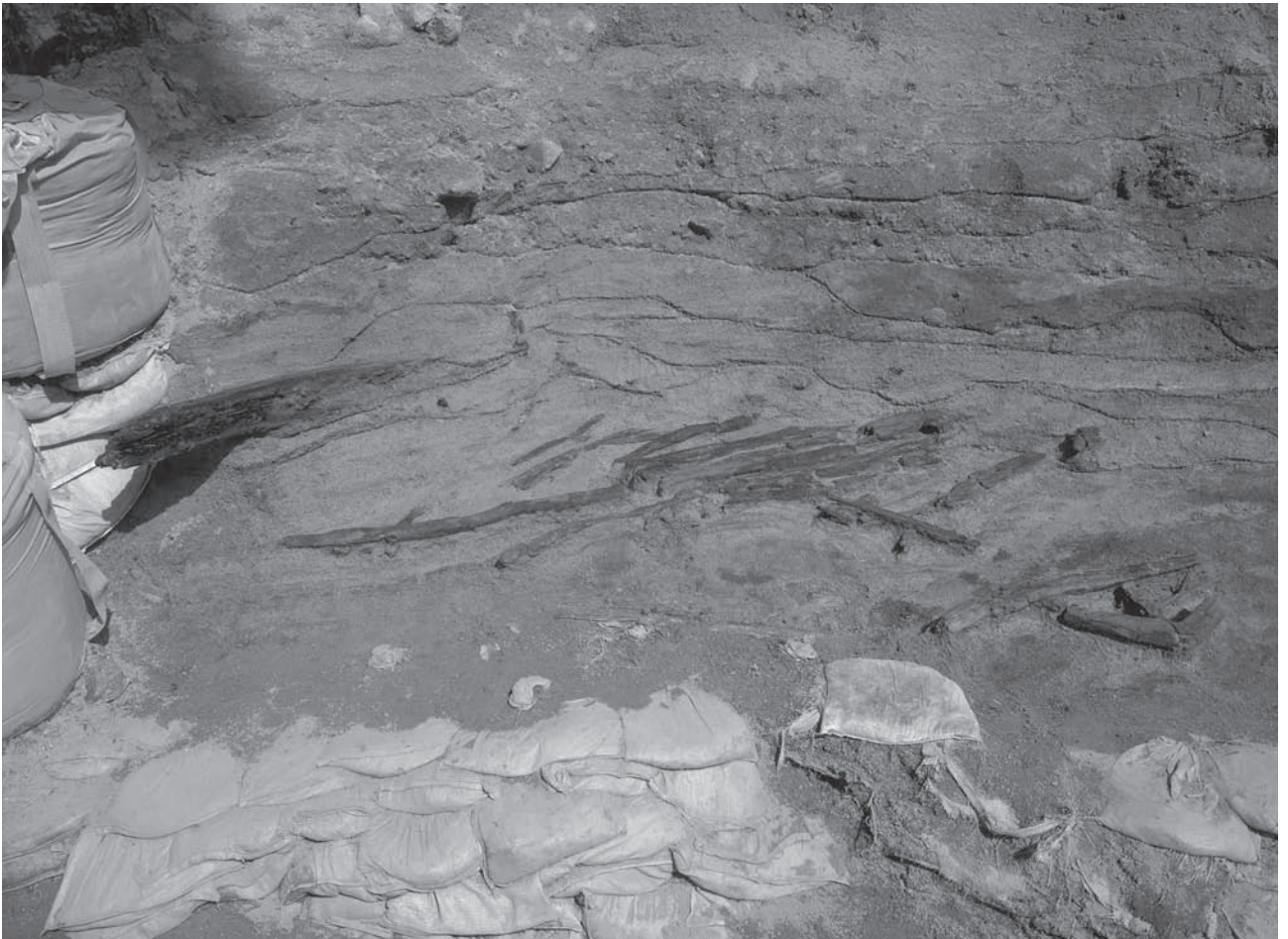
第 45 次調査 C 地点（東から）



第 45 次調査 D 地点 白黄色砂除去後（北西から）



第 45 次調査 D 地点 岩盤割り込み検出状況（北東から）



第 45 次調査 D 地点 明茶灰色砂層 木製品出土状況（西から）



第 45 次調査 1 トレンチ 北側土層（南東から）



第 45 次調査 2 トレンチと登山道敷石検出状況（南東から）



第45次調査 3トレンチ 大石垣断面状況（北西から）



第45次調査 大石垣 調査後側面全景（北西から）



第 45 次調査 大石垣正面 石垣下部状況（南西から）



第 45 次調査 大石垣 西側面崩落状況（南東から）



第 45-2 次調査 2 トレンチ 北西壁 土層観察 (南東から)



第 45-2 次調査 2 トレンチ 中央ベルト 土層観察 (北西から)



第 45-2 次調査 大石垣上面 SF022 石敷除去 下層礫検出状況（南東から）



第 45-2 次調査 4 トンチ 灰青砂掘下げ中断時 調査区北壁土層観察（北東から）



第45-2次調査 4トレンチ 灰青砂掘下げ中断時 調査区南壁土層観察（北から）



第45-2次調査 大石垣前面状況（南西から）



第 45-2 次調査 大石垣前面 基底部状況（西から）



第 45-2 次調査 大石垣前面 基底部状況（西から）



第 45-2 次調査 大石垣欠損部東側 断面石積み状況（西から）



第 45-2 次調査 大石垣欠損部西側 石垣確認時（東から）



第 48 次調査 崩落部 調査前草刈後状況 調査区南側状況（北東から）



第 48 次調査 崩落部 調査前草刈後状況 南壁部（東から）



第 48 次調査 崩落部 土層観察 (南から)



第 48 次調査 崩落部調査区南壁 土層観察 (北から。南壁手前が B トレンチ)



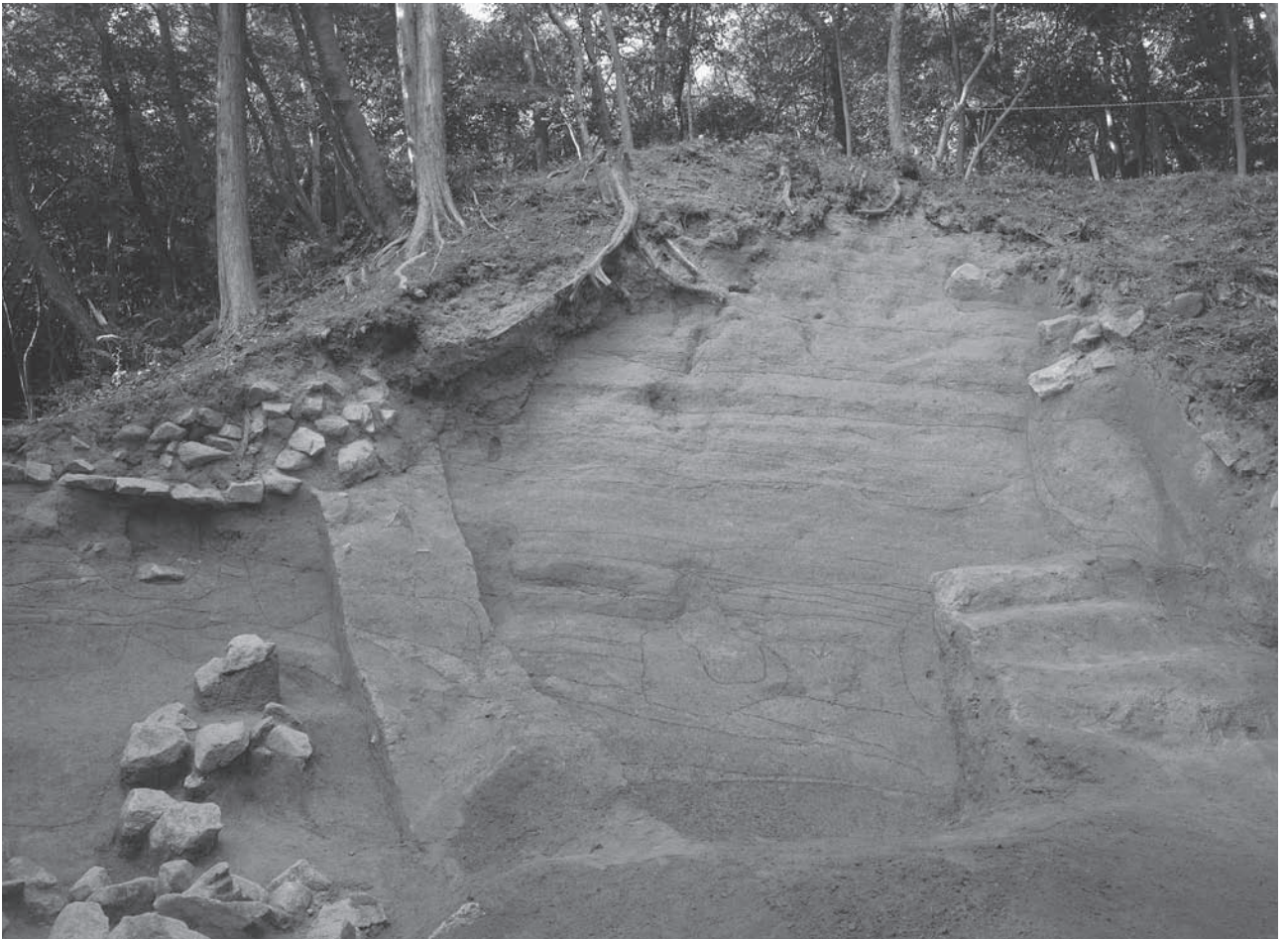
第 48 次調査 崩落部 調査区北壁土層観察（南から）



第 48 次調査 崩落部 土塁前面南側 土層観察（東から）



第 48 次調査 崩落部 土塁前面中央 土層観察（東から）



第 48 次調査 崩落部 土塁前面北側 土層観察（東から）



第 48 次調査 崩落部 SB001a 土層観察（東から）



第 48 次調査 観世音寺口城門 全景（東から）



第 48 次調査 観世音寺口城門 石敷の高さから撮影（東から）



第 48 次調査 城門部 石敷・階段検出状況（北西から）



第 48 次調査 城門部 階段と石敷（東から）



第 48 次調査 土塁内側 馬責めから観世音寺口城門を望む（西から）



fig40-8-1 SB005 黄褐色土 須恵器坏 a(内面)



fig40-8-4 SB005 黄褐色土 土師器碗 c1(外面)



fig40-8-6 SB005 黄褐色土 軒丸瓦(外面)



fig40-14-28 SB005 黄褐色土 平瓦(凸面)



fig45-6-6 白黄色砂層 須恵器蓋 3(外面)



fig45-6-9 白黄色砂層 須恵器壺 a(小型)(外面)



fig45-8-5 明茶灰色砂層 木製品柱材(裏横から)



fig45-9-13 明茶灰色砂層 木製品くびき(裏から)



fig45-2-3-5 暗灰青色砂層〔4トレ〕 須恵器坏c(横から)

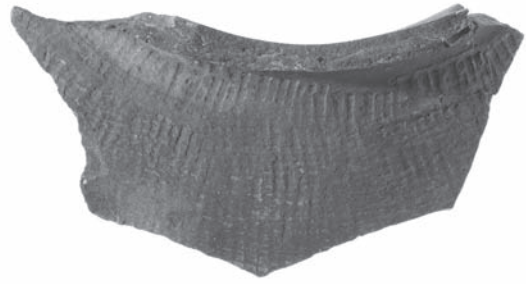


fig45-2-3-6 暗灰青色砂層〔4トレ〕 須恵器甕(外面)

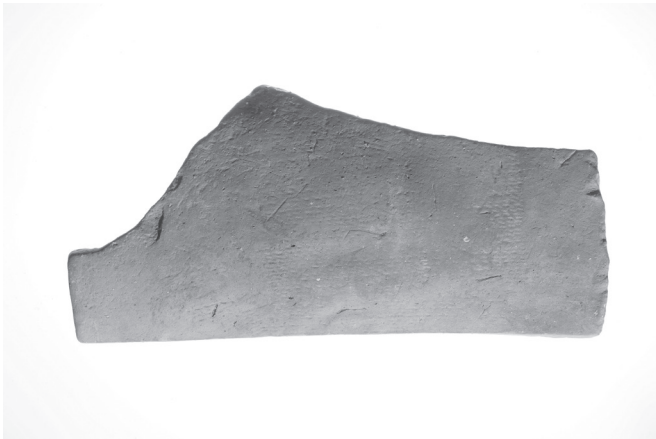


fig45-2-3-10 灰青色砂層〔4トレ〕 平瓦(凸面)



fig45-2-4-17 表土 土師器皿b(内面)



fig48-9-1 SB001〔崩落部石垣上層〕 丸瓦(斜め前)



48SB001b 柱痕崩落部土師器煮炊具(外面)



48SB001 崩落部石敷下土師器煮炊具(外面)

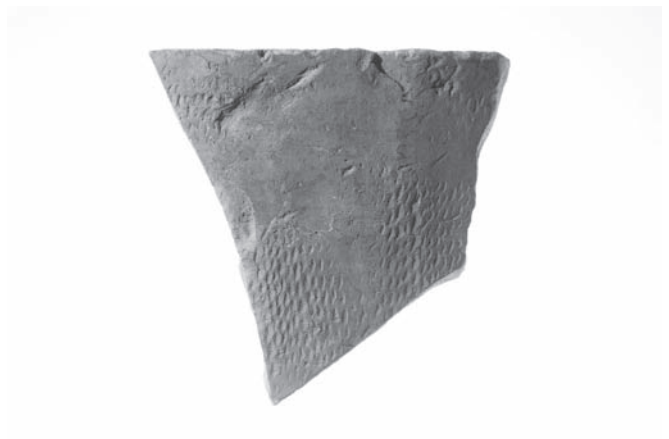


fig48-9-7 淡灰黄色土層〔城門部東側〕 平瓦(凸面)

報告書抄録

ふりがな	おおのじょうあと									
書名	大野城跡1									
副書名	第40・45・45-2・48次調査報告書									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第125集									
編著者名	井上信正・松浦智・城戸康利									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2015(平成27)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【井上案】	ふりがな 所在地	コード		座標(日本測地系第II系)		発掘期間		発掘面積 ㎡	発掘原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
おおのじょうあと 大野城跡 第40次	条坊外	ふくおかけんだざいふし 福岡県太宰府市 だざいふ 大字太宰府	402214	300136 300124	58796	-43910	20041220	20050331	400	災害復旧事業
大野城跡 第45次	条坊外	さかもと 大字坂本	402214	300136 300124	58465	-44600	20060117	20060331	250	災害復旧事業
大野城跡 第45-2次	条坊外	さかもと 大字坂本	402214	300136 300124	58465	-44600	20060926	20070326	250	災害復旧事業
大野城跡 第48次	条坊外	かんぜおんじ 大字太宰府・観世音寺	402214	300136 300124	58360	-44345	20070920	20080331	133.8	災害復旧事業
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
大野城跡 第40次調査	城	飛鳥・奈良・平安	城門・版築土塁		土器・瓦		原口城門を発見した。			
第45次調査	城	飛鳥・奈良・平安	石垣		土器・瓦・木製品					
第45-2次調査	城	飛鳥・奈良・平安	石垣		土器・瓦					
第48次調査	城	飛鳥・奈良・平安	城門・版築土塁		土器・瓦		観世音寺口城門を発見した。			
要約	平成15年7月に発生した集中豪雨により、特別史跡大野城跡では多くの遺構被害が発生した。この災害復旧事業に伴い大野城跡南側で行った3ヶ所の発掘調査について報告を行った。調査では、大野城跡の土塁・石塁の知見を得ることができ、また2ヶ所で城門を新たに発見し知見を得た。									

太宰府市の文化財 第125集

大野城跡 1

- 第40・45・45-2・48次調査 -

平成27(2015)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺 1-1-1

印刷 株式会社 四ヶ所